REUNION AND FAREWELL VOL.23

EL ZINE

the [international] kvlt conspiracy



K-Town Punk Again!!

D.S.-13 kriegshög S.P. CAOS

Riot City Records Simon Edwards interview

IV REICH KAFKA

RECORDSHOPS RECOMMENDED RECORDS 2016 レコード屋さんのオススメ音盤

LASHING SPEED DEMONS MERCYFUL FATE

distanasia

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE REUNION AND FAREWELL VOL.23



CONTENTS VOL.23

Front & Second Cover Photos by Thomas Kofoed Owlpuke

GORILLA ANGREB



GORILLA ANGREB is BACK!
とある夏の昼下がりin 2016、NYの知り合いから「今度、LAで開催されるBerserk Townフェスティヴァルに行くんだぁ〜」という比較的どうでもいいメールが来ました。僕は、そのとき大変にヒマだったので「どんなバンドが出るんだろ?」と何気なく出演バンドをチェックしてみたところ、ナ、ナ、ナ、ナントそこにはGORILLA ANGREBの文字が(…他にはPSYCHIC TVも出演していたり)!!
え、再結成したの?!全然知らなかった!エライこっちゃ!!と、慌ててドラムのTommasにメール・アタックしたところ、「やっているよ〜」と。
僕にとっての"2000年代のパンク・ロック"とは、GORILLA　ANGREBとMASSHYSTERIの2バンドに尽きた、…と言ったら流石に過言が過ぎますが、そのくらいに愛してやまないバンドなので、この機にインタヴューしないわけにはいきません!
未発表音源の話しから、解散の理由などなど、隠し立てすることなく赤裸々にメンバー全員[Mai(Vo/以下M)、Peter(Gu/以下P)、Simon(Ba/以下S)、Tommas(Dr/以下T)]で語ってくれましたので、メンバーの関連ディスク・ガイドと併せてドウゾお楽しみくださいませ。
尚、彼らは再びの日本ツアーを熱烈に熱望しているので、興味がある方は是非コンタクトをとってみてください。ゴリラの反撃は今、始まったばかりなのです!

PHOTO:Thomas Kofoed Owlpuke (except ※)



年をとって、私は内面的に よりパンクになったみたい

↓※Photo by Hans Nathue



■最初に、GORILLA ANGREBが2007年に解散した理由を聞かせてください。たしか、Maiが勉学のためにバンドを抜けて、新しい女性ヴォーカルを探したけど見つからなかった。これで合っていますか?

P「そうだな、Maiが最初に、もうバンドをやりたくないと言い出したんだ。たしかに学校というのも多少は理由としてあっただろうけど、俺が思うに彼女は疲れ切っていたんだと思う。彼女はバンドに対する想いがなくなっていたんだよ。彼女がそのことを話した相手は、俺が最初だった。そして、彼女が最も気にかけていたのは、みんなを失望させてしまうことだったんだ。彼女はバンドを辞めることを決意したが、俺は実は嬉しかった。なぜなら、俺ももう心底このバンドをやりたくなかったから。だけど、俺はそのことをなかなか言い出せなかったんだ。しかしMaiが辞めたことによって、俺が手を下すことなく、このバンドはもう終わると俺は考えた。俺は何か他のことがやりたかったんだよ。作曲も遅々として進まず、全く刺激的ではなくなっていたしね。でも、TommasとSimonは続けたがっていて、新しいシンガーを見つける話しをしていた。しかもオーディションをして一人見つかったんだ。だから俺も、もうバンドを続けたくないと彼らに伝えたんだ。新しいシンガーで続けることがなくて、俺は良かったと思っている。きっと、新しいシンガーでもバンドは続けられただろうけど、俺は数年を共に過ごした、この同じメンバーのままを望んでいた。活動しているかどうかに関わらずね」

M「私がバンドを抜けたのは本当よ。当時、私はツアーをしても楽しくなかったし、リハーサルなんてやりたくもなかった。私の心はボロボロだったの。だから私は立ち止まって、自分の時間を他のことに費やしたかったのよ」

■GORILLA ANGREBの解散後、TommasはMOONLESSというバンドを始めましたが、他のメンバーは新しいバンドを始めましたか?

P「当時、俺はまだNO HOPE FOR THE KIDSをやっていたんじゃないかな。それと、多分ソロ名義のP.J. Bonnemanの音源にも取り掛かっていたはずさ。確かではないけどね。あとは予算のないスプラッター・ホラー映画の製作をしたり、あとはMasstropicasというレコード・レーベルを運営しているMichael Pigottと一緒に、GREEN MANSIONSというレコーディング・プロジェクトをよくやっていたな。ただ、SUN BATHERをやるまでは、バンドとしてライヴで演奏をするって活動は全然していなかった。P.J. Bonnemanとしては、俺が作曲したアコースティックのフォーク・ソングを数曲携えて、アメリカを少しだけツアーしたよ。2回ほど演奏したんだ」

T「君が言ったように僕はMOONLESS(R.I.P)でプレイしていた。それからSUN BATHERにPeterと一緒に加わったんだ。それと最近、COLA FREAKSをやっていた友だちと新しいバンドも始めたところさ。まだ名前はないんだけど、話し合って曲を作っているよ」

M「映画とアニメーションを学ぶために学校に通っていた。解散してからは音楽はやっていなかったわ、全然関わっていなかったの」

S「俺は当時、まだLOS RETARDOSをやっていたな。その後にLOCATORSを結成した。今はTHE SLINKERSという新バンドでプレイしている」

■話しに出たSUN BATHERについても知りたいのですが、このバンドの結成はいつですか?どうやってメンバーは集まったのでしょう?GORILLA ANGREBでBURIALとかBORN DEADと対バンしたことはあるんですか?BORN DEADをやっていたWillは、ドイツでNO MORE ARTとかもやっていましたよね。

P「俺がドイツに住んでいたときにSUN BATHERを思いついたんだよ。俺がFabian(SUN BATHER、BURIAL、HYPNOTIC SLEEP、THE FULMARS)の練習スペースに時々足を運んでね、そこで何曲か録音したんだ。そのうちの2曲のロックンロール・ソングを、Tommasにリリースしてもらえないか頼んだのさ。バンド名は昔のメンズ雑誌を見ていたときに閃いたんだ。表紙にこの言葉が載っていてね(※「SUN BATHER」は、「日光浴をする人」という意味)。Tommasは俺たちの曲を気に入ってくれたし、彼が返事をする前に、実はもう2ndシングルをレコーディングしていたんだよ。だけど、本当にツアーを計画するようなライヴ・バンドになるなんて思ってもいなかった。でもWill(NO MORE ART)が、ハンブルグで何回かショーをしてみたくはないかと聞いてきてくれて、しかもベーシストが必要とあらば是非自分が弾きたいと名乗り出てくれたのさ。それで俺はTommasにセカンド・ギターをやってもらえないか頼んだ。また一緒にバンドをやれたら楽しいんじゃないかと思ってね。そうしたらTommasはギターを弾きたくないと言うので、彼にはベースを弾いてもらって、代わりにWillにセカンド・ギターを任せたんだ」

■SUN BATHERのサウンドを自身ではどう表現しますか?ヴィンテージな音色のガレージ・ロックンロールに僕は感じましたが。とにかく、これまでのバンド・キャリアとは似ても似つかないサウンドですよね。

P「ガレージ・ロックンロール・サウンドってのは正しいよ。俺たちがこれまでやってきたどのバンドとも、まるで違うサウンドかっていうと、

俺には分からないけどね。俺はずっとロックンロールが好きだったし、俺が今まで作ってきた曲には、ロックンロールの要素がかなりあったんじゃないかと感じてはいるけどさ」

■それでは、どうしてGORILLA ANGREBを再結成しようと?今年のことですか?活動していなかったときも、メンバー同士で会ってはいたのでしょうか?

P「俺は主に、Tommasとは連絡を取り合っていたよ。俺のバンドを彼がリリースしていたり、他のバンドで一緒にプレイもしていたからね。でも、みんなが再び定期的に会うようになったのは本当にナイスだと思う。NO HOPE FOR THE KIDSは昨年、ロサンゼルスで開催された2回目となるBerserk Townフェスティヴァルへの出演をオファーされて、そこで演奏したんだ。そのときに、フェスティヴァルの企画者であるGraemがGORILLA ANGREBの出演に興味を示してくれてね。それで他のメンバーに話してみたらみんな乗り気でさ。オファーのタイミングもバッチリだったね」

■長い間、多くの人たちがGORILLA ANGREBの復活を待ちわびていました(僕もです!)。アメリカやデンマークでショーをやってみて、オーディエンスの反応はどうでしたか?

M「本当に素晴らしかったわ!古くからのファンはものすごく支持してくれているし、新しいファンもたくさんいる。解散してからも私たちの音楽は生き続け、そして広がっていったなんて素敵なことよね」

■アメリカにGORILLA ANGREBを招聘したのは誰なんですか?久しぶりのアメリカでしたよね?

P「Graem Flegenheimerという男が、俺たちをアメリカに招いてくれたのさ。GORILLA ANGREBにとっては久々のアメリカだったね。けど、個人的にはこの8年間くらいはほぼ毎年、アメリカに行っていたよ。家族旅行や友人を訪ねて行ったり、GREEN MANSIONSのレコーディング、それにNO HOPE FOR THE KIDSとしてもね。あとは、この2年近くやっている0%というバンドでも行っているよ」

■最近のショーをYoutubeの動画で見ました。再結成したバンドってイマイチなこともあるので、時々ガッカリさせられますが、GORILLA ANGREBは本当にエネルギッシュで格好良かったです!演奏もヴォーカルも完璧でした。再始動する前に、どのくらいリハーサルをやったのですか?

P「リハーサルなんて全然やらなかったよ。だけど、問題なかったね。勘を取り戻すにはちょっと時間がかかったけど、それほど大変でもなかったよ。たしかに再結成するとダメになることもある。そのことについて俺たちは話し合っていたよ。俺たちがしたかったことは、再びこのバンドに対して夢中になれたのならば、みんなに良いショーを見せて、俺たちが築き上げたこのバンドの名を汚したくなかったってことさ」

M「私はステージ上でちゃんと歌えたり、踊ったり、クレイジーになれるよう、ランニングやトレーニングをものすごくやったわ。今、私は人生の中でもベストな健康状態にあるわね。だけど時々、リハーサルをする時間を見つけることすらも大変なの。メンバーのうち3人には子供がいるからね」

S「最初の再結成ショーをする前に、全員揃ってリハーサルをした時間は、実際のところ6〜7時間くらいじゃないかな。だけど俺とPeterはその前から何度か会っていたんだ。君も知っての通り、ギターとベースとしてね」

■Tommasが、2006年にヴォーカルなしでレコーディングした曲が2曲あると以前に言っていたのですが、どうして当時ヴォーカルを録らなかったのですか?

T「ヴォーカルを録り終える前に、バンドが解散してしまったんだ。そして解散後には、誰もその音源を甦らせたいなんて衝動に駆られることもなかった。僕たちはもう、このバンドでは完全に燃え尽きたんだ。だから、あの頃はもう、その音源にエナジーを費やす気なんてなかったのさ。しかし、僕たちは今、戻ってきた。だから音源を完成させて、リリースしたいと思っているよ。2017年の春には、僕のレーベルであるHjernespind Recordsからリリースされるんだ」

■最近のK-Townパンク・シーンはどうなっていますか?この10年で大きく様変わりしたのでしょうか?あなたたちと同世代で、活動しているバンドっていますか?新世代のバンドが出てきているのでしょうか?

P「ボランティアによって運営されていた、コペンハーゲンの元スクワット・ハウス"Ungdomshuset"は2007年に取り壊されてしまった。それ自体は悲しい出来事だった。だけど実際のところ、音楽シーンに多くの良いこともたらしたんだ。色んな人たちがショーを一緒にするようになっていったし、それによって、シーンに多様性が増したと思う。デンマークのパン



※Photo by Hans Nathue

ク・シーンで、10年以上も活動しているバンドは多くないね。アンダーグラウンドのバンドは何年か同じことを繰り返すとみんな飽き飽きしちゃって、何か新しいことをしたがるんだ。ただ、小さなシーンだから、バンドが解散しても新たなスタイルのバンドを結成するのは良いことさ」

T「GORILLA ANGREBが関わっていた、90年代後半から2000年代初頭のシーンにいた何人かは今でも活動しているよ。例えばNIGHT FEVERやWAR GOES ONとかね。こういったバンドのメンバーはARRIGT ANTRÆKやHJERTESTOP、NO HOPE FOR THE KIDSだったりするからさ」

■Posh Isolationとその周辺のバンド、ICE AGEやWAR(VAR)、LUST FOR YOUTHとかについてはどう思っていますか?K-Townパンク・シーンと繋がりはあるのでしょうか?それとも接触はないですか?

P「俺は、何をもってしてK-Townシーンと言うのか、また、違うと言うのかも定かじゃないんだ。繰り返しになるけど、誰もが何かしらの接点を持つような、かなり小さなシーンだからね。個人的には、そこで起こっていること全てに関わっているわけじゃないし、ある意味、どこかのシーンに自分が属しているなんてことも全然思っていないしさ。Posh Isolationのシーンに関わっている多くの人たちを俺は知っているし、才能に溢れた人たちも数多くいるね。彼らは成し遂げようと一生懸命だしさ。どこかしら違うシーンではあるだろうけど、デンマークという規模で見れば同じはみ出し者だよ」

M「コペンハーゲンはとても小さな都市だから、私も彼らのことは知っているわ。みんな楽しくてクールな人たちよ。だけど、K-Townパンク・シーンとは違うシーンにいるとは思う。彼らは、もっとアートと関わりのあるシーンにいるわね」

■ところで、最近はどんな音楽を聴いていますか?

P「色んな音楽をいつもたくさん聴いているけど、とにかくロックンロールが好きだね。それと、俺が影響を受けているような音楽もね。主に昔の、60年代や70年代の作品だけど、もっと古い音楽も。昔にレコーディングされたサウンドが好きなんだ」

T「個人的には様々な種類の音楽をよく聴いている。古いブルースからハードコア・パンクまでって感じに、ありとあらゆる音楽をね。今は"新しい"Iggy Popのアルバム「Post Pop Depression」を聴きまくっているよ。これが格好良くてさ。長年に渡る彼の活動の中でもベストな作品だと思う」

M「私は最近、初期のパンクばかり聴いている。大抵は女性ヴォーカルものを聴いて楽しんでいるわ。女性がフロントに立っている音楽のミックス・テープを作ったりね」

■GORILLA ANGREBは1999年に始まって、今は2016年。17年という歳月が経ちましたが、パンクや音楽、バンドに対する意識に変化はありましたか?

P「変化したかは分からないな。けど進歩はしていると思う。こういうところで、何と言うべきかは分からないけど、GORILLA ANGREBが始まった当時はもっとアンダーグラウンドであろうとしていたんだ。そして、全てをパンク・シーンの中でやろうとしていた。今、俺はもうちょっとオープンになっていると思う」

T「そうだな、時が経って、もちろん自身の生活に対する見方は変わってきた。メンバーのうち3人には今や家族と子供がいる。パンクというレッテルには全く構わなくなったよ、僕はただ、良き人間であろうとしているし、僕がハッピーになれることをやろうとしている。今でもパンク・ロックには夢中だし、大抵の音楽が大好きさ。バンドの現状として、再び僕らが一緒にプレイできて最高だよ。解散前よりも、実際のところ曲をより良くプレイできていると思うしね」

M「バンドが始まった当時、私はとても若かった。だからすごく自分に対して自信がなかったし、みんなが私のことをどう思っているかも不安だったの。年齢を重ねるのは大好きよ。自分のことがよく分かるようになるし、些細なことに構わなくなるしね。年をとって、私は内面的によりパンクになったみたいね、ハハハ」

■2007年の来日ツアーのことは覚えていますか?印象深かった思い出はありますか?

P「うん、覚えているよ。バンドとして過ごしてきた時間の中でも、最高の体験だったからね。すごくエキサイティングだったよ。一つの思い出だけを挙げることができるかどうかは分からないな。だって全てが思い出深いからさ。日本の人たち、文化、礼儀正しさ、その全てが本当に興味深かった。あと、日本のパンク・シーンにはヒエラルキーがあるってよく聞いていたんだけど、そんなのは見かけなかったな。とにかくここは全然違っていた。是非また行きたいね」

T「日本のレコード・ショップが大好きだったよ。楽しい時間を過ごせたね。広島平和記念資料館も訪れたんだけど、印象深かったよ。東京でGAUZEと共演できたのも素晴らしかったな」

M「ツアーのことはよく覚えている。日本はデンマークやヨーロッパとはすごく違っていた。だからツアー中はすごく興奮していたわ!最も印象深かったのは、みんなが優しくてフレンドリーだったこと。私たちのショーをたくさん見るために、旅行して廻っていた素敵なカップルもいたのよ。そのカップルは、私が帰国してからも何度か、キャンディや素敵なものを写真と一緒に、日本から送ってきてくれたの。そんなこと初めてだったわ」

■GORILLA ANGREBは世界中の多くのパンク・バンドに影響を与えたし、あなたたちの作品はパンクの歴史に名を遺したと思っています。実際、どうしてあんなに素晴らしい音楽を作り出せたのですか?

P「ハハハ!俺たちが素晴らしい音楽を作ったと君に思えてもらえて嬉しいよ。ありがとう。多分、俺たちは異なる要素を持った、良いコンビネーションだったんだよね。例えば、60年代のポップスとロックンロール、それをハードコア・パンク・バンドのエナジーをもって演奏しているようなね。速くてアグレッシヴ、だけどとてもダンサブルってわけさ。俺が一つ思うのは、常にベースとギターが、どこか少しだけ異なる演奏をしていたのが巧く作用していたってことかな。カッチリと同じ演奏をする代わりに、それぞれの楽器がお互いに絡み合うんだ。GORILLA ANGREBの曲の全てってわけじゃないけど、多くの曲がそうだね」

T「分からないな。多少なりとも、音楽を作ってレコードのアートワークなんかをやるっていうのは、潜在意識下のインスピレーションが合わさったものだからさ。このバンドを始めたとき、僕たちはシンプルで真っ直ぐなパンク・ロックがやりたかった。そうやって始まったんだ。時間と共に、僕たちのスタイルとサウンドはよりメロディックに、よりダンサブルに進化していった。だけど、どういうわけかロウなエナジーとヴァイブも宿っていたんだよ」

■今後の目標や計画を教えてください。

P「未発表の2曲にヴォーカルを入れるレコーディングと、それをシングルとしてリリースする。あとは秋か春に、何回かショーも予定しているね。また日本でできたら最高だよ。メンバー全員が日本でまたやりたいと思っているんだ」

M「私はもっと活動したいわ。ツアーをまたやったり、もっとショーをやったりね。多分、新曲もね」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。日本の読者にメッセージを。

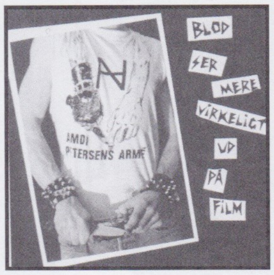
P「インタヴューありがとう。日本の読者へメッセージを言うよりも、質問をしたいな。その質問というのは、俺たちが日本でショーをすることにみんなは興味を持っているか?ってことさ。もちろん、俺たちはやりたいけどね」

M「すぐにでも、みんなと日本で再会したい!」

GORILLA ANGREB
関連ディスク・ガイド

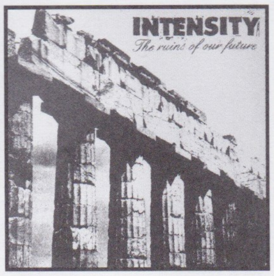
GAのメンバーが関わっていた/いる、主要なバンドのディスク・ガイドです。改めて聴いてみると、やっぱりGAのサウンドはメンバーそれぞれが異なる方向性と嗜好を有していたからこそ、それらが奇跡的なバランスで融合し、生まれたんだな～と痛感しました。この4人でないと成立しない音楽と言えるでしょう。ノンビリでもいいので、"再解散"せずに活動をずっと続けていってもらいたいですね。

AMDI PETERSENS ARMÉ/Blod Ser Mere Virkeligt Ud På Film



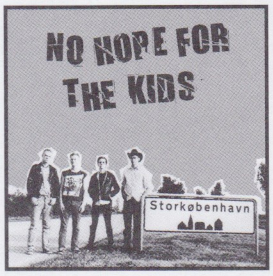
PeterとTommasが在籍していたバンドだが、活動期間はたったの4年、当時残した単独音源もEPが2枚のみ(本作は2nd EP)。しかし、このバンドがK-TOWNパンク勃興の火種となったのは間違いない。と、同時にDS-13同様、当時のスラッシュ・ハードコア・リヴァイヴァルfrom北欧を象徴する存在にも、彼らは瞬時にして登りつめたのだった(DS-13とは、今は亡きUNGDOMSHUSETで共演も果たしている)。
(Kick N' Punch Records KNP10)7"

INTENSITY/The Ruins Of Our Future



Tommasの出自を語る上で避けて通れないのが、このスウェーデン産レイジング・ハードコア・バンドにドラムとして参加していたということ(ヴォーカルはSATANIC SURFERSのメンバーだったりする)。GORILLA ANGREBでのドラミングはパワフル且つ精密な印象だけど、ここではとにかく速くて激烈! そして、改めてGAメンバーの音楽性の振り幅の広さに驚かされるのでした。来日も果たしております。
(Putrid Filth Conspiracy PCF013)LP

NO HOPE FOR THE KIDS/ST



APA後にPeterが始めたパンク・ロック・バンド、その1stアルバムがコチラ。APAがDS-13と時代性を共有していたとするならば、NO HOPE～はTHE VICIOUSと呼応していた、と言えなくもないだろう(Sadnessなメロディ、そしてメンバーはハードコアあがりという面でも)。デンマーク・パンクの2000年代に関してはまずAPAありき。それがNO HOPE～、GAへと派生し、その後にNUCLEAR DEATH TERROR、THE ASSASSINATORSが出てきた、というのが極々大雑把な流れかな～と。
(Kick N' Punch Records KNP13)LP

MOONLESS/Calling All Demons



GA解散後にTommasが始めたのが、このストーナー/ドゥーム・ロック・バンド、MOONLESS!弊誌Vol.1でインタヴューさせてもらいましたが、12インチ・シングル、そして1stアルバムとなる本作をリリースして解散してしまいました。お手本のような安定感が心地良い反面、突き抜けた"何か"がなかったのが、短命に終わった理由でしょうか。APAとDS-13、NO HOPE～とTHE VICIOUSの相似性について触れましたが、このMOONLESSはSONIC RITUALと呼応していた、と言えなくもないような。
(Hjernespind HS23)LP

LOKUM/ST



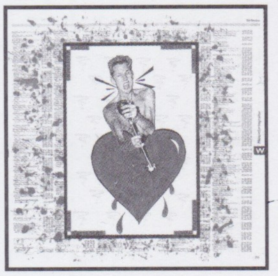
GORILLA ANGREBとのスプリットもリリースしていたが、2002年に解散したバンドでPeterが在籍していた(ということは、APAと並行して活動していたのだろうか?)。衝動的なKBDパンクからポンコツ・ハードコアまで、要するにとことんチープで後に結成するバンド群のクオリティには程遠いのだが…、やっぱりセンスが秀逸だ。本作は2010年にリリースされた音源集。
(Hjernespind HS19)12"

SUN BATHER/Faret Vild



インタヴューによるとPeterがドイツで暮らしていたときにこのバンドを思いついたらしい。TommasとBURIAL etcのFabian、BORN DEAD etcのWillが在籍する多国籍にして純正のガレージ・ロックンロール・バンド。本作は2017年にリリース予定の4曲入り12インチなんですが、過去作での牧歌的でロウな音作りよりもグッと厚みが増してきて、曲調もパンク・ロック寄りになっているような気が(タイトル曲は仄かにCLASHのGarageland風)。
(Hjernespind 品番未定)12"

YOUNG WASTENERS/ST



これもPeter在籍のバンドで、その1stシングル(他にはアルバムを一枚発表している)。APA解散後の彼にとって、パンク・ロックへの新たなる試みがNO HOPE～とGAだったわけだが、ハードコア・パンクへの飽くなき挑戦を具現化したのがこのYWだった(…ハズ)。MINOR THREAT直系のAPAに対して、このバンドはDEAD KENNEDYS直系(でもバンド・ロゴはURBAN WASTE風)で実に格好良かった。短命に終わったのが惜しまれる。
(Hjernespind HS05)7"

LOS RETARDOS/Fresh Trash



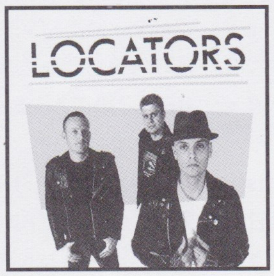
HJERTESTOPやSNIPERSのメンバーを擁し、GAベーシストのSimonがGAと並行して活動していたのが本バンド。Simonの過去の写真を執拗にチェックしていくと、彼の愛器(ベース)にはTHE STOOGESやRAMONES、SOCIAL DISTORTIONのステッカーが貼られていたことに気がつきました。分かりやすい嗜好で何だかホッとしますね(PeterとTommasは趣味が広すぎる)。このアルバムにもそんな分かりやすくて武骨なパンク・ロックが12曲収録されています。
(Rocking Retard RRP002)LP

P.J. BONNEMAN/Jeg Kendte Dem Ikke



ヤリたがりのPeterがヴォーカル、ギター、ベース、ドラムと独りで全パートをこなしたソロ・プロジェクトの1stシングル。2008年のリリース作で僕は久々に聴いたのですが、「SUN BATHERの元ネタはコレか!」と膝を打つほどにパンク前夜な原石ガレージ・サウンド。多分、Peterは広義での"ロック"(パンク/ハードコア含む)が好きでたまらなくて、何かしらヤッていないと死んでしまうんじゃないかと思う。
(Spild Af Vinyl SAV04)7"

LOCATORS/ST



そしてLOS RETARDOS後にSimonが始めたのがLOCATORS。メンバーにはex NEKROMANTIXがいたりしますが、サイコビリー要素はゼロ。路線としては"LOS RETARDOSをもっとキャッチー&メロディアスにして、疾走感あふれるロックンロール・テイストも加味"って感じで決して悪くはないんだけど、正直インパクトに欠ける。GAみたいな音楽的ケミカル・リアクションが起こっていないんだよなぁ。
(Heptown Records HTR049)CD



DS-13

DS-13 is BACK(…またこの出だし)!
90年代後半から世界同時多発的に巻き起こったスラッシュ・ハードコア・リヴァイヴァルを、北欧の地スウェーデン・ウメオで体現していたバンドが、他ならぬこのDS-13です!敬愛なる読者のみなさまの中には、彼らの2002年の来日ギグが、未だ脳裏に刻み込まれているという人も多いのではないでしょうか?!
そんな彼らも実は2012年から再始動していまして、当初は一回限りの復活のハズがドンドン加速し、2017年には15年振りとなる日本ツアー(with CRUCIAL SECTION)も予定しています!
というわけで、通算何度目のエルジン登場か分かりませんが、ベースの138さんにインタヴュー・オファーを出し取材を敢行しました。メンバーは不動の4人:Tom Terror(Vo)、Jånte D-kay(Gu)、138(Ba)、Andy Anarchy(Dr)。
悪魔のシステムを焼き尽くせ!そしてThrash Hardcore Vikingの襲来に備えるのだ!!

■まず最初に、DS-13はどうして解散したの?理由を聞かせてください。

138「日本ツアーをして、スウェーデンのウメオとアメリカのミネアポリスでファイナル・ギグをやった2002年に、俺たちは解散したんだ。理由をスウェーデン語で言うなら"dålig stämning i bandet"だね。俺たちの仲が悪くなってきたって意味さ。そんなこともあるよ、それにもう何年も前の話しだし。2002年当時、俺たちはこのバンドで6年も活動していたし、200本以上のギグをやり、大量のレコードをリリースしていた。いずれにしろ終わりのときは来ていたんだ」

■では、どうして再結成をしようと?たしか、以前に138が、"Dennisの誕生日パーティのために再結成した"って言っていたような気がするんだけど。これって合ってる?実際のところ、ショーはいつから再開したの?

138「REFUSEDのシンガーであるDennis Lyxzénが、2012年に、彼の40歳の誕生日パーティで演奏してくれと俺たちに頼んできたんだ。一度きりの再結成のはずだった。それから2014年に、D-kayが自分の40歳の誕生日パーティで演奏したがってね。その後には2015年にウメオで開催されたLast Mosh For Charlieで演奏して、なんて感じで続いていったんだよ。今じゃ俺たちは、2012年から数えて合計で20回もショーをやっている。2017年には再びアメリカをツアーするよ。日本もね」

■DS-13が解散した後、138はBRUCE BANNER、IMPERIAL LEATHER、SONIC RITUAL、AC4に加入したよね。他のメンバーも新しいバンドを始めたり加入したりしていた?もちろんAndyはTHE VICIOUSやINVASIONEN等々、JånteはINSURGENT KID等々をやっていたのは知っているけど、DS-13後のみんなのキャリアを詳しく知りたいんです。

138「DS-13とE.T.Aの両方が2002年に解散したけど、俺はBRUCE BANNER、SUICIDE BLITZ、IMPERIAL LEATHER、SONIC RITUAL、AC4としてレコードをリリースしてツアーを行った。今、俺はRIWENというバンドをやっている。CULT OF LUNAやTOTALT JÄVLA MÖRKERのメンバーと一緒にね。1枚LPをリリースしているよ。それとAXE RASH、NEGATIVE SELFのメンバーと一緒に、FERAL BRAINという新バンドを結成したばかりさ。レコーディングはまだだけど、ファストなハードコア・パンクをやっているよ」

Andy「俺はギターで作曲するようになって、THE NERVOUS MINDSというバンドを始めた。THE SAINTSやRADIO BIRDMANと同じスピリットを宿したパンクをやっていたんだけど、数回ギグをやっただけで解散してしまった。それから俺とREFUSEDのDennisとでTHE LOST PATROLというパワー・ポップ・バンドを始めて、そのバンドがINVASIONENとなり、今ではINVSNになった。2002年頃だとTRISTESSというロウ・パンク・バンドもやっていたな。クラシックなスウェディッ

シュ・パンク・ロック、KRIMINELLA GITARRERみたいなのをね。THE VICIOUSもやっててかなりのレコードを出したけど、2007年頃には完全なるハードコア・バンド、U.X. VILE HEADSを始めた。俺にとっては今でも、ハードコアこそが最も楽しくプレイできる音楽なんだ!ひたすらに怒りを解き放ち、ハードコアのエナジーを感じるのさ!再びDS-13の一員となれて最高なのは、それが理由だね」

Jånte「俺はINSURGENT KIDを始めた。LPを1枚リリースして何回かツアーをやったけど、シンガーがMASSHYSTERIでドラムを叩き始めたから解散した。その後の2、3年ほど俺は中国で生活していたんだ。そして北京にいるときにFANZUI XIANGFAを結成した。中国語のファストなハードコアだよ。2006年頃からやっていて、7インチを何枚かリリースして、中国やヨーロッパ、東南アジアをツアーして廻った。まだやってはいるけど、全然活動していないんだ。今では、メンバー全員がヨーロッパと中国で離ればなれになっているからさ。ウメオに戻ってからはスウェーデン語で歌うハードコア・バンド、SÄNKTを結成したけど、1枚の7インチをリリースして解散したな。その後にBAD NERVEを結成して、それが俺の最近のバンドだよ。80年代からの影響があるハードコアで、多くの時間とエナジーを注ぎ込んでいる、俺にとってのメインのバンドがこれだね。LPのレコーディングをしたばかりで、これはNy Vågから年明けにリリースされるよ。あとはTHE DUMB FUCKSでギターとヴォーカルもやっているね。ウメオのハードコア・シーンはいつもシリアスだし、シーンを盛り上げるためにバンドを必要としている。俺たち自身が楽しむためにもね。けど、真面目な歌詞もあるんだぜ」

Tom「俺は何もやっていなかったよ。俺はちゃんとしたミュージシャンでもないしね。練習するのも大嫌いだし、俺は楽器の演奏もしないからさ。だから解散した後に、他のバンドをやるつもりなんてなかったよ。DS-13の奴らは今でも最も親しい友人だし、友人として一緒にバンドをやっていたんだ。ミュージシャンとしてではなくね。俺はそんなところが好きだったんだ。他の奴らと新バンドをやろうとなんて思わない。だからやらなかったんだよ…」

■解散後もみんな仲は良かったの?お互いに会ったりしていましたか?

138「俺たちが解散した理由はケンカだった。だけど、それは実際2002年の日本ツアー前に起こったことだったんだ。だから、そう、活動していないときは仲良くやっていたよ!たしか、それほど頻繁には会っていなかったけどね。俺は2003年にウメオからストックホルムに引っ越したし。だけど、俺たちはずっと最高の友人同士だった!」

Andy「俺にとって、DS-13は常に友情の上に成り立っていた。だから解散しても何も変わらなかったよ。いつだって良い友達のままさ」

Jånte「解散した後、俺は北京で4年間暮らしていた。だから以前みたいに会ったり遊んだりしていなかったよ。だけど、俺はみんなのことをいつだって親友だと思っている」

■一番好きなDS-13の作品は?アルバム『Killed By The Kids』でしょうか?

138「そいつは難しい質問だな。一番好きな曲の方がまだ答えやすいよ!だけどレコードで言うなら最初の7インチ、『Aborted Teen Generation』かな」

Andy「俺も最初の7インチが一番好きだな。どうにかして出せたエナジーとサウンドだからね」

Jånte「『Killed By The Kids』と『Aborted Teen Generation』だね」

Tom「個人的なお気に入りは最初の7インチ、『Aborted Teen Generation』かな。これ以上によくレコーディングできたレコードはないと思っている。曲がイイとかじゃなくて、俺はこれのエナジーと、レコーディング・セッションのサウンド全体が大好きなんだよな」

■90年代後半のスラッシュ・ハードコアのリヴァイヴァル・ムーヴメントは実際に肌で感じていましたか?DS-13は当時のスラッシュ・ハードコアを象徴するバンドの一つだったと思いますが。

138「俺たちが始めた1996年当時、俺たちはちょっとグラインドとD-Beatの要素がある、すごくファストで馬鹿げたハードコア・パンクがやりたかっただけなんだ。クソみたいなメタルやポップ・ミュージックじゃなく、芸術家気取りのインテリ・クソ・パンクでもなくね。だからスラッシュ・ハードコア・リヴァイヴァルなんてまるで考えていなかったよ!アメリカや日本、ヨーロッパの人たちと連絡も取っていなかったしさ。俺たちはウメオで孤立していたし、1996〜97年頃、俺たちみたいなサウンドの奴らなんていなかった。だけど、90年代後半から2000年代前半にかけて格好良いバンドがたくさん登場してきたのはグレートだったね。だから、そうだね、ムーヴメントを感じていたし、それと関われたのは良かったよ」

■スウェーデンのオーディエンスの反応は?キッズはショーに来るのですか?それとも、みんなと同世代の大人がメインの客層?

138「ちょうど良くミックスされているね!俺たちと同世代(35〜45歳)の昔からの人たちもたくさん来るけど、解散する前の俺たちを見たことのない、若いキッズもたくさん来る。スウェーデンでの再結成ショーの動画がYoutubeにたくさんあるから気になったら見てくれよな」

■DS-13を結成した頃、メンバーはティーンエイジャーか20代でしたよね?それが今では30〜40代です。過去と現在、最も変化したことは何でしょう?家族や仕事があるなかで、どうやってバンドとのバランスをとっていますか?

138「DS-13を結成したとき、俺は19歳だった。今は39歳でストックホルムで生活している。そうだね、色んなことが変わった。俺には7歳になる一人娘がいるし、Tom Terrorには6歳の一人息子がいる。違う都市に住んでいるし、仕事も家族もあって、大人になったからショーをするのも大変だよ。だから、良さげなギグの誘いもたくさん断らなくちゃならないんだ!だけど、生活するってのはそういうことだしね。それでも俺たちはどうにかして、クールなことを色々しようとしているよ。チェコのFluff



Festでプレイしたときには、子供たちを連れて行った。そして俺たちが演奏しているとき、子供たちはそれをステージで見ていた。素晴らしい瞬間だったな」

Jånte「俺は42歳で、仕事はしているけど家族はいないんだ。だから俺の生活は、仕事をしている以外は、20歳だったときとほとんど同じだね。今でも音楽を作っているし、ショーにも行けばスケボーもやる。俺にとっての最大の変化は、近頃みんなが忙しくなってしまったってことだね。家族や子供、仕事とかでさ。リハーサルするにも、ショーやツアーをするにも、最近は色々と計画を立てなきゃならないんだ。でも、4年前に始めたBAD NERVEで俺がやった以上のことを、DS-13は6ヶ月間でやっているね」

■新しいレコードやツアーの予定は？

138「うん、計画はたくさんあるぜ!2017年の3月には、2015年に録音したライヴLPをリリースする。そいつは『Last Mosh For Charlie:Live In Umeå Hard Core』ってタイトルになるだろうね。アメリカのRotten To The Core Recordsからレコードで、限定のテープ・ヴァージョンが日本とスウェーデンでリリースされるよ。3月〜4月にかけてはアメリカの西海岸をツアーする。そして2017年の11月にはCRUCIAL SECTIONと日本ツアーをするんだ。それに合わせて、全ての7インチとコンピレーション参加曲を収録したコレクションをリリースする。リマスターした67曲入りで、日本のCrew For Life、スウェーデンのSpela Snabbare、アメリカのHavocからリリースされるぜ。だから、2017年には色んなことが起こるね」

■日本ツアーを2002年に行ないましたが、もう14年も前のことですね。今でも覚えていることはありますか？

138「そうだね、日本ツアーのことを忘れるわけないよ。DS-13にとってベストなツアーだった。7回ショーをやって、多くの素晴らしい人たちと出会ったし、多くの素晴らしいバンドを見た。最高の思い出だよ!FUCK ON THE BEACH、FORWARD、PAINTBOX、MORE NOISE FOR LIFE、BREAKFAST、TOTAL FURYと共演したアンチノックはソールド・アウトして最高の夜だったな。完全なるハードコア天国だったよ!!!決して忘れることはないね」

Jånte「日本にはたくさんの良い思い出があるよ。共演したバンド、出会った人たち、美味しい食べ物にカラオケ・バー。でも、東京での最終日は俺の最良の思い出だ。多くのグレートなバンドと共演して、カオスだったね!!」

■最近のウメオのパンク・シーンについても知りたいのですが、Ny Våg Recordsはもう活動していないのでしょうか?Ny Vågがリリースする予定の『Umeå Hardcore Compilation』のリリースを延々と僕は待ち続けているのですが…。若い世代のバンドは出てきていますか？

138「『Umeå Hardcore Compilation』はキャンセルになったよ。どのバンドも解散しちゃったからね。だから今、リリースされることのない、AC4の未発表曲が2曲あるんだ…。AC4が終わる寸前に作った曲なんだけど、誰かリリースしないかな?!」

Andy「FUKUSHIMAのメンバーが始めた、DOG FACEという最高の新バンドがいるぜ。あとはAC4のKalleがACID BLOOD UMEÅというバンドを始めたばかりさ」

Jånte「Ny Vågはまだあるんだけど、全然活動していないね。でもBAD NERVEの7インチをNy Vågからリリースしたし、LPもリリースされる予定さ。シーンはかなり強固だね。浮き沈みはあるけどね。ウメオでチェックするだけの価値がある、格好良い新しいバンドと言うとPISS RIVER、GRID、SELF SURGERY、TROTS、WARCHILD、MISANTHROPIC、SCUM CRUSADEかな」

Tom「DOG FACE、SELF SURGERY、BAD NERVEが大好きだね」

Photo by Claes Nordin



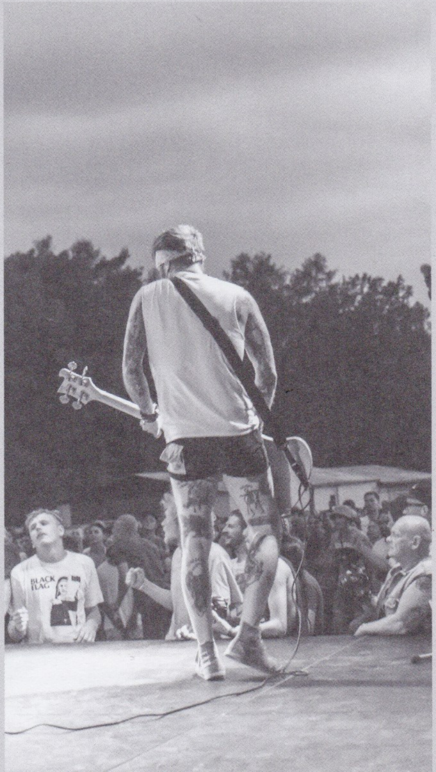


Photo by Claes Nordin

アンチノックはソールド・アウトして最高の夜だったな 完全なるハードコア天国だったよ!!!

■ところで、最近はどんな音楽を聴いていますか?

138「俺はできる限り、新しくて若いバンドを多く聴くようにしているよ。若いスウェーデンのバンドで大好きなのはAXE RASH、HEAVY MAKEUP、REMISO、THE HAMMER、LIVET SOM INSATS、DICK TRACY、STRESS SS、SNOR、SEX DWARF、それにPOWER FACEだね。それとイギリスのARMS RACE、フィンランドのKOHTI TUHOA、オーストラリアのSCAB EATER、ポーランドのOHYDA、スペインのUNA BÈSTIA INCONTROLABLEとBARCELONA、ドイツのDRUX。それにアメリカにももちろん、グレートな新しいバンドが数多くいるよね。BLOOD PRESSURE、AJAX、GAG、EEL、BLAZING EYE、TØRSÖ、RABID MINDS、PROTESTER、OBEDIENCE、IMPALERSとかさ。近頃はDIYハードコア・バンドに格好良いのがたくさんいる。すごくインスパイアされるよ。もちろん、クラシックなハードコア・パンクも聴いているけどね」

Andy「俺はニュー・ダーク・ゴシック・ポスト・パンクを聴いている。THE OSCILLATIONとかKVB、SOFT MOON、FÖLLAKSZOID、YOUTH CODEみたいなね。新しいハードコア・バンドの音源も聴くようにしているよ。例えばLONG KNIFEなんて大好きだね」

Jånte「LONG KNIFE、LAS OTRAS、HURULA、OFF、PROTESTERA、TØRSÖ、GORILLA ANGREB、それにクラシックなバンドならBLACK FLAG、MINOR THREAT、GORILLA BISCUITS、REAGAN YOUTH、SLAYER、他にももっと色々聴いているけどね」

Tom「音楽は朝からずっと聴いているよ。仕事に行く途中も、仕事中も、夕方にも。多くのイカした音楽があって、楽しんではいるけど、俺はそれを並べ立てて、他人に見せるような人間じゃないんだよ。ただ今日、俺はVIAGRA BOYS、DAFT PUNK、INVSN、LINDA RONSTADT、REINを聴いていたな」

■最後に、読者にメッセージをお願いします。

138「ケンジ、エルジンでインタヴューしてくれてありがとう。光栄だぜ!サポートにも感謝している!そしてクレイジーな日本のモッシャーたち、2017年に会おうぜ!Kampai!」

Andy「ワイルドでいようぜ!」

Jånte「日本で会おう!!Thrash and burn!」

Tom「2002年に日本をツアーして本当に楽しかった。出会った人たちはみんなすごく俺たちに良くしてくれたし、ショーも素晴らしかった。再び日本でやれることを楽しみにしているぜ。Kanpai motherfukkers!」

DS-13 関連バンド紹介

Vol.13のAC4特集では、AC4メンバーのバンド・キャリアを綴ってみましたが、本稿"DS-13関連バンド紹介"と併せることによって、ウメオの主要なパンク/ハードコア人脈を、ある程度は把握できるのではないでしょうか。しかし4人で23バンドもやっている/いたとは思いもしませんでした…(そして掘ればもっともっと出てくるハズ)。

ECLIPSE

1990年代に活動していたハードコア・バンドでTomがヴォーカルを務めていた(恐らくTomのバンド・キャリアはこのバンドとDS-13のみ)。尚、ギタリストだったJohannes PerssonはCULT OF LUNAを結成し、現在は138と共にRIWENでも活動中。

SEPARATION

Jånteがドラムを叩いていたストレート・エッジ・バンドで1994〜1999年にかけて活動していた。THE (INTERNATIONAL) NOISE CONSPIRACYとのスプリットを138が運営していたBusted Heads Records+複数レーベルとの共同でリリースしている。

ABHINANDA

Jånteが1992〜1995年の間、ドラムを担当していたニュースクール・ハードコア・バンド。Jånteの実兄であるDennisがヴォーカルを務めるREFUSEDと共に、シーンを牽引した。Jånte脱退後もバンドは続き、2010年には来日も果たしている。

INSURGENT KID

DS-13後にJånteが始動させた80's USHCスタイルのバンド。ヴォーカルだったErikはMASSHYSTERIのドラムへと転向。

FANZUI XIANGFA



FANZUI XIANGFA

INSURGENT KID後にJånteが北京で結成した中国語ヴォーカルによるスラッシュ・ハードコア・バンド。

SÄNKT

北京から帰国したJånteがギターを務めたスラッシュ・ハードコア・バンド。INSURGENT KIDでも一緒だったFredrik(終末期のAC4のドラマー)も在籍していた。



SÄNKT

BAD NERVE

女性ベーシストを擁する、Jånte(はドラム)の現在進行形にしてメインのバンド。FANZUI XIANGFAとのスプリットもリリースしている。



BAD NERVE

THE DUMB FUCKS

Jånteが新たに始めたバンドで、ここではギターを弾いている。彼と女性ベーシストとのデュアル・ヴォーカルのハードコア。

THE NERVOUS MINDS

DS-13後にAndyが始動させるも数回ギグ

をやっただけで解散したバンド。

THE LOST PATROL〜THE LOST PATROL BAND

ex REFUSED etcのDennisがソロ活動として始めるも、バンド形式に発展。キャッチーなパンク・ロック〜パワー・ポップ・サウンドで、Andyはドラムを担当。アメリカに同名バンドがいたため、INVASIONENに改名することに。



THE LOST PATROL BAND

INVASIONEN

初期はTHE LOST PATROL BANDの面影があったが、リリースを重ねる毎に現在のINVSNのサウンドに接近。THE LOST PATROL BANDからINVSNへの過渡期をそのまま体現していた。Andyは変わらずドラム。

INVSN

Dennisにとっての本腰(本職)バンドはREFUSED、THE (INTERNATIONAL) NOISE CONSPIRACY、そしてこのINVSNなのではないだろうか(AC4は良い意味で遊びのバンドだった)?Dennisの卓越したソング・ライティング能力が発揮されたポスト・パンク・バンド。Andyはもちろんドラム。


INVSN

TRISTESS

Andyがヴォーカルを務めていたバンドで本人曰く、「クラシックなスウェディッシュ・パンク・ロック」を狙っていたとのこと。メンバーのMarcusとOttoは138がやっていたE.T.A.、そしてREGULATIONSなどでも活動していた。

THE VICIOUS

pre MASSHYSTERIとも言うべき4人組のパンク・ロック・バンド。Andyはドラムを叩いていたが、Andyを除いた3人によってMAS


THE VICIOUS

SHYSTERIが結成された。

U.X. VILEHEADS

2007年に結成されたスノッティーなハードコア・バンド。Andyはドラム、前述のMarcusがベース、ギターはINSURGENT KID、SÄNKT、AC4のFredrik、ヴォーカルのTorbjörnはのちにFUKUSHIMAを結成することに。

E.T.A.

DS-13と同タイミングで解散したスラッシュ・ハードコア・バンド。138以外のメンバー3人+Robert(THE VICIOUS〜MASSHYSTERI〜HURULA etc)でREGULATIONSを結成する。尚、ドラムのJensはAC4でもドラムを担当していた(彼が脱退してFredrikが新ドラマーになり、その後AC4は解散)。

BRUCE BANNER

2000年結成のストックホルム産スラッシュ・ハードコア・バンドで、138はベースとして2005年頃まで参加していた。138脱退後の2007年にバンドは解散。


BRUCE BANNER

SUICIDE BLITZ

後にASTA KASKやWOLFBRIGADE etcへ加入するDaddeと、138が在籍していたハードコア・バンドで、2005年にはアルバムを発表している。

IMPERIAL LEATHER

こちらも2000年結成のストックホルム産で、女性ヴォーカルのパンク・ロック・バンド。錚々たるメンツによるバンドで、Profane ExistenceやMCR Companyからのリリースもあり2009年に来日も果たしたのだが、


IMPERIAL LEATHER

その頃には既に138は脱退していたのだった…。

SONIC RITUAL

2007年に結成されたメタル・パンク・バンドで弊誌vol.2の表紙を飾ってもらいました。138が初めてメタル方面にアプローチしたバンドだったが中途脱退。138は自身の脱退と共にバンドの解散を発表するも、その後もバンドは続いていたのでした…。


SONIC RITUAL

AC4

弊誌vol.13の表紙を飾ってもらいました、ウメオ・オールスターによるハードコア・バンド。138が加入したおかげでインタヴューに漕ぎ着けられましたが、2ndアルバム『Burn The World』を最後に解散。


AC4

RIWEN

2014年結成の、138によるハードコア/クラスト/メタル・バンド。CULT OF LUNAやTOTALT JÄVLA MÖRKERのメンバーが在籍。完成度の高さやサウンドの傾向としては、DISFEARの後期をどこか彷彿とさせる…と言ったら褒め過ぎだろうか。

FERAL BRAIN

138による最新のバンドで、AXE RASHやNEGATIVE SELFのメンバーが在籍。本人曰く「ファストなハードコア・パンク」とのこと。



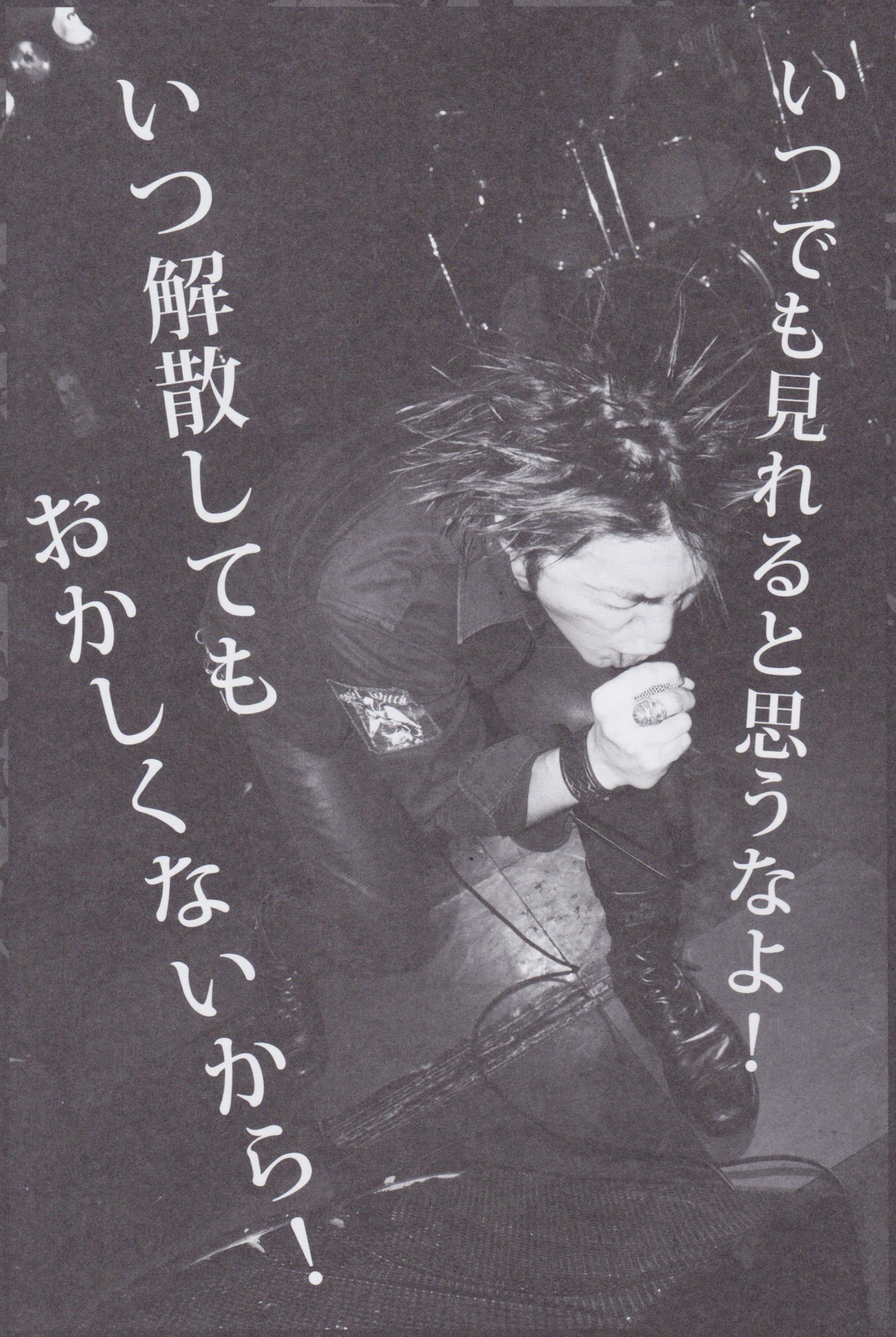
kriegshög

kriegshög is BACK(…今号はこればっかです)!!
2016年5月、突如として奴らは復活の狼煙を上げ、最前線へと舞い戻ってきた!そう、今からちょうど10年前の2006年に彗星の如く東京のハードコア・シーンに現れると、一瞬にしてシーンを席巻したFull Metal Punk Soldiers：kriegshög!!!!!
UKツアーを直前に控えた慌ただしい中、スタジオ練習前のメンバー[Masaki(Vo/以下M)、Shingo(Ba/以下S)、Nenji(Dr/以下N)、Tera(Gu/※寝坊のため欠席)]にインタヴューを決行した!5年間の沈黙を破り、遂に奴らが語り出す…。刮目せよ!

PHOTO:Nakano Kenta(except ※)　[10月23日　秋葉原金の蔵]

■まずは、どうして再結成をしようと?誰が思いついて?
M「REDNECKSのEbiちゃんが、(下北沢にあるパンク・ショップ)45 Revolutionの10周年記念の企画を下北沢で2 Daysでやると、それに声をかけてくれて。かしこまってkriegshögで出てくれないか、と電話を受けて、ビックリしましたよ。その時は再結成しようという話しではなくて、面白そうだから一夜限りでって感じで。それが5月のライヴで、それに向けて練習していたんですけど、"どうせやるなら好き勝手やりたい"とTeraが言い出して、一夜限りのライヴのはずなのに新曲を持って来たんですよ(笑)。でも、ライヴが終わるまでは、その後に続けるとかの話しはしていなくて」
S「ライヴが終わってから決めようと」
M「そうそう、そこまでみんなで話し合いもしなかったし。で、やったら楽しかったというのと、"もっと新曲を作りたい"という気持ちが強くなってきて。でも、やるかやらないかは、真剣には話し合っていないよね」
S「話していないし、やるとも言ってないよね」
N「(笑)」
S「見出しのところに、"いつでも見れると思うなよ!"って書いておいてください(笑)」
M「いつ解散してもおかしくないから(笑)!」
S「ていうか復活してねえよ(笑)」
M「で、僕らが復活した直後にISTERISMOが解散しちゃって、同じタイミングでSMAPも解散しちゃったんですよ(笑)」
一同「…」
S「こういうときにMasakiは面白いこと言えないよな」
M「で、ISTERISMOとSMAPが解散したもんだから、元々ISTERISMOが出演を予定していたブラジルのRAKTAとスペインのBELGRADOのライヴへの出演依頼が僕らに来て。そのライヴも面白そうだから出るか、と。よく言えば勢いで、悪く言えばなし崩し的にやっている感じです(笑)。でも、やりたいねという話しをしていたときに、Paco(La Vida Es Un Mus)に電話をしたんですよ。復活ライヴをするよって。そしたら、"その後は続けるのか?"って。"分からないけど、これだけのライヴを予定しているよ"って言ったら、"UKに来ないか?"と。だから、5月の復活ライヴにRAKTA、BELGRADO、そしてUKと。全てが仕組まれたような感じなんですけど、実際は何も仕組んでなくて、たまたまトントン拍子に。Paco的には僕たちが5月にやる時点でUKに呼ぼうって思ってくれていたみたいですけどね」
N「俺もSTAGNATIONとKAFKAを辞めてUNARM一本にしようと思っていたのにさ」
■UKのライヴは一本だけ?
M「一回だけです」(※実際は急遽、別のライヴハウスにも出演した模様)
S「ツアー・ポスターを作ろうと思って。ずっとDay Off～Day Off～Day Off～Day Off～Show～Day Off～Day Off(笑)。なのに、大々的にUKツアー!って」
M「それいいね」
S「イギリス人はブラック・ジョークが好きだから」
■UKの後は?
M「12月にATF(Anal The Fucker)の企画に誘われてて、3月にはOLEDICK FOGGYと武蔵境Stattoで2マンですね。でも今度、僕に2人目の子供が生まれるので、今後どこまでできるかは分からない、やりたいけど無理はできないって感じですね」
■新しい7インチももうすぐ?
S「Static Shockのフェス(※11月3日～6日にかけて開催されたStatic Shock Weekend IV)の始まりと同時に発売されるみたいで。でも、レーベルのBandcampでもう聴けるみた

いつでも見れると思うなよ！いつ解散してもおかしくないから！



い」
N「大阪に行ったときにスゲー言われたよ、"kriegshögやってるの?"、"(新しいシングル)聴いたよ!"って、色んな人たちに」
■何曲入り?
M「3曲+アルファ」
■アルファ?
M「それは聴いてもらった人なら分かる」
S「そんなこと言うと、俺がスベるみたいじゃん」
一同「(笑)」
M「どんな環境で誰が聴いても、みんな音を傾げると思うよ。"なんだこれ?"って。GRINDSHAFTのSeijiくんが"聴いたよ、良かったよ!"って言ってくれたんだけど、"最後のアレにやられた"とも言われて、どう反応していいのか分からなかった(笑)。レコードを買えない人は、良かったらレーベルのBandcampで聴いてください」
■そうしたら、レコーディングは結構大急ぎで?
S「レコーディングやるぞ!ってスタジオに行って、一日で終わらして」
M「急いではなかったけど、ノリでしたね、完全に。"やりたくなったからやる"という感じで」
S「俺は普段は自分の(作品は)聴かないけど、これは結構聴いてる」
M「ちょっと違うことをやれたのが楽しい、新しいことを」
■今までとは違う?
N「俺としてはずっと変わらず、ハードコアをやっている感じだけど」
M「弦楽器の2人が速い曲をやりたがらなくなってて、勢いだけでいく感じの曲ではなくなっているんです。…うーん、Teraのこだわりがすごくよく出ている曲もあれば、Shingoが作った曲も、日本の古き良きエッセンスが入っていたり。かと思えば、最後の曲なんかは全然違うし。昔よりも自然に、湧き起こったものを、みんなが曲として持ってきていると言うか。レコーディングのために作った曲じゃない感じ。"アルバム作るから曲を作らなきゃ"じゃないから、急ピッチで作ったわりに、それぞれの曲の個性がしっかり出ている。(収録曲の)"Love Blood"なんかは、元々は歌詞がなくて遊びで作った曲なんですけど、自然体感が出ている気がする。マスタリングも、コンプレッサかけてないし」
N「加工せず、なるべくそのまんまで」
S「今まではコンプレッサかけてレコーディングでごまかしていたけど(笑)。これは書いておいてください、"ISTERISMOとkriegshögは何かかけていたようだ"って(笑)。"特別な技が(レコーディング・スタジオの)Noise Roomにはあるみたいだ。押してはいけないスイッチが"って(笑)」
■本当に(笑)?
S「あるんですよ、最終的にポチッと押すと、"ヴァァアーッ!!"ってうるさくなるスイッチが(笑)」
■(笑)。そう言えば、そもそもメンバー・チェンジってのがないですよね。
M「ないですね」
S「アメリカ・ツアーだけは違うけど(※当時ISTERISMOのShogoがTeraの代わりにギターを務めた)」
M「誰かが欠けたら辞めようって決めていて。だから、一番思考が読みにくいTeraがやりたくなかったらやらないな(復活しない)って思っていましたね。話は脱線しますが、UKにあいつが行くっていうのが、僕はすごく嬉しいんですよ。アメリカではShogoがいい仕事してくれてすごく感謝している。けれど、世界はTeraをまだ見ていないんです。あいつが作った曲をあいつが弾くところを。楽曲のセンスがTeraは突出している。あいつが作る曲は最初はメンバーも良さが分からないんです。"なんでそこにこだわるの?"っていうところにこだわったり。でも、やっていくうちに、"こういうことがしたかったのね"って分かる。あいつのギターの音とか作っている曲とかは、あいつにしかないと思う」
S「あいつのギター、チューニングが合わないんだもん(笑)。だから変わった音なんだよね」
M「Teraに限らず、今までもこれからもこの4人でやっていきたいですね」
■ISTERISMOが解散したことによって、同世代というか、同時期に始めたバンドがいなくなった感じ?
S「いなくなったね、DEATHTRIBEもいない

し」
M「最後に残った奴が一番強いんだ(笑)」
■ずっと休んでいたのに…(笑)。
S「復活のタイミングが、ISTERISMOの解散と同時ってのがヤバイよね。いきなり解散して、"代わりに俺ら"って感じでライヴ呼んでもらって」
M「そう、誘われるライヴはどれも面白くてラッキーですね。恵まれているな、と。来日バンドと共演してUK行って、それでOLEDICK FOGGYみたいなビッグ・ネームと2マンでしょ。セルアウト・アティテュード全開ですよ(笑)」
S「けど2マンはStattoだから、80人くらいしか入らないのかな。80人も入らないか」
M「kriegshögの初めてやったライヴは、OLEDICK FOGGYに頼んで、Stattoでやったんですよ」
■初ライヴなら見に行ったけど、あれってBATTLE OF DISARM企画じゃなかったっけ?
M「それです、OLEDICK FOGGYに頼んで出させてくれって」
S「だから初心に戻る感じで。この間、OLEDICK FOGGYのドラマーと飲んで、"楽しみだね"って話して。"俺たちはあそこから始まったんだ。デカいところでやっても意味がない"って(笑)」
■結成が2006年だったから、ちょうど10周年とかけて復活したのかな?と思ったんだけど。
S「でも活動していない期間が5年あるからね」
M「あんまりそこは意識しなかったです」
N「2011年に辞めたでしょ。アメリカ・ツアーが終わって、それから俺はSTAGNATIONに入って」
M「十何年ぶっ続けでやれてたらすごいと思いますよ。ISTERISMOもずっとやっていたし、そこは尊敬する」
S「REDNECKSもね、今は止まっているけど」
M「僕らは"辞める辞める詐欺"の前科2犯だから(笑)、ISTERISMOにもいつかは復活してもらいたいと個人的には思っている」
■そもそもどうして解散したの?風の噂では、メタルに行きたいメンバーとハードコアをやりたいメンバーとに別れたって聞いたけど。
M「全然そんなことはないです(笑)。円満離婚みたいなもんです、仲違いもなかったし」
N「やりすぎていたっていうのも」
S「周りに急かされていたのもあったよね、周りの期待がすごくて、"もっとやれ"ってなるんですよ。それが重荷になってきたというか、苦痛になってきた」
M「ライヴをやりすぎて、テンションが、緊張感がなくなってきて。最近は5月にライヴをやって次が8月だったりするから、一回一回にかける情熱が大きくて、"このライヴのために練習しよう!"とか。前は89パーセントしか出せなかったのが、今は120パーセント出し切ってるっていうのがあるかなって」
N「良い緊張感をもってやれてて。ヴォーカルとかドラムは特に体を使うから、逆に俺はkriegshögを辞めてから何もやっていなかったら、ついていけなかったと思う。ずっとやり続けていたから、すぐに戻れたというか」
S「でも、ライヴ楽しいよねぇ。全然緊張しないし、俺はライヴ向きなんだよなぁ」
N「こいつは何もやってなかったのに、ライヴ慣れしていますからね。俺はこの5年間で何本もライヴをこなしてきて、3つもバンドを掛け持っていたのに、復活ライヴでは緊張して」
S「俺以外の3人はひどかったね、5月のときは。思いつめた顔をしてて(笑)」
N「笑っていても、"顔が笑ってない"って言われたもん(笑)」
M「話しを戻すと、復活してみて、"休息期間があって良かったな"って思いますね。やる気が違うから。このやる気を保つには、ライヴをやりすぎちゃダメだなって思いました」
S「人それぞれだろうけど、俺たちにはこの方が合っているね。数少ないライヴに向けて爆発させる方が」
N「俺がやっていた某バンドなんて、ライヴやりすぎて3年間セットリストが変わらなかったから。練習しなさすぎて、ライヴばっかりやっていたから」
S「それはSTAGNATIONのことだと書いておいてください(笑)」
■(笑)。じゃあ、ここらで過去の音源について振り返ってもらおうかなと。まずは2007年リリースの5曲入りデモ。



S「あのデモは、俺は好きだなー。全部ダビングしたから200本、家のカセット・デッキで。だから俺は200回は聴いている」
N「俺も好きだね」
S「あのときからずっとNoise Roomだよね。"Zouo"もデモのヴァージョンが一番好きだし」
M「若い頃の衝動がそのまま詰まっている。あの形態で出せて良かったね」
S「今考えると面倒臭かったよね、Masakiのアメリカの友だちDaiki(ex.MORPHEME、CRIME DESIRE)に黒いカセット・テープを買って送ってもらって、それを家でダビングするっていう。今はプロ・コピーで黒いカセット・テープもあるけど、そんなことも知らなかったし」
M「4人ともワクワクしていた。真っ黒のテープを取り寄せたのは良かったよ、労力かけた分だけ、バンドを知ってもらえた気がしたね」
S「(Boyの)大倉さんのおかげでもあるよね」
M「良く書いてくれてね」
■たしか即完したよね?
M「Boyに卸して、次の日には追加でくれって言われて」
S「何にも分からなかったから、最初はBoyにしか卸していなかったんだよね」
M「いきなりの反応だったから、楽しかったですね。有頂天で」
S「俺はそうでもなかったけど。"こんなのに甘んじてはいけない"と。"一時の感情に流されるんじゃない!"と」
M「一番天狗になっていたじゃん(笑)」
■次は1stシングルの『Hardcore Hell』。



S「『Hardcore Hell』は戦友Hardcore Survivesと一緒に作り上げた感があった」
N「デジタルのご時世に、1曲目と2曲目を止めないで続けて録ったよね」
S「オープン・リールで録ったんだ」
M「曲の切れ目には、よく分かんない爆発音を入れて」
N「爆発音は1曲目と2曲目を続けて録っていたから、そのあいだの変な間を消すために入れているの」

S「ありがたいことに、1stもすぐに売り切れたよね」

M「Flo(※ドイツのHeartfirst Recordsオーナー)が再発して」

S「4thプレスぐらいいったんだったかな。最初はHardcore Survivesからで、次にFloのHeartfirstからで、インナーのレコード袋が黒。3rdプレスはMasakiが歌っている写真になって、その次のプレスがNenjiさんで。テキサス(※Chaos In Tejas)では、ジャケットがSOくんで中身がHeartfirst盤ってのもあった。あれはメンバーの名前もふざけていて、誰もそのことに突っ込んでくれなかったのが寂しかったな。MasakiがDisMasaki47Poraoていう名前になってて(笑)」

M「ShingoがShinGods Of Goat。神々のヤギじゃなくて、ヤギの神々という(笑)」

S「TeraはTera-Sectで、当時の(Dollでの)インタヴューでは、"ANTI-SECTのLPを売ったTera-Sect"(笑)」

N「俺はNenji Of The Livingdeadだったなぁ(笑)」

S「そういう小ネタを入れても誰も何も言ってくれないんだよね」

■(笑)。1stシングルをレーベルからメール・オーダーで買うとついてくるカセット・テープもあったよね。THE ICONOCLASTとTHE SEXUALのカヴァーを収録した。



S「あのときも外野がガヤガヤ言ってきてさ、"メール・オーダー限定とかやり方が汚い"とか、SOくんも攻撃されていたよ。無料でつけているんだよ、レコーディング代もかかっているのに。あの心意気を汲み取れない奴はもういい!ってなった。あの頃はレコードもすぐ売れていたから」

M「"あいつら調子に乗っている"ってのもあったよね」

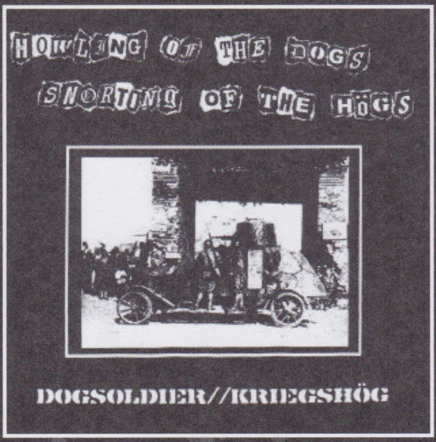


S「調子に乗っていたしね」

M「ベースが一番乗っていました(笑)」

S「調子に乗らないとバンドなんてできないでしょ?!バンドをやっている時点で調子に乗っているからね。人前で演奏するなんて調子に乗っているよ」

■次はDOG SOLDIERとのスプリット。



S「DOG SOLDIERが、自分たちのことしか考えていないジャケットを作ってきて」

M「そうだ(笑)」

S「俺が作り直した」

M「でも未だにDOG SOLDIERの人気がないのが分からない。最近のEPも格好良いし」

■今もやっているの?

M「今もやってる。元々ファンだったし、一緒にツアーしてスプリットを出せて嬉しかった」

S「スゲー人気なかったよね、物販の売り上げとか全部あげたもん。スプリットが売れたお金も全部あげて」

M「しかも、名古屋のリハ中にあいつら喧嘩しだしたんですよ。初日に泥酔しすぎて、ライヴのときにメンバーそれぞれが違う曲を演奏したんです。名古屋でのリハ中に、"俺は昨日みたいなライヴはもうしたくないんだ!"って(笑)。当時は海外のバンドが来るのもまぁまぁレアだったし、ましてや、駆け出しのバンドがサポートするってのも珍しかった。だからこそ僕らにとってもエキサイティングだった。勢いでやったからこそ印象深いですね。自分が死ぬときにどの瞬間を思い出すかと言えば、あのツアーのことがやっぱり入ってきますね。そのくらい思い出深いですね」

N「だって俺、UNARMのメンバーに、"名古屋はこうだった"とか、"津山はこうだった"ってメールでツアー・レポートみたいなのを書いて送っていたもん。"スゲー地方は面白いよ"って。(当時)UNARMはあんまり地方に行ってなくて、大阪とか岡崎くらいまでで。"スゲー楽しいから今度行こうぜ!"って。UNARMとkriegshögを一緒にやっていると、ツアーでもリリースでも、大抵kriegshögが先にやるんですよ(笑)」

M「僕は新しいDOG SOLDIERを聴いてもらいたいですね。でも、最近は再評価されているんですよ、アメリカでは」

S「いや、初評価だろ(笑)」

M「Alaric(※DOG SOLDIER、BLOOD SPIT NIGHTS、CUT THROAT etc)がやるバンドは過小評価されるんだよね(笑)」

■続いてDEATHTRIBEとのスプリット。



N「一番バランスが良いというか」


※Photo by Simon Parris

S「俺、あれはベースの音が嫌いだな。全然違うんだもん」

M「ヴォーカル的には出来が良かったけど。新宿にあるLOVEのオブジェの前で、みんなでポーズをとったりしたね」

S「最後にSOくんが"Winter!"って言っている、あのときAMEBIXをみんな聴いていたから」

M「あれについても誰も何も言ってこなかったね(笑)。お互いの曲をカヴァーし合ったりして、面白いネタたくさん提供してるのに」

N「でもDEATHTRIBEから、"あれはひどい"って言われたけど(笑)、"しっかりカヴァーしてくださいよ"って(笑)」

M「これのメンバー名もふざけてて、全員SODOMの曲名をもじってるんですよ。そこに唯一気付いて触れてくれたBoyの大倉さんはさすがでした(笑)」

■では、アルバムについて。



S「できたときは、"ダメだこりゃ"って。でも今聴くと、"イケてるな!"って。気分による、全リリースともに。"いいじゃん"と思う日もあれば"全然ダメじゃん"って日もあって。"New Wave Of Brutality & Hardcore Massacre"も、誰にも突っ込まれずに」

M「海外の人は結構受けていたけどね」

■あぁ、ジャケを開いたときに掲載してある言葉。

S「あの頃は、俺とMasakiがNWOBHMにドハマりしていて、ANGEL WITCHとか意識をして」

M「ドラを鳴らしていたり。みんな困惑しているんだと思う(笑)。あと、必殺の曲がアルバムにはあるんですけど、ライヴで盛り上がる"Burn"ていう曲と、全く盛り上がらない"Life Is..."という2曲(笑)」

N「"Life Is..."は今やっているとスゲー楽しいね、時が経っているせいかもしれないけど」

S「あれは曲の出だしがドラムのカウントから始まるんですけど、"1,2,3,4～"って言っても演奏が始まらなくて、もう一回"1,2～"って言ったら突然曲が始まるっていう」

N「完全にイジメですからね(笑)」

S「そういう小ネタを挟んでいるのに、誰も評価してくれない」

M「"アルバムが格好良かった"という評価も嬉しいんですけど、"あれ面白かったね"って言われたい(笑)。しかし、あのアルバムは帯もついてたり、ゲートフォールドだったりスゲーなと思いましたね、"よくやってくれたなぁ"と」

S「赤いレコードを出したかったから、それができて良かったね」

M「あのときの集大成だったよね。でも、今回の7インチが一番良いよね、前に進んだ感じで」

■改めて最新作について。



S「45回転のドーナツ盤なんですよ、あれがやりたくて」

M「冒頭でも話したけど、バンドを始めた頃に近いというか、自然にできた曲をやろうと。3曲とも全然違うし」

S「聴いていて飽きない」

M「最後の曲、"Love Blood"は自信がなかったんだけど、歌ってみたら"いいじゃん!"って」

S「でもRAKTAのライヴのときにやってみたら、全然受けなくて。みんなポカーンって。あれは7インチが出て、みんなに浸透するまでライヴでやるのは止めておこうと」

M「"Life Is…"の再来かと思ったよ(笑)。でも、"こんな曲もやるの?!"って言われたいよね」

■それでは、今後の目標なりを。

M「ブラジル・ツアー(笑)?」

S「ブラジル行きてー!」

N「結構よく言われるのが、海外から"UNARMもやっているんだから、kriegshögとUNARMで来いよ"って」

S「海外からは誘われるよね、オークランドのフェスとか。あとオーストラリアにはYeap(ex.PISSCHRIST、KRÖMOSOM etc)から誘われてて、インドネシアの奴からも呼ばれているし。俺は行きたいんだけどね、ブラジルに。Nada Nada DiscosのMateusとの繋がりもできたし」

N「俺もブラジル行きたい」

M「行ったのってVIVISICKくらいじゃないの?」

N「VIVISICKのツアー・レポート読んだら、ヴァンから会場以外は、危なすぎるから行っちゃいけないとか、そんな場所もあるみたいで。だからこそブラジル・ハードコアが生まれたんだろうし。そういう環境下だからこそ」

S「でも今後は分からないかぁ」

N「俺は今後もバンドはずっと続けるつもり」

S「kriegshögじゃなくてもってこと?」

N「kriegshögをやるんだったら俺はやる、…やらせてくれるなら(笑)」

■最後に一言、お好きな言葉で締めてください。

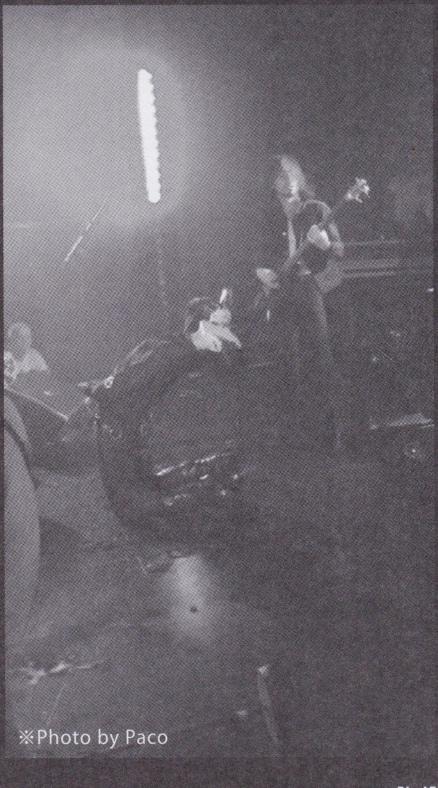
S「I love you(※奥さんに向けて)」

N「Hi I'm kriegshög drummer!Yeah!!」

M「嫁さんからメールが来ててさ、"妻が一番大事ですって伝えた?"って。だから、妻が一番大事です。本当に、これ見られるからね、書いておいてください(笑)」

■ハードコア・バンドなのに…(苦笑)。

S「8割は使えない話しばかりだったなぁ(笑)」


※Photo by Paco



IV REICHはスペインにおいて、パンクのトップ10に入るバンドだと考えられている。彼らのロウなサウンドと剥き出しの歌詞が僕は大好きなんだ。今回、僕はギタリストのPilar Buenoと話す機会を得た。彼女は自分たちの過激なアティテュードや、貧困や軍隊に対する楽曲について語ってくれた。虐殺、馬鹿げた夢、卑劣な警察、不快な独裁者、生きる権利、そんなことが彼らの曲のタイトルにもなっている。そう、80年代から何一つ変わっていないのさ。

INTERVIEWED:Luis

MIL AÑOS DE ANARQUÍA 千年に及ぶ無秩序

IV REICH

■ヘイ、Pilar。IV REICHの出身地であるサラゴサについて聞かせてもらえるかな?

「サラゴサは主要都市からそれほど離れていないから、見て周るにはとても良い都市よ。バルセロナやマドリッド、バスク国、それにヴァレンシアといった賑わっているところの中間に位置しているからね。街から出て演奏するのもとても容易だったし。バーや会場もたくさんあって、いつもパンクスやスキンズ、ロッカーズ、モッズがいた。そして今でも、それは変わっていないと思う。新たな活動ではあるけどね。良い土地よ」

■IV REICHの始まりについては覚えている?君たちはサラゴサで最初のパンク・バンドの一つだったと思うんだけど、どうかな?

「えぇ、私は覚えているわ。私たち全員、ストリートで暇を持て余していて、それでCotaがバンドをやろうって言い出したのよ。だから突如として、誰が何を担当するか考えることになって、私はエレキ・ギターを手にしたの。そして自分たちの曲やカヴァーを吐き出し始めたところで、ドラムが見つかった。それからマイクを手に入れて、練習するスペースも見つかった。ともかく、少しずつだけど、私たちは理想を実現させていったのよ。そうこうしていたら、COCADICTOSというバンドが登場してきて、ショーを一緒にやったり、彼らだけでやっていたり、私たちだけでやったりとね」

■IV REICHという名前にしたのは?

「ヒトラーが第三帝国時代に、"百年の戦争と千年の平和"という言葉を宣言していたんだけど、それがCotaの頭にあったみたい。それで彼がこう言ったのよ。俺たちは千年に及ぶ無秩序を実行し第四帝国(IV REICH)になるんだって。私たちはこの名前が挑発的だから気に入っていた。他の名前なんて考えもしなかったわ」

■最初のラインナップと、もし何度かメンバー・チェンジがあったのならそれも教えて。

「始めた当初はCotaがヴォーカル、私、Pilarがギター、Juanraがベース、Isaがドラム。だけど、Juanraが軍隊に行ってしまい、死んでしまった。私たち全員は怒りと共にバンドを再編した。Isaをベースに、そしてJuanviがドラムとなった。何年か経って、私たちはIsaを追

い出したの。だって彼女はバルセロナに引っ越した後、練習どころかショーにも来なくなったから。それでPattyに加入してもらった。Juanviもバンドを辞めてしまったんだけど、それは単純に彼が疲れてしまったから。その後にEduがドラムとして加入して、このラインナップで何回かショーをやったわね」

■IV REICHはどんなバンドから影響されたの?

「当初はよくSEX PISTOLSとCLASHを聴いていた。EXPLOITEDやANTI PASTI、ADICTS、DISCHARGEといったバンドが登場してくると、そういうバンドも大好きになったわ。だけど、DEAD KENNEDYSが現われたときには、パンク・ミュージックを作り、演奏するという概念に変革がもたらされた。当時、ハードコアと呼ばれていたものは、ファストでポリティカルな歌詞だったでしょ。それに私たちは影響されたのよ。私たちもファストで、メロディがある演奏を試みていたわ。その頃には、私もギターの弾き方を学習していたし、ハハハ」

■自分たちの音楽をどう表現する?

「はじめはダーティ・パンク、その後にハードコア。最終的にはパンク・ロックね」

■初めてのショーはどんな感じだった?

「最初のショーは大惨事だったわね、ハハハ。だけど、楽しかったしみんな見に来てくれたな。だからサウンドの良し悪しは重要じゃないのよ。地元から出て演奏するようになったときも、同じようなことが起こった。素晴らしいサウンドのときもあれば、そうじゃないときもあったけれど、いつでも楽しかったわ」

■初めてのデモをリリースしたのはいつのこと?どうして録音することができたのかな?

「1984年に録音したの。Juanviには兄弟が一人いて、デビューしたポップ・バンドのシングルのレコーディングをやっていたんだけど、その彼がデモを録ろうって提案してくれたのよ。彼が費用を全て払ってくれたし、協力には感謝している。だけど、デモは500本が完売したから、彼は費用を回収できたけどね。別途、300本リリースしたけど、それも完売した。私たちには全然お金も資産もなかったから、売れなかったら大変なことになっていたわね」

■リリース作品のアートワークを担当していたのは誰かな?

「Cotaは想像力が豊かでね、よく描いていた。あとはみんなで描いていたかな」

■歌詞についてもちょっと聞きたいんだけど、当時はどんなことが言いたかったの?

「そうね、政府や宗教、軍隊、警察、男性支配に対してだったり反軍国主義、その後はもっと労働階級の闘争とか、もっとポリティカルになっていったわ。当時は発言の自由が限定されていて、抑圧が強かったのよ」

■"No Al Ejercito"(Not To The Army)という曲についても聞かせて。当時、ああいった曲を作ることがどうしてすごく重要だったのかな?

「軍隊は、キッズが18歳になると強制的に徴兵していたからよ。一年間を奪われて、あなたと、あなたの家族の命の半分も奪われた。私たちには軍隊と戦うという選択肢しかなかったのよ。その頃、たくさんの若者が射撃中に起こった事故で死んでいった。それは私たちの初代ベーシスト、Juanraにも起こったことなのよ。そう、私たちに起こったことなの。私たちの、軍隊に対する拒絶はより強固なものとなった。あの曲は彼に捧げたものなのよ」

■地元以外ではどんな場所で、どんなバンドと共演した?

「地元から出て初めてのショーはエレンテリアでR.I.Pとだったんだけど、ものすごく不快だった。みんな私たちにたくさん唾を吐きかけてきたからね、ハハハ。バルセロナではDECIBELIOSと、ここサラゴサではLA POLLA RECORDSと一緒にやったことがある。一番プレイしたところはバスク国ね。たくさんR.I.Pと共演したし、幸運にも外国のバンド、MDCやBGKとも共演することができたな」

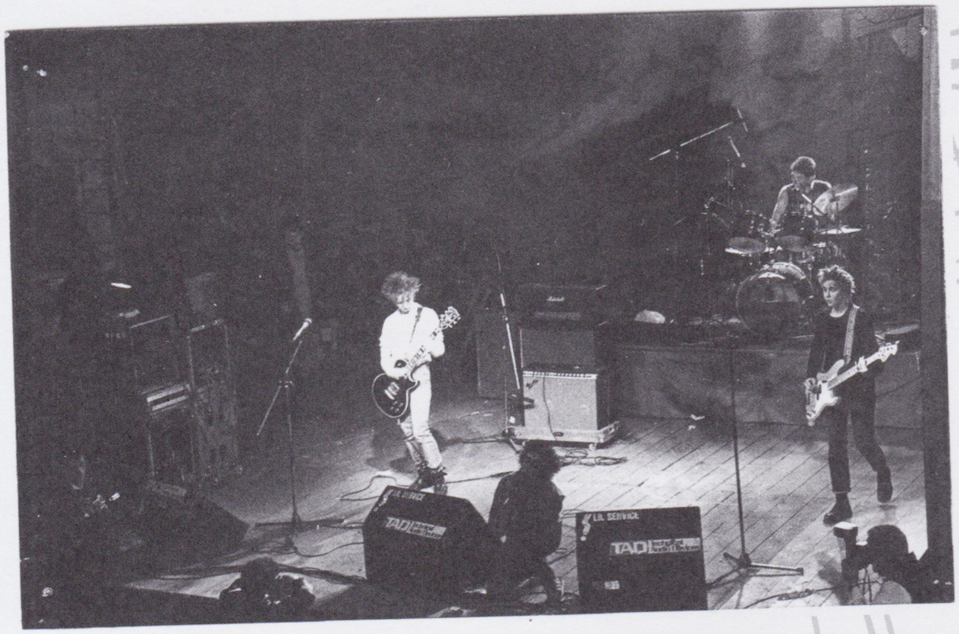
■当時はどんなバンドがお気に入りだったの?

「DEAD KENNEDYS、SEX PISTOLS、DIRT、CRASS、それに当時のハードコア・バンドの全てね。BAD BRAINSは本当に大好きだった」

■どうしてLPを80年代に出さなかったのかな?当時は難しかったの?

「インディペンデントなレコード・レーベルなんて少ししかなかったし、その多くがバスク国にあったのよ。バスク国にはたくさんのバンドがいたから、レーベルは必然的にそういったバンドをまずリリースしていた。あの頃はイン





ターネットなんてなかったし、口伝えでしか知ることができなかったしね。私たちにはJuanviの兄弟がやっていたレコード・レーベルがあって、リスクを冒してまで私たちのデモをレコーディングしてくれた。アルバムのレコーディングも頭にはあったけれど、今とは違って当時はものすごくお金がかかったからね」

■1983年にサラゴサでやったショーについて話してもらえる?

「そうね、そこにはみんなが来ていた。サラゴサのパンクス全員だけじゃなく、パンクスじゃない他のグループ、ロッカーズだったりメタルヘッズも来て全てがちょっとミックスされた感じだった。そして、みんな良い時間を過ごしてすごく楽しんでいたの。ショーの邪魔をすることなくポゴ・ダンスして、みんな友だちみたいになってね。私たちって大抵は、他の音楽スタイルのバンドと一緒にやっていたし、うまく付き合えていた。みんな楽器を貸してくれたりしたしね。とても良い友だちだったのよ」

■あなたにとって、ベストだったIV REICHのショーは何だったか覚えている?

「たくさんのバンドが出演した、サラゴサのPalaboxというバラックでのショーがベストなものの一つかしら。私たちの出番は最後だったんだけど、Cotaが警察の格好をしてね、それで"Dirty Cop"を演奏したのよ。午前2時だったし、みんな少し酔っぱらっていたけど、Cotaが強烈なフレーズをオーディエンスに向けて放つと、オーディエンスはそれに応えていた。素晴らしかったな。とにかく、いくらか危険ではあったけれど、万事うまくいった、誰もケガをしなかったし、ハハハ。もう一つのベストだったショーは、En Brutoという会場で満員になったやつかな。サウンドも最高だったけど、ショーが終わるとドアのところに警察が現われてね、警察とパンクスとの戦いが始まった。翌日の新聞には私たち全員が掲載されたから、私たちの宣伝になったわ。笑えたしね」

■国外で演奏したことはある?

「いいえ、やりたかったんだけどね。グローバリゼーションというものが(幸運なことに)存在しなかったから、私たちはお金も情報も持っていなかった。国から出るのはややこしかったのよね、どこに行くのか?とかね。今では、そう、全部分かっている。世界のどんなところにいる人ともすぐに話すことができるしね。私たちはありとあらゆる、実際の、本物の情報を得ることができる。当時とは全然違うわね、私たちがやりたかった頃とはね」



■80年代を振り返って、あなたたちはラテン・アメリカのパンク・シーンについて何か知っていましたか?

「パンクスがいるってことは知っていた。私たちはラテン・アメリカのパンクスから手紙を受け取っていたからね。封筒にお金を入れて送ってきてくれたたくさんの人たちに、Juanviは私たちのデモを発送していたのよ。特にメキシコが多かったかな。だけど、ラテン・アメリカのバンドのことは知らなかったわ」

■ラテン・アメリカのパンクを、80年代のスペインで見つけるのは難しかった?

「もちろん。誰かがJuanviにデモ・テープを送っていたのかもしれないけどね。彼は数多くの人たちと手紙のやり取りをしていたの。だけど、私はよく覚えていなくて」

■多少なりとも作曲する上で、ラテン・アメリカからの影響はあった?

「当然よ。ニカラグアの革命家、Sandinoとかね(※ニカラグアに進駐していたアメリカ海兵隊に対して抵抗運動を繰り広げ、アメリカ合衆国の支配に対する抵抗の象徴となった)。"Aquel duro pecho"という彼の曲を作ったこともある。ラテン・アメリカの政治にはすごく関心があったのよ。小作人とそのボスとの階級闘争にも興味をそそられたわね」

■あなたたちの楽曲は、現在の現実も反映している。当時から30年も経ったというのに、なぜ何も変わらないのだと思いますか?

「私は全てが、同じことを繰り返し、上がったり下がったり、行ったり来たりをしているんだと思う。現代の進歩と資本主義、だけど多くの面において私たちは後退している。労働者の闘争は形を変えたけど、今でも続いている。私たちがこれまでに獲得してきた権利も、世界恐慌とともに後戻りしてしまった。そして貧困は決してなくならず、これまでよりも多くの家族にとって、今や身近なものになってしまっているわ」

■2007年にBazofia RecordsからLPをリリースしたけど、このアイデアはどのようにして出てきたのかな?

「Oscarがメンバー全員に電話してきたの。彼は私に、全員に関わってもらいたいんだと話していたわ。私は自分が持っていたものを全て渡した。LPを出すという話しに、私は興奮したからもっと参加したかったのよね。彼は色んな人たちと連絡を取り合って、私たちですら存在を知らなかった写真や音源を集めていた。すごくエキサイトしたな。全ては彼のおかげで実現したのよ。JuanviとIsaがジャケットとブックレットのデザインをしたわ」

■80年代のスペインのパンク・シーンと現在のシーンとではどこが違っている?

「今のシーンについては話せないわね。私は関わっていないのよ。"My Space"をやっていたときは、ここのバンドや外国のバンドを色々と聴いていたんだけどね。80年代当初との違いと言えば、あの頃は全てが新しかったけど、



今では、もう一つなのよ。格好良いバンドがいないっていう意味じゃない。だけど、良くも悪くもないバンドがたくさんいるってこと。シーンに関しては、私たちがパンクスだった頃、服は自分たちで考案して手作りしていたでしょ。でも今や、スタイルがたくさんあって、ハードコアとかグラインドコア、エモっていう感じでね、お店に行けばその手の服が見つかる。私たちはもっとアーティスティックだった、とは言えるでしょうね」

■いつ、どうして解散したの?

「最後のショーは1988年だった。それから解散したの。Juanviがバンドから去った時点で既に終わっていたようなものだったけど、Cotaと私は、PattyとEduのおかげで数回のショーをやることができた。ドラッグによって私たちは解散したのよね。練習もなまけるようになって、バンドに全く責任を持たなくなっていった。何もできなくなっていたの。バッド・エンドだったわ」

■何かバンドに関する逸話はある?

「地元の街でショーをやっていたときの話しだけど、Isaと私は楽器を持ち歩く唯一の女の子だった。だからみんな驚きの目で私たちを見ていたな。私たちは笑っていたけどね。そして街では演奏できなくなった。みんなは私たちのことを気味悪がっていたし、叩きのめしたいと思っていたのよ。襲われるのを恐れて、私たちは街から去ったわ。それから、私たちのことをオーケストラみたいなものだと思って招いてくれた街もあったんだけど、もちろん、彼らのモラルは傷つけられたでしょうね」

■現在、IV REICHとして計画していることはある?

「全然ないわね。私たちに生きててもらいたい人たちには、計画があるでしょうけど。このイ



ンタヴューをしてくれたあなたとか、OscarがセカンドLPをリリースするかもとか、誰かが私たちの曲をカヴァーするかもとかね。それ以外にはないわよ」

■日本については何か知っている?

「そんなには知らないわ。だけど、魅了されている国ではある。とても礼儀を重んじていて、そこから私たちは多くを学ばなければならないと思っている。多分、いつの日か、私は日本を訪れるでしょうね。パンク・シーンについてはインターネットを通じてだけど知っているわ。大好きよ」

■日本の人たちにメッセージはある?

「日本にもファンがいることは知っているわ。カルチャーとミュージックを共有できて嬉しく思う。"Panku wa shinde imasen"」

DISCOGRAPHY

1-SELF RELEASED DEMO TAPE-
JANUARY 1984, 1500 COPIES.

2-COMPILATION TAPE-MUESTRA DE POP ROCK Y OTROS ROLLOS-
XIRIVELLA RECORDS 1984.

3-SECOND SELF RELEASED DEMO TAPE-
FEBRUARY 1985.

4-FULL DISCOGRAPHY CD-
OUTLINE RECORDS, 2001.

5-FIRST DEMO TAPE, RECORDED IN JANUARY 1984
RE-EDITED BY DESOBEDIENCIA RECORDS ON 2007.

6-IV REICH-MIL ANOS DE ANARQUIA
LP-BAZOFIA RECORDS 2007.



Riot City Records Simon Edwards interview

暴動都市物語 後編

※本稿では前号に引き続きまして、UK 82を代表するパンク・レーベル:Riot City Recordsのオーナーだったsimon Edwardsへのロング・インタヴュー、その後編をお送りします。

INTERVIEWED:Negative Insight



DISORDER「Perdition」(1982) 時のラインナップ
(左から)Boobs, Steve Allen, Virus, Taf

■DISORDERをRiot Cityのカタログに載せる代わりに、Disorder Recordsを設立してそこからリリースした理由は何だったのかな?その頃には、すでにCHAOS UKの作品をリリースしていた?

「DISORDERはRiot Cityに所属したがらなかったからさ。DISORDERは自分たちをRiot Cityにはハードコア過ぎるし、VICE SQUADはお上品過ぎると考えていたようだね」

■本当に?

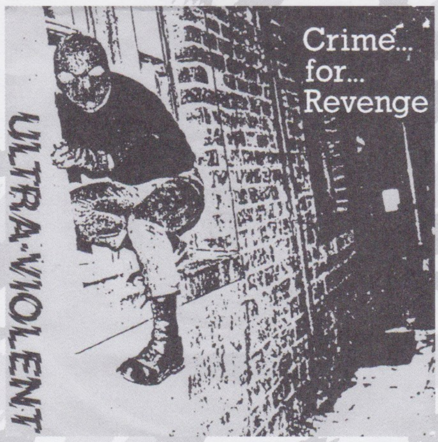
「単純な話しさ。僕は心底、DISORDERのTafが好きだった。それに、僕がやっていたHeartbeat Recordsからリリースしたバンドに、彼は所属していたしね。このことを君は知っている?」

■いや、なんていうバンド?

「彼はX-CERTSのメンバーだったんだよ。そう、格好良いバンドだったね」

■それは知らなかったな。彼はDISORDERの他のメンバーより年上だったの?

「そんなことはないと思うよ。でも正直に言うと、僕はTafが今、何歳なのかサッパリ分からないんだ。Tafは歳をとらないんじゃないかな、ハハハ。まぁ、話しはこうさ。彼らは自分たちなりのアイデンティティがあるべきだと考えていた。CHAOS UKよりも、彼らはずっとハードコアに縛られていたからね。当時、僕はそう理解していたよ。それで彼らはRiot Cityの一員になりたくないと感じていたし、僕もそのことについては嬉しかったな。だって、前述したように僕は彼らのファンでもあったし、彼らの出自も知っている。だから、僕たちはDISORDERのためにレーベルを設立することに決めたんだよ」



■VICE SQUADやABRASIVE WHEELS、それにEJECTEDといったバンドのレコードはものすごい枚数が売れたんだろうけど、ULTRA VIOLENTやEMERGENCY、NO CHOICE、UNDERDOGSといったバンドのリリースはどうだったのかな?そういったバンドのレコードは何枚プレスしたの?

「5000枚だったかな、3000枚から5000枚だったと思う。ULTRA VIOLENTは僕がRiot Cityからリリースした中でも、常にお気に入りの一枚だったね。素晴らしい作品だったと思うよ。同様にEMERGENCYも好きだよ。EMERGENCYは元々BLITZと関係があったんだ。このことは知っていた?」

■いや、それも知らなかったな。

「そうだったんだよ」

■どんなキッカケで彼らが繋がったのかは知っている?

「彼らは基本的に、みんな友人同士だったんだよ。BLITZと一緒にギグもやっていたな。それでBLITZのメンバーの一人が、"曲ができたんだけど、どうも俺たちっぽくないんだよな。ちょっと違うんだよ"なんて話しかけてきた。それで僕は、"分かった、それなら聴いてみようじゃないか"と思って、その曲を送ってもらったんだ。そしたらすごく良い曲でね。まぁ、そう、これでこの話しは全てさ」

■ULTRA VIOLENTをリリースしたとき、彼らのことはデモで知ったの?

「いや」

■それなら、彼らをライヴで見たのかな?

「ひどいデモ・テープを彼らは僕に送ってきたんだけど、その中の2曲は僕の好みだった。だけど、彼らは他の誰かのためにレコーディングしたと僕は思っていたんだ。他の人と何かをやるのだろうと、僕はそう確信していたんだよね」

■Ian Glasperの『Burning Britain』を読んでいたら、ULTRA VIOLENTに関して書

かれていて、そこには、「7インチのために4曲をレコーディングしたけど、レコードに収録されたのは3曲だけだった。収録されなかった4曲目は"Sign Of The Times"という曲だった」とあったんだけど、どうしてこの曲がカットされたのか理由を聞かせてください。

「理由は2つ。良いラウド・カットのEPにするためには収録時間が長すぎたんだ。それに、僕たちはA面はシングル・トラックにしたかったからね」

■どのようにして新しいバンドやレコードをリリースするバンドを見つけていったのかな？レーベルの評判だったり、作品のクオリティを維持するなんてことは気にかけていた？



VARUKERS『Another Religion Another War』(1984) 時のラインナップ
左から：Andy Baker, Rat, Damian Thompson, Tony May

「僕は自分の好きなものをリリースしていただけさ。意外に思う人もいるかもしれないけど、リリースした作品全てが、僕は音楽として好きなんだ。そうじゃなければ自分が楽しむことができないからね。自分で聴いてて楽しめるものを手掛けたかったんだ。だから、僕がRiot Cityからリリースした作品は僕が好きなもの。シンプルだろ」

■繰り返しになるけど、どうやってバンドを見つけていたの？

「そうだな、前述したように、デモ・テープをドッサリ手に入れていた。僕はそれらをふるいにかけ、選んでいった。バンドのライヴを見て、「お、このバンドは記録に残す価値があるな」と思わせられることがあれば、「ねぇ、ちょっと、君たちがやっていたあの3曲はすごく良かったよ。シングルとして出したくはないかい？」って言うんだ。正直に言ってゆるい感じだったよ。長期的な見通しなんてなかった。レーベルを続けていく中で見つけたバンドを選択し、取り上げただけさ」

■Riot Cityのバンドについて、君は意図的に、様々なタイプをリリースしていたのかな？例えば、VARUKERSやCHAOS UK、ULTRA VIOLENTのサウンドはNO CHOICEとは全然違っていたよね。

「いや、何というか、繰り返して言うと、僕の音楽の趣味は常にすごく幅が広かったってだけさ。だけど、CHAOS UKとNO CHOICEというバンドの間には、それほど信念に関しての違いはなかったと思う。彼らの立ち位置は同じだった。ただ、異なる方法でやっていただけなんだよ」

■アナーコ・シーンのバンド、EXIT-STANCEやFLUX OF PINK INDIANSであったり、ポスト・パンク/ゴス・バンドと関わろうという考えはなかったの？No Futureはちょっと試みていたよね。例えばSCREAMING DEADをリリースしたりさ。





「もちろん。かつて、SSTと一緒に何かやろうとしたことがあるんだ。そう、僕はBLACK FLAGのメンバーと話していたし、アメリカのハードコアをリリースするつもりだった。実際に、『Hell Comes To Your House』というアルバムも出したよ(※アメリカのBemisbrain Recordsがリリースしたコンピで、SOCIAL DISTORTION、45 GRAVE、CHRISTIAN DEATHなどを収録。Riot Cityは、Riot State名義でUK盤をリリースした)。他にも予定していたものはあったんだ。手を広げて、何か違うことをやろうと思っていたんだよ。だけど、止めることにした。そんなことをするだけの充分な時間はないだろうし、僕はずっと全てのことを自分一人でやってきた。パートナーなんていなかったし、誰も僕を助けてはくれなかった。Riot Cityでやってきたその全ては、完全に僕が一人でやったことだ。僕はそうやってきた。人を信用していないってわけじゃない、ただ、失敗するにしろ成功するにしろ、自分自身でやってみたかったのさ。そのやり方で、僕は楽しんでいたんだ」

■君からの誘いを断わったバンドや、レコーディング前に解散してしまったバンドはいた? 逆に、君が断わって後悔したバンドや、依頼したかったバンドは?

「ONSLAUGHTだな」

■本当に?

「うん、ONSLAUGHTは断わった」

■『Power From Hell』LPか何か他の作品で…。

「何もかもさ。彼らはデモを持ってパブにやって来た。それで、「ヘイ、こいつを聴いてもらえないかな?」と言ってきたんだ。僕は、「いいよ」と言って自宅に持ち帰って聴いたんだ。僕は気に入ったよ、だけどやらなければならない他のリリースのことを考えた。ONSLAUGHTのための時間はなかったんだ。それで断わったんだ」

■それってRiot Cityが終わる頃の話し?

「うん、そうだ、そのくらいさ」

■『Power From Hell』LPは明らかに素晴らしい作品だけど。

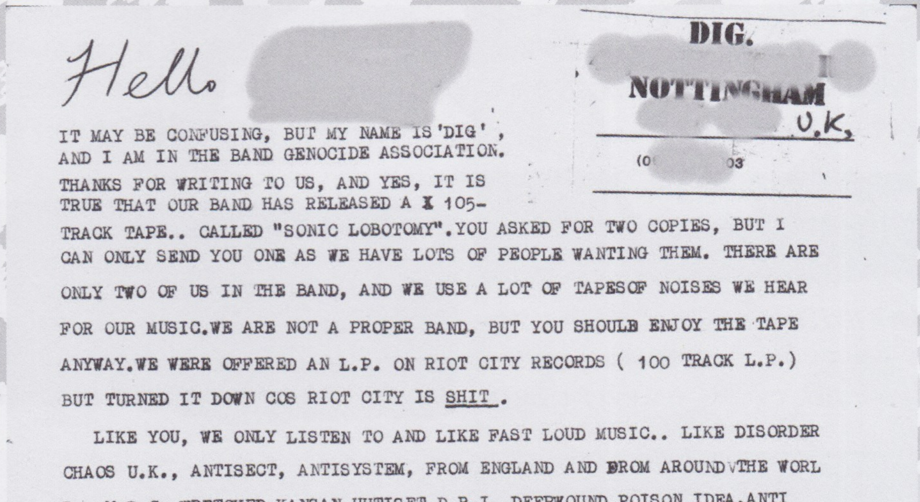
「分かっている、分かっているよ。恐らく、Riot Cityの売り上げがまとめて落ち始めた時期だったんだ。それで多分、やりたいことをやるだけの気力がなかったんだと思う」

■GENOCIDE ASSOCIATIONというバンドのメンバーが、後にEarache Recordsを設立したわけだけど、彼らが当時、Riot Cityからレコードのオファーがあったと言っている文章がオンラインにあるんだ。これが事実なのかデタラメなのか気になっていたんだけど。

「GENOCIDE ASSOCIATIONとの繋がりについては本当さ。バンドは一本のデモを送ってきて、僕は感銘を受けたんじゃないかな。どうしてリリースしなかったのかは、ハッキリしないけど」

■君がバンドにシングルを出そうと頼み、バンドは3曲入りのシングルを提案する。そしてバンドはスタジオに行くけれど、思いのほか曲をたくさん録音してしまった、としよう。その場合、君、もしくはバンドがベストだと感じた3曲を選ぶのかな?それとも他のやり方で?

「いや、スタジオに行く前に同意した3曲を録りに、バンドはスタジオへ行くのさ。そうでもしなければ、バンドは殺伐としたスタジオに一週間ずっといるハメになってしまうからね。そ


Hello [redacted]

DIG.
[redacted]
NOTTINGHAM
[redacted] U.K.
(0[redacted]03

IT MAY BE CONFUSING, BUT MY NAME IS 'DIG', AND I AM IN THE BAND GENOCIDE ASSOCIATION.

THANKS FOR WRITING TO US, AND YES, IT IS TRUE THAT OUR BAND HAS RELEASED A ~~X~~ 105-TRACK TAPE.. CALLED "SONIC LOBOTOMY". YOU ASKED FOR TWO COPIES, BUT I CAN ONLY SEND YOU ONE AS WE HAVE LOTS OF PEOPLE WANTING THEM. THERE ARE ONLY TWO OF US IN THE BAND, AND WE USE A LOT OF TAPESOF NOISES WE HEAR FOR OUR MUSIC. WE ARE NOT A PROPER BAND, BUT YOU SHOULB ENJOY THE TAPE ANYWAY. WE WERE OFFERED AN L.P. ON RIOT CITY RECORDS (100 TRACK L.P.) BUT TURNED IT DOWN COS RIOT CITY IS SHIT .

LIKE YOU, WE ONLY LISTEN TO AND LIKE FAST LOUD MUSIC.. LIKE DISORDER CHAOS U.K., ANTISECT, ANTISYSTEM, FROM ENGLAND AND BROM AROUND THE WORLD ..M.D.C., WRETCHED, KANSAN UUTISET, D.R.I., DEEPWOUND, POISON IDEA, ANTI CIMEX, D.Y.S., ...ALSO WE LIKE CRASS.!! THEY ARE VERY IMPORTANT BAND AND HIPPIE PUNKS ARE GREAT TOO! MAAAAAAN.
WE WOULD LIKE TO APPEAR IN YOUR [redacted], BUT SORRY WE CAN'T APPEAR ON YOUR [redacted] SAMPLER. BUT I AM INTERESTED TO HEAR THAT TAPE IF IT IS OF FAST BANDS FROM [redacted].

YOUR QUESTIONS..............
1. BAND FORMED EARLY 1983, NO MEMBERS IN ANY OTHER BANDS, WE PLAY NO INSTRUMENTS, USING ONLY TAPES FOR NOISE, AND OUR OWN LYRICS ON TOP.
2. OUR SONGS ARE INFLUENCED BY... NOISE, DISTORTION AND VELOCITY
3. IF WE DID A 7", WHICH WE NEVER SHALL, IT WOULD BE 50 TRACKS!
4. THE U.K. PUNK SCENE IS PRETTY BAD RIGHT NOW..DISCHARGE ARE HEAVY METAL (WE LIKE SOME HEAVY METAL.. MOTORHEAD/METALLICA/SLAYER/VENOM) AND CHAOS U.K. HAVE SPLIT...DISORDER ARE O.K., SO TOO ARE ANTISECT, WHO ARE EXCELLENT. SOME GOOD FAST BANDS ARE COMING FROM ENGLAND SOON..PANIC STRICKEN, LEGION OF PARASITES, AND [redacted] ARE RELEASING A 400-TRACK C90 TAPE SOON. YES, FOUR HUNDRED TRACKS.
IF YOU DON'T BELIEVE ME, WRITE THEM...... [redacted] NOTTS ENGLAND
5. FANZINES ARE GREAT. PUNK LIVES IS TOTAL SHIT. MAXIMUM ROCK N ROLL IS THE BEST FANZINE,, (I WRITE U.K. PEICE IN THAT!!) issue 4,5,6,7,8,9
6. THE BAND HAS BEEN IN SOME U.K. ZINES.. FINAL CURTAIN 7, CONTINTIOUS OBJECTOR 1, EXPOSURE2, PUNK LIVES 11.
7. SO FAR WE HAVE NOT PLAYED A GIG . WE NEARLY PLAYED WITH DISORDER, AND COULD HAVE PLAYED WITH SUBHUMANS.
8. THE FUTURE? WHAT FUTURE?
9. FINAL WORDS.. YEAH .. FUCK OFF [redacted] AND PUNK LIVES!

Riot City からのオファーについて言及した GENOCIDE ASSOCIATION のインタヴュー

れにコストもかかってしまう。例えば、良い一例としてリバプールのバンド、MAYHEMを挙げてみよう。彼らのギグを2、3回見たんだけど、僕は彼らのやっていることが大好きだった。だから僕はこう声をかけた。「なぁ、君たちが自身の1st EPに収録したい曲、4曲を選んでくれよ」ってね。彼らは自分たちの好みの4曲を選ぶ。僕は、「いいね、最高だ。スタジオに行ってこの4曲を録音しよう」と言うのさ。彼らはそうした。Riot Cityからリリースした2作品ともにね」

■Riot Cityをやっていたときに、未発売となった音源はどれくらいあったのかな?例えば、UNDERDOGSにはリリースされなかった2つのセッションがあったよね。あとはCHAOS UKの"Police Protection"という曲や、EXPELLEDの12インチも当時リリースされることがなかった。

「多分、それで合っているね。宙に浮いたままのものがいくつかあったけど、定かではないな。MAYHEMみたいな明らかなバンドもいるけどさ。彼らは自分たちでもっと録音しているはずだよ。けど、全ての未発表音源は恐らく、今では発表されているだろうね」

■Riot Cityの新たな発掘音源が出てきて、リリースされる可能性はないのかな?

「そうだね、僕はバンドから、どうすればいいのか分からない、大量のデモを受け取っていた。それら全てのデモを、一枚のCDにする価値はあるのかもしれないと思うことも、たまにあるけどね。でも、本当に分からないな。僕が意識的に決定を下すようなことでもないだろうしね。僕が知る限りでは出し惜しみしている音源なんてもう一切ないよ」

■ONSLAUGHTのデモをレコードで出そう。



「うん、そうだね、まさにそいつは良いアイデアだ、ハハハ。eBayでカセットを売ることもできるじゃないか、ハハハ」

■バンドと"サイン"するとき、君は契約書を使った?それとも口約束しただけ?バンドは自身の楽曲とパブリッシングに関して、権利を保持できたの?

「VICE SQUADとだけは契約書を使ったよ、大きな取り引きだったからね。それに彼らにはマネージメント・チームがいて契約書を要求していたしさ。全ての僕のパブリッシングに関しては契約書じゃなくて、指定された書式用紙を使っていたよ。楽曲はHeartbeat Publishing Companyに譲渡されるけど、バンドは全ての権利を所有していたんだ」

■Anagram、Captain Oi!、Step 1 Musicといったレーベルが再発したとき、バンドは作品に対するロイヤリティを受け取っていたの?

「うん、彼らはちゃんとやっていたよ。基本的に、Riot Cityのためにレコーディングされたものは、僕が所有している。だから、そのヴァージョンの楽曲に関しては、僕のものであったり、Captain Oi!のものであったり、他の誰かのものだったり。けど、バンドがその楽曲を再びレコーディングすることはできるし、それについて僕は口を挟むことはない。そういう仕組みさ」

■今ではCherry Redが全てを所有しているのかな?

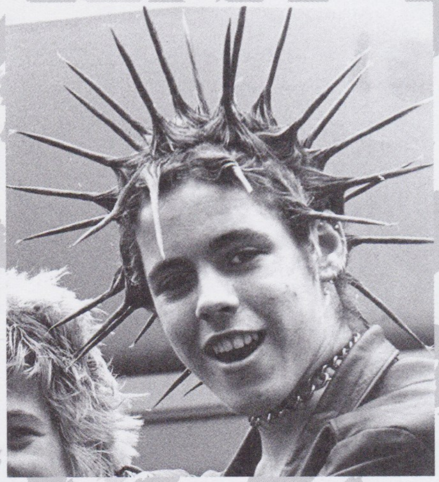
「Captain Oi!がRiot City Recordsから権利を買い取ったんだ」

■彼らはいつ買い取ったの?

「確か、5年前だったかな。多分ね(※本インタヴューは2008年に行なわれた)」

■Gary BushellがRiot Cityのことを"パンクのゴミ箱"と表現したとき、君はどう反応した?売り上げに対する影響はあった?

「ハハハ、人は好き勝手に言うものさ。彼は一人のジャーナリストでしかない。たくさんの人たちが彼の記事を読むけど、みんな行間を読めるからね。彼はパンクでも、BLITZみたいなタイプの方にずっと夢中だったし、それは良いと思うよ、問題ないね。それに、彼が僕のことや僕がリリースした作品を嫌っていようとも、



問題ないしさ。けど、いくつかは好んでいたよ。EMERGENCYやEJECTEDとか、その手の作品は好きだったはずさ」

■あなたのリリースした『Hell Comes To Your House』LP以外にも、極めて少なかったけれど、CHANNEL 3のEPやDEAD KENNEDYSといったアメリカのバンドの音源が、イギリスのレーベルからリリースされていた。これはどういった理由からだと思う?それと、どのようにして君は『Hell Comes To Your House?』をリリースするに至ったのかな?

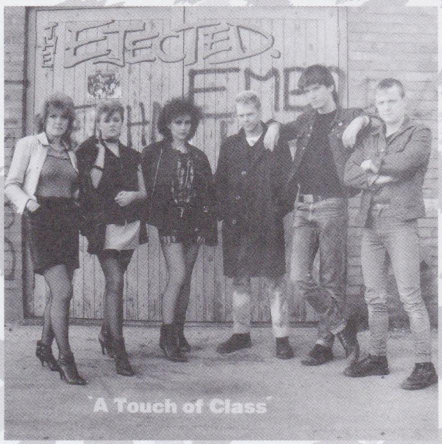
「このリリースについて話し合っていたとき、今後もっと何かをする、その先駆けとして依頼されたんだ。僕はこのアルバムを聴いていたし、何曲かはすごく良いなと思っていた。僕は多分、市場がどんなものかを把握するための踏み石になると思ったんだ。ヨーロッパで容易くできることなのかも、見極められると考えていたのさ。正直に言って、全く容易じゃなかったね。もし僕がそっちの方面でもっとやろうとするならば、ものすごく働かなければならなかった。でも、それには誰か他の人にも来てもらって、手を貸してもらわなければならなかったんだ。ロンドンに引っ越さなければならなかっただろうしね。僕はそうはしたくなかったんだよ。それで止めておくことにしたのさ」

■No Future RecordsのChris BerryやRichard Jones、ClayのMike Stone、あとはPaxやRot、Secret、その他のレーベルをやっていた人たちと繋がりはあったの?

「うん、Mike Stoneは知っていたよ。君も知っての通り、ABRASIVE WHEELSはClayに移籍したからね。遊んだりして、一緒に多くの時間を過ごしたよ。彼はできる限り友好的であろうとしていたし、僕も全く満足していたね。だからお互いを知っていたのさ。Chris BerryとRichard Jonesのことも知っていた。彼ら

は2人とも、地理的にブリストルのちょうど北に位置するマルヴァーンの出身でね、僕たちはすごく親しかったよ。それに彼らが企画したギグにも行っていたしね。どれも良かったな。No FutureとRiot Cityの間には、心地良い競争関係みたいなものがあったと思うんだ。約2年間、僕たちはインディペンデント・チャートのトップを独占していたからね。ほとんどのリリースにおいても、彼らは僕らを打ち負かしていたんじゃないかな。彼らにはBLITZという売れまくっていたバンドもいたしね」

■当時を振り返ってみて、君が手掛けたお気に入りのリリースと、お気に入りのバンドというのは何だったのかな?



「お気に入りのバンドと言うと、EJECTEDと一緒に仕事をするのは好きだったな。彼らとはたくさん楽しんだよ。だけど、CHAOS UKみたいな連中と一緒にやるのも好きだった。あいつらはマジでイカレていたからね。そんな連中とつるんでいるのは愉快だったよ。前述したように、僕は音楽のファンだった。僕は音源をリリースするのが大好きだったし、当時を振り返れば、その全てがとても愛おしい。前にも言ったけど、僕のお気に入りのリリースの一つはULTRA VIOLENTだったね。真に強力なシングルだと思っていたよ。NO CHOICEも好きなバンドの一つだった。それに、VICE SQUADも好きだったと明言できるよ。VICE SQUADは僕の子供たちみたいなものだった。僕は彼らと共に成長していったし、彼らもまた、僕と共に成長していった。彼らが音源をリリースしていく姿を見ているのも良かったね。だから、そう、僕は万事を楽しんでいたんだよ。ギグも企画したし、たくさんのバンドのギグに足を運んだし、マーチャンダイズも作った。いくつかのギグは信じられないほどにクレイジーだった。そういったことに関われて、本当に良かったよ。素晴らしい時間を過ごせたのさ」

■君にレーベルを断念させたものは何だったのかな?

「売り上げが落ちていったのと、それによって、格好良い音楽からのオファーを受ける機会が少なくなってね。まだどうにか勝ち越している間に辞めておくべきだと考えたのさ、ハハハ」

■合計で、君は154,413枚の7インチ・シングルと、28,203枚の12インチEP、そして50,220枚のLPを販売したね。これはとんでもない、驚異的な数字だと言えるんじゃないかな?

「うーん、もし君がNo Futureで働いていたとしたら、それは驚異的ってほどじゃなかったと思うよ。彼らはもっと売り上げがあっただろうからね。だけど、一人の男がやっているレコード・レーベルとしてはビックリするほどの売り上げだった。当時のことを振り返ってみると、かなり印象深いね。現在販売されているものと比べると、より印象深いよ。つまり、最近は音楽を買う手段も全く変わってきてしまったってことさ。でも、一つのメディアを通して大量に販売できるようになったから、それはすごいと思うよ。本当に、たまらなく面白いことだね」

■Riot Cityを一度終えてからも、CORやManic Earsといったブリストルのハードコア・シーンを追いかけ続けていたのかな?

「うん、彼らのことは知っていたよ。彼らは自分たちでやっていたし、僕はそれほど関わらなくなっていたからね。僕はこう思ったんだ。"僕はなすべきことをやった。今は、彼らが主導権を握るときだし、彼らができる範囲でやればいい。彼ら全員に幸運がありますように"ってね」

■君はまだ、当時の人たちの誰かと連絡を取ったりしている?

「あぁ、多くの人たちと連絡を取っているよ。みんな僕たちがリリースした作品を目にすると、連絡をしてくれるんだ。"ヘイ、君はこういったものをリリースしていたのか、素晴らしいね。またレーベルをやってくれよ"ってね。そういった人たちはみんな、今でも僕の作品が販売されていることを本当に喜んでくれている。ほら、考えてみようよ、僕らが当時作った作品を、30年経ってもみんなが欲しがってくれるなんて誰も想像だにしなかったよね。おかしなことさ。こういったこと、レコードを作ったりっていうのは、いいかい?そいつはとても即時的なことだ。レコードを出しても、それは6〜7週間ではけていき、次のリリースへと取り掛かる。一体誰が、"俺が出したこのレコードを、30年後の人たちもまた聴きたくなるだろう"なんて考えるだろうね。そんな風には考えないよ。だから、驚くべきことが起こっているのさ。僕が初めてのレコードを出してから30年も経つのに、僕が当時やっていたことについての話しを聞きたいなんて、アメリカから電話がかかってくるなんて夢にも思わなかったしね。君に話したように、僕は嬉しいんだ。君と話せて光栄だったし、嬉しかったね」

[Post interview material]

■MAYHEMについて少し話してもらうことはできる?彼らとの体験談とかさ。

「彼らは素晴らしい連中だったよ。何回かギグもやったけど、それもとても良かったし、音楽も良かった。彼らにはもっと活動してもらいたいと常に思っていた。彼らは強力なバンド



「Punk Lives」No.5(1982)に掲載されたCHAOS UKの写真

僕らが当時作った作品を、30年経ってもみんなが欲しがってくれるなんて誰も想像だにしなかったよね

だったからね。彼らを見るためにあちこちへよく行ったものさ。2nd EPをリリースした直後に彼らは解散してしまったんだ」

[Simon talking again]

「インタヴューの前に君が話していたCHAOS UKに話しを戻そうか。あの頃の写真でお気に入りを挙げるとするならば、僕が床屋の外でCHAOS UKを撮った写真になるかな」

■え、あれは君が撮ったのか。

「僕が撮ったんだよ。今でもお気に入りの写真だね。ちょうど全てを収めているし、彼らも格好良く映っているよね。『Riotous Assembly』で使った写真も同様に僕が撮影したんだよ。土曜日の朝、ブリストルの中心部にブリストル・パンクスを全員集めてね。この大規模な写真撮影は、Virgin Recordsの前で行なったんだ。パブやクラブでもやったよ。"さぁ、行こう、行こう"って、僕も行ってみたら500～1000人ものパンクスがやって来てて、警察やら何やらもいたな。あれはすごく愉快な日だったよ、ハハハ。記憶に残る出来事だった、ほんのひと時だったけど、楽しい時代だったよ」

■CHAOTIC DISCHORDの写真を見ると、彼らは"I Hate CHAOS UK"というシャツを着ているし、CHAOS UKに対する歌詞もあるよね。これはどういったワケがあるんだい?

「CHAOS UKとVICE SQUADの間には、ちょっとした敵対心がずっとあったんだ。だって、分かるだろ、気づいているだろうけど、VICE SQUADは全然ハードコアじゃなかった。彼らにはハードコアの要素は少しもなかったんだ。彼らの好みはパンク・ロックだったし、言ってみるなら、彼らはDISORDERよりも、BUZZCOCKS寄りだったんだ。それで少しばかりの対抗心があったんだよ。お互いにムカつくって言っていたしね。そんなことも、僕にとっては面白かった。楽しんでいたな」

■でも、議論になったよね。

「うん、CHAOTIC DISCHORDの12インチでCaptain Sensibleが気に入っちゃって歌い出したよね、"I fucking hate Chaos UK. Who the fuck are Chaos UK any way?"ってさ、ハハハ」

■CHAOTIC DISCHORDの『Fuck Off You Cunt, What A Load Of Bollocks』ではBekiが歌っているけど、君は知っていた?

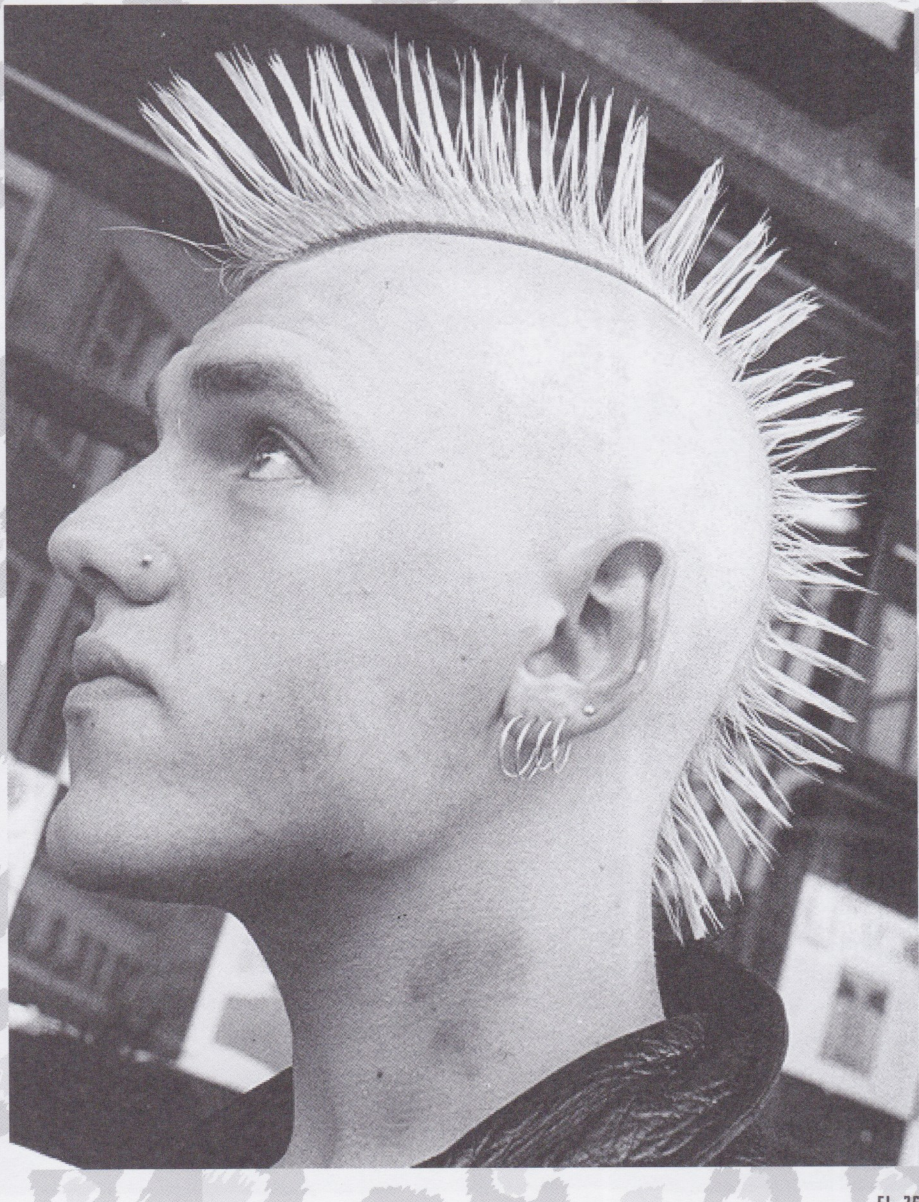
「CHAOTIC DISCHORDというのは、基本的にVICE SQUADのロード・クルーだったんだよ。そして、VICE SQUADのロード・クルーが分裂したんだ、ハハハ。何が起こったのかと言えば、Igor(※ベースのAmpex)がロンドンに引っ越した。メインの主導者だったBambi(※ヴォーカルのRansid)はブリストルに残った。それで、Igorは異なるメンバーでアルバムをレコーディングして、それをCHAOTIC DISCHORDと呼んだのさ」

■分かっているよ。それで、CHAOTIC DISCHORD風な感じだったんだよね。

「CHAOTIC DISCHORDっぽいだけであって、うん、本物のCHAOTIC DISCHORDではなかったね」

■他にリリースされなかったCHAOTIC DISCHORDの音源はないの?

「彼らは多分、僕が把握していないところでたくさん録音していたから、あるのかもしれない。分からないけどさ。何とも言えないけど、あり得るってこと。結論はまだ出さないでおこう」



KAFKA

私のEL ZINE勝手インタヴュー・シリーズ、今回は東京のKAFKAにお相手をお願いしました。今年頭にサンフランシスコで偶然行ったライヴで、ISOTOPEやODIOといった、今のオークランドの「旬」のバンドを見て、そのあたりの人たちがやってるManic Relapseという、とにかくパンクスが大集合すると噂のパンク・フェスティヴァルの話を聞いて、以降ちょっと気になってて…。そしてそのフェスに今年はKAFKAが出たというので、これはぜひ話を聞いてみよう、というわけで今回のインタヴューが実現！インタヴューは、そのフェスを含む今年春のアメリカ・ツアーの話を中心に、最近厳しくなったアメリカ入国のこと(そういやこのインタヴューの数日後にドナルド・トランプが大統領になってしまったが、さらに厳しくなりそうな…)から、現行のバンドのこと、曲作りのことまでいろいろ話してもらいました。

インタヴュー、構成:鈴木智士(焔と煙霧:http://tower.void-server.net/) [11月5日 渋谷某居酒屋にて]

■ではまずメンバーの紹介から。ドラムは今いない？

モ「ヴォーカルがモトカズ、ギターはヨシハルで、ベースがマユズミです。ドラムは現在募集中で、ヘルプで今はLIFEのケンタが叩いてくれてて、昔はBAND OF ACCUSEのシン君やUNARMのネンジさんがやってくれてました。この間のアメリカ・ツアーではODIOのベースのエミリオが叩いてくれました」



■じゃあバンド名について。KAFKAと言えば、もちろんフランツ・カフカだけど、出自や境遇も含めて、カフカ自身の「よりどころのなさ」とか、一連の作品における「自分は誰だ」みたいな主題は、ある意味ハードコア・パンクと通じるものがあると思うけど、なぜこの名前に？

モ「「KAFKA」は、最初当て字にしてたのが、「可・不可」という字で、できるかできないか、Positive or Negativeの二面性を表現した感じがかっこいいなと思って。自分がMORPHEMEってバンドをやってたときも、物事の表裏一体みたいなのをテーマにして歌詞を書いてて。物事って裏表が常にあって、どっちに転ぶかわからないし、立場や見方によって変わるってのをいつも感じてて、次にバンドをやるならそれを表現した名前がいいなと。もちろんフランツ・カフカが好きなのと、音の響きがいいってところもあるんですけど」

■なるほど。フランツ・カフカの小説で好きなのは？

モ「当然『変身』ですね」

マ「そうですね」

モ「他の作品はそこまでたくさん読んでないけど、『変身』は衝撃でした。普通の精神ならこれ書けないだろうなって。カフカ自身も表裏があって、その二面性が、自分が歌詞にしていたテーマとつながったというか」

■カフカと言えば、ノルウェーにKAFKA PROCESSがいたけど。

モ・マ「大好き！」

マ「元々僕もモトカズもノルウェーとか北欧のハードコアが好きで、そういうバンドをやりたいなあと思ってて」

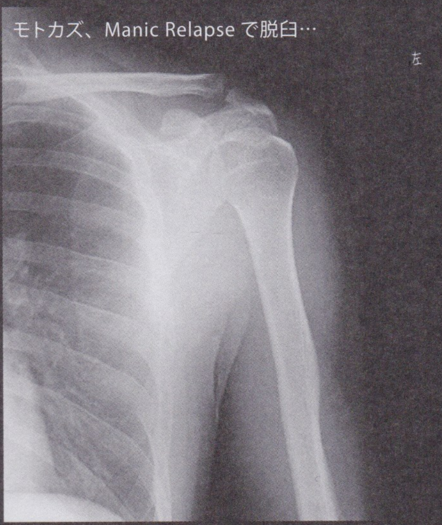
ヨ「元々はこの2人がバンドをやろうとしてて、ギターを探してたときに、俺も新しくバンドをやろうとしてて、そこに入ったんだよね」

モ「元々はATFのギターだったトッシが少しだけやってて、ライヴ2回くらいで抜けて、その後にヨシハルが入って」
ヨ「KAFKAというバンド名も、曲もあったところに入った。で合流して2〜3ヶ月で、4曲入りのデモをレコーディングした」
■じゃあ次は、今年の4月にアメリカ西海岸ツアーをしてたけど、これはどうやって実現した？
モ「去年のManic Relapse FestにMORPHEMEで呼ばれて、その主催者の1人が、KORROSIVE、1984、ODIOをやってるクリス(※EL ZINE vol.20にインタヴューあり)で、その時に、次はKAFKAで呼ぶから、みたいな話をしてくれて。クリスは、僕がアメリカでMORPHEMEやってたときにライヴに来てて知り合ったけど、その時彼はまだ14歳とかだったかな。クリス最高！愛してる(笑)」
■Manic Relapseは客が1,000人とか来ると聞いたけど、どんな感じだった？
モ「オークランド・メトロっていうすごい大きいハコを含め、色んなところで3日間に渡って開催されて、アメリカ中から人が集まって来てた。黒い格好した人だけじゃなくて、ストリート・パンクとか、グラインダー、パワーヴァイオレンスの人たちとかもいて」
ヨ「でもいわゆる「黒い人たち」が多かったよね。派手なパンクが見渡す限りゴロゴロいて(笑)。こんなにいるのかよって」
モ「やっぱりアメリカっぽいなと思ったのは、ジャンルレスな感じ。最近黒いのが流行ってるってのもあってその層はたくさんいたけど、その他にもいろんな人がいた」
■実務的な話だけど、最近アメリカの入国が厳しくて、入国できずにツアーをキャンセルしたバンドもいるけど、楽器は持って行った？入国の時とかは？
マ「楽器はエフェクターだけ持って行って、ヨシハルはエフェクターを先に送ったんだよね」
ヨ「当初ギター含め機材一式送る気満々だったけど、クリスから、いつも俺が使ってるレスポールもSGもあるからギター貸すよ、送料高いし、って連絡があって、あと普段使用してるエフェクターも向こうにあるのは貸してもらって、向こうにないエフェクターだけ事前に送って」
■服装は？最近は入国対策に、フェイスブックを一時退会したり、普通の格好したりするんでしょ？
ヨ「俺は思いっきり普通の格好して。バリバリの観光客みたいな(笑)。荷物もパンクっぽいのは事前に送ったし、入国審査は3、4分で、拍子抜けするほどすんなり終わった」
モ「僕とマユズミはいつも通りの格好だったよね。運もあるんだろうけど」
ヨ「アメリカは入国厳しいってのを聞いてたから、行く前はフェイスブックとかにはフライヤーとか一切上げなかった」
■ツアーはKORROSIVEとCRUDE SSとだったみたいだけど、何カ所回った？
モ「LA、オークランド、サンフランシスコ、ポートランドの4カ所で、ライヴは5回」
ヨ「あとシークレット・ショーで、ボストンのSADISTとやったよね」
モ「そう、その時はWorld Rage Centerっていう、オークランドの民家の地下で深夜2時くらいにやって。Manic Relapseの昼間の時間帯は、そこの裏の庭でライヴもやってたり」
ヨ「すごい狭い地下に100人以上入ってて、外で焚き火とかスケボーとかやってて」
■ポートランドはどうだった？
モ「今は下火なのかなと。若いバンドも少し前ほどはいないっぽいですね。一時期はポートランドにアメリカ中のパンクスが行くのが流行りだったけど、今はオークランド、フィラデルフィア、ニューヨークに行くみたいで」
ヨ「今のポートランドのバンドだと、PMS 84とかFRENZY、FRANKY、DECOMPとかがいるよね。あと共演はなかったけど、バーで会ったSUSS LAW。見たかったな！」

CRUDE SS, KORROSIVE, KAFKA and friends. Tour final at Blackwater Bar, Portland



モトカズ、Manic Relapseで脱臼…



モ「DEATHCHARGEはかっこよかったよね。ヴォーカルのアダムは河村隆一みたいで(笑)」
ヨ「Blackwaterもいいところだった」
■今回KAFKAでアメリカ・ツアーして、モト君はアメリカに住んでMORPHEMEもやってるからよくわかるかもしれないけど、たとえば日本とアメリカのパンクスを比べた場合、何が特に「違う」と思う？個人的には、アメリカのパンクスは、チャランポランそうな奴でも教養があるというか、他の文化や政治の事とかも話せる人が多いように思うけど。
ヨ「クリスと2人で車で出かけたときに、車内でヒップホップをガンガン流してて、色々聴くんだなーと思った」
モ「あれはややジョークじゃない(笑)？」
マ「若いのにみんなしっかりしてるよね」
モ「それはめっちゃ感じた」
マ「KORROSIVEはみんな24、25歳くらいなのに、あれだけの規模の企画をやって、海外のいろんな地域からたくさんバンドを呼んで、でもちゃんと回してたから凄いなと」
ヨ「今回のManic Relapseは、昼間から真夜中まで会場もあちこち複数の会場で行われて、それをKORROSIVE中心に企画側のみんなが、とてもよくまとまって運営してたの見て、凄いなって思った。ツアー中も頼もしいなって感じてた」
モ「パナマのHEZというバンドを呼んでたり、アンテナが高い人間が多いですね」
■向こうはあまり年齢を気にしないから、若い人の方がやる気があって、献身的なのかもしれんね。
モ「彼らはパンクスに対する偏見的なイメージに対して、そうじゃないんだというところを表現したいというところもあるみたいで、それが何気無い振る舞いとかからでもすごく伝わってきた。オークランド・メトロなんかはいわゆる「しっかりした人」じゃないとやれない所みたいだけど、メトロに対して彼らがフロント



Manic Relapse Fest 2016

ツアー日程



に立って、機材の管理のこととか企画の意図の説明をちゃんとやっていた。パンクって好き放題やればいいみたいなところがあると思うけど、彼らの場合はこれまでの生活の中で、それだけじゃダメだというのがわかっていて、ちゃんとオーガナイズして、責任も伴ってやってるところは違うなと思った。自分たちの生活の中でサバイブしてきて得たものを、外の世界に体現しようとしてるというか。

Manic Relapse自体も、パワー・ポップのバンドを呼んだり、ヒップホップぽいのもいたりするんですよ。「Manic Relapseチーム」みたいなのがあって、若い人からベテランまで、バックグラウンドもさまざまな人でチームを組んでやってて。アメリカならではのオープンさを感じましたね」

ヨ「Manic Relapseは最高だったね！」

マ「THE NEWTOWN NEUROTICSとかかっこよかったよね」

モ「パンクのすそ野を広げようとしてるというか、閉鎖的じゃなくて、オープンにやってるというか。日本の場合は、人と人とのつながりで企画があったりして、それがいいところだと思うけど、逆を言うと、つながっていないと入りにくいこともあるかなと。もちろんそうじゃないライヴもたくさんありますけど。Manic Relapseの場合は、全然知り合いじゃないバンドでも、かっこいいと思ったら声をかける感じで、世界中どこの誰であろうがコンタクトを取れるバンドならとりあえず呼んでみる、というスタンスでとにかくオープンに感じましたね。

ただManic Relapseの最中に、SADISTってボストンのバンドが企画側ともめたりとかもあって。凶器出てきたりでドラマのような状態に(笑)。お互いのことを熟知してるわけじゃないから、そういうことも起きるみたい」

ヨ「SADISTはイケイケだった(笑)」

モ「SADISTのメンバーもいい奴らだし、彼らの考えや事情もあったんだろうけど。Manic Relapseは規模が大きいし、企画側は海外からのバンドのケアに始まり、ハコとの調整とか色々しないといけないし、やっぱりコントロールできなくなる部分が出てくるのは仕方がないかなと」

■他にトラブルは？

ヨ「それくらいだけど、あとは機材車が荒らされたりしたよね。SCUMRAIDが機材持ってかれて」

マ「ベースのドンウはパスポートも持ってかれたり」

ヨ「うちらのバンもその次の日に窓ガラス割られたけど、中は空だったから何も盗られなかった」

■やっぱりオークランドはそんな感じなんだ(笑)。

モ「This is Oakland(笑)」

ヨ「メトロのまわりの車はほとんど窓ガラス割られてたらしいね」

■じゃあ次。KAFKAのメンバーは海外の現行のバンドと積極的にコンタクトしてるみたいだけど、最近の動向とか、かっこいいバンドとかを教えてください。

モ「僕らがお世話になってるD-Takt & Råpunk Recordsのレーベル・オーナーJockeのバンドのPARANOID」

ヨ「アメリカでかっこいいなと思ったのは、フィラデルフィアのPOLLEN。イケイケでよかった。あとCINDERBLOCKやSSYNDROMにKORROSIVE！あげればたくさん」

モ「KORROSIVE、ODIOはかっこいいですね」

マ「僕はこの前のManic Relapseで見たTORSOがよかったです」

ヨ「最近レコードを買ったんだけど、マケドニアのDISEASE。あとギリシャのGO FILTH GOはめっちゃ好き。あとはASPECTS OF WARかなあ。INDIGNATIONも気になるなあ」

モ「ASPECTS OF WARはライヴがかっこいいし、人もいいですね。ピュアだし、周りを尊重するスタイルがいいですね。MORPHEMEで東海岸をツアーしたときなんか、ツアー・バンドが全力を出し切れる環境を全力で用意してくれたし」

■アメリカにツアーに行くと、たまにほったらかしにされるバンドもあると思うけど、彼らはそうじゃないと。

モ「そうですね。日本ツアーしたことがあるというのも大きいかもしれないけど。アメリカのバンドでも、ツアーを結構やってるバンドというのは、自分たちが経験してるから、自分たちが迎える時はケアはちゃんとしてくれる。思いつきでやってる感じじゃないというか。ODIOのジョンとかも、バンドがライヴやってないときでもすごいケアしてくれて、そういうのがいいなあと。ODIOはやってる音楽もいいけど、何より人柄がいいですね」

ヨ「ASPECTS OF WARつながりで言うと、そのメンバー3人がやってるAMBUSHは、もう解散したかもしれないけどかっこよかった」

■海外のバンドとやり取りしてるのは、元々知り合いなのか、コンタクトして音源買ってるのかどっち？

ヨ「SNS時代だからなのかもしれないけど、フェイスブックとかで面識無くても連絡が来ますね。あとはメンバーがデモ音源とかをフェイスブックやインスタグラムにアップしてて、そういうのをチェックして、自分からメッセージ送ってデモ・テープを買ったりもしてます。7インチは国内でも入手しやすいけど、バンドのセルフ・リリースなどのデモ・テープなんかはあまり手に入らないから。更に一緒にTシャツも買ったり。そういう現行のバンドのものが好きなんですよね！そんなやり取りを何年もしてたら知り合いになって、今回のツアーで現地で初めて会ったり、逆に向こうで知り合って後日やり取りしたりと様々です」

■インスタのダイレクト・メッセージで海外とやり取りする時代なのか…。

ヨ「だって気になるんだもん(笑)。日本に入ってこないから」

■やっぱり現行のバンドが気になる？

ヨ「そう。やっぱり気になる」
モ「ヨシハルはアンテナ高いですよ(笑)」
ヨ「あと最近だと、カナダのFRAGMENTも気になる。メンバーは前にステンチコアのCONTAGIUMをやってて。他にCONCRETE ASYLUMと、あともう一つ…」
モ「LIFE CHAIN」
ヨ「そうだ。中心人物にベン君ってのがいるんだけど。とにかく国内に入らないものは、SNSパワーなんだろうけど、直接メンバーから買うね」
モ「あと他におすすめは、フィンランドのKOHTI TUHOA。D-Taktのコンピで一緒になったバンドだけど、かっこいい。他にSOKEA PISTEっていう、これもフィンランドのバンドだけどめっちゃくちゃかっこいいです。Punk and Destroyに入荷してましたね」
ヨ「マユズミは？」
マ「まったく別だけど、ロシアのFATUMは、今になってさらにあのスラッシュっぽい感じがいいですね。SACRILEGE止まりのバンドはいるけど、あそこまで突き抜けてスラッシュ・メタルをやるのはすげえなあと」
■KAFKAのみんなはテイストがそれぞれ微妙にずれてるんだ。
モ「そうですね。曲作るときとかもバラバラで、みんなで言い合って、形にするって感じですね」
ヨ「「こういうのじゃなきゃだめ」ってのではなくて。みんなでミックスして。元々2人でフィンコアや北欧ハードコアの影響を受けた感じでやってたけど、俺が入って、俺はそこを意識してなかったし、メンバーもそこに固執してなくて、好きな要素をぶち込んでく感じで。でも2人が好きなものがあるから、そこにうまく交わればいいかなと」
モ「MORPHEMEのときもそんな感じで、元々何かがあるわけじゃなくて、バンドはそんな感じでやるのがいいのかなと思う」
■D-Beatのバンドとかは、型にはまりやすいというか、割といろんな要素を自由に入れる余地はありそうなのに、そこを自由にやってるバンドってあんまりいないのかなと個人的には思うこともあったり…。
モ「そうですね。やろうと思ってできることじゃなくて、その人がいるからこそやれることをやりたいですね」
ヨ「そうだね。俺は、昔はこういうのをやろうってのがガチガチだったけど、今はメンバー個々の好きな要素をぶちこんで、それがかっこよければいいじゃん、みたいに思うようになった」
モ「日本のバンドは道を外れないようにやろうとしてるバンドが多くて、振れ幅が小さいように思うんですよ。でもそこを取っ払うとものすごい可能性があるし、それがバンドをやる醍醐味だと思う。音源聴くときでも、そういう取り組みをしてるバンドを意識的に聴いてます。ひたすら「王道で行こう」と思ってやってるバンドは、聴いててもあまり響かないですよね」
ヨ「入る前に感じたことがあって、俺が入る前はもっとわかりやすくフィンコアや北欧ハードコアだったと思うけど、音作りで言えば、クラシックなのとは真逆に、すげえノイジーな音をぶち込みたいと思ったんだよね。今のバンドだし」
モ「デモ音源からは変わったよね。全然知らない人からしたら、普通のフィンコアと言われるかもしれないけど、自分たちからしたら相当に実験した」
マ「そうだよね。練習のときからああだこうだ言い合って」
モ「ヨシハルはそういうノイズをぶちこんでくるけど、そこは試行錯誤した。音源一発出すだけなら北欧路線のままでこだわるのもありだったかもしれないけど、長くやりたいバンドだと思ったし、みんなでやる活動を楽しみたいなと。みんなには「フィンコアやりたいんだ」と思われてるのかもしれないけど(笑)」
マ「影響は受けてるからね」
■じゃあ最後に何か言いたい事は？
モ「もっと若い人間が出てこないかって思うよね」
■それはみんな思ってるよね。
モ「若い時にしかできないことってあるじゃないですか。年取ってくると、どうしてもいろんなものを吸収してそれが出てくるから。若いころに限られた時間で吸い取って出してるものとは違うと思うし、それはかなり貴重なものだと思うんですよ。それが今2016年に日本から出てきたら、すごいいいなと思う。僕らに出せない音を、次の世代がバンとやると思うけど、それが楽しみですね」
■出てくるのかなあ。
モ「違う解釈でやるんじゃないですかね。悲観的には考えてなくて、絶対に出てくると思う」
マ「3年後に出てくると僕は思ってますよ。それはATFで確信したことだけど、ブルチン(KALTBRUCHING ACIDEATH)みたいなのが出てきたし、絶対に出てくる」
モ「僕自身やめる気もないし、死に絶えることもないと思いますよ」
■なるほど。ハードコア・パンク自体が、若い人への求心力がなくなってるというか、魅力がないというか。だからそれをどう打破してくかってのがね。
ヨ「最後に一言いい？GIFTGASATTACKのPerの動向が気になる(笑)」
■それで終わりでいいの(笑)？
一同「(笑)」
モ「じゃあ、若い人にアピールしていくためにも、ジンを作ろう！今年度内にファンジン出す！」


CRUDE SS



KORROSIVE

RECORDSHOPS RECOMMENDED RECORDS 2016

レコード屋さんのオススメ音盤



ハイ、光陰矢の如し、今年もボチボチ終わりです! そんなわけで、2013年にもやりました「Recordshops Recommended Records」(略して"Re Re Re")、3年ぶりにやってみましょう!ショップの皆さまには、11月20日締め切りで執筆してもらいましたので12月のリリース作品は入っていないのですが、「このレコードは確かに格好良かったね!」とか、「これはチェックしていなかった!」、「普段こういうのは聴かないけどトライしてみようかな!」、もしくは、「そのレコードは買ったけど全然良くなかったじゃねぇか!!!!!」(笑)なんて、2016年を振り返りつつ楽しんで頂ければ幸いです。

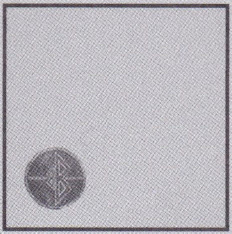
Nat Records



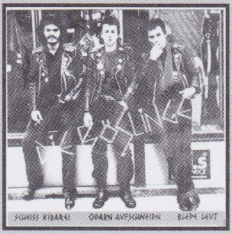
①XL-FITS/THE HAKATA SLASHER
(EPISODE SOUNDS)7"



②SICK THOUGHTS/18 AND FREE
(TOTAL PUNK)7"



③BAD BREEDING/BAD BREEDING
(BAD BREEDING)LP



④DIE BOSLINGE/SCHEISS KIBAREI
(BACHELOR ARCHIVES)7"



⑤UPSETS/BACK TO AFGHANISTAN
(LCMR)7"

5作品は順不同ながらBAD BREEDINGはジャンルを越えた魅力が素晴らしかったですね。
毎年当店ブログ内でベストを選ぶのに断腸の思いで削ることになるように、こちらのEL ZINEでのベスト5も選外に漏れた素晴らしい作品も多数ありましたが、こちらがワタクシのベスト5。
今年も良い新作リリースも多く(①～③)、ここでも選んだあり得ない様な公式再発(④,⑤)もありで、毎年毎年楽しめるリリースは減らない事が嬉しいの一言です。
自分が選んだベスト5にも既に廃盤になってしまっているものも含まれておりますし、人気盤や注目盤にお客様からの注文が集中してしまいがちなのもレコード屋として理解できますが、そういったレコードが売り切れていても、どのレコード屋も根気良く探してみれば新旧関係無く自分好みの作品が多数見つかると思います。
店頭にお越し頂いて店員に希望を伝えてみるのも一考かと思いますので、お気軽にご来店ください! (Nat Records/板垣)

Record Shop ANSWER



①YHD/ISBILIYA BIZARRE PUNK
(HILLSIDE STRANGLER)7"



②OKUS/SCOURGE
(DISTRO-Y/CHAINBREAKER)LP



③ACCIDENTE/PULSO
(VOX POPULI)CD



④SP CAOS/DEMO 1984
(SPICOLI/NADA NADA DISCOS)7"



⑤ASTAROTH/ST
(EPIDEMIA)7"

需要と供給のバランスばかりが原因では無いが年々、取り扱うタイトルを絞らざるを得ない中、パッと印象に残った海外バンドを選んでみた。現行衝動パンク・ロックFROMレバノン、YHD。天安門REC.からリリースされてそうな日本の80'S、スターリン、初期GAUZEなどを思わせる1枚。ぜひ次作を聴いてみたい。EX-THE DAGDA、BLEEDING RECTUMなどのメンバーらからなるアイリッシュ・メタル・クラストOKUSのセカンド・アルバムは練った構成、楽曲、独自の世界観が渦を巻くベテランらしい貫禄ある1枚。店的にも個人的にも全くノーマーク未聴だったスペイン/マドリードの女性ヴォーカル・メロディックACCIDENTEはサンプルを聴いた瞬間、みずみずしい澄んだ清涼感の中にある芯のある熱を感じCIGARETTEMANを思い出させられました。近年、良質リリースを続けるブラジルNADA NADA DISCOSからは、『これぞ、RAW HARDCORE!!』と叫びたくなるようなSP CAOSのシングル。アートワーク、インサート、細部まで凝った作り、完璧です。コロンビアTHRASH METAL!ASTAROTHの1987年シングル再発は土埃っぽい、モコッとしたサウンドに邪悪なヴォーカルが絡みながらバタバタと疾走しハードコア・パンク・ファンにも充分にアピールできる1枚。国内バンドで1年を総括すると、パッと浮かぶところではTYPHUSのCD、DEATH SIDE関連の再発リリースはかなり動きが良かった。他にはPOISON ARTS/CD、BANDIT/LP、G-GAS/LP、NAPALM/LPなども。現行だとSEKIEN、VANISHING、宮武BONES、SECOND TO NONE、THE KNOCKERSに最中ざ青春MYロード、INMOHあたりか。『聴く』から『参加する』時代?え～…、まぁ…。2017年、『こっちの現場』へも引き続きご参加、宜しくお願い致します。(Record Shop ANSWER/ナカムラ)

DISK SHOP MISERY



BUTCHER以下順不同:
①BUTCHER/HOLDING BACK THE NIGHT
(BREAK THE RECORDS/BUTCHER)CD/LP



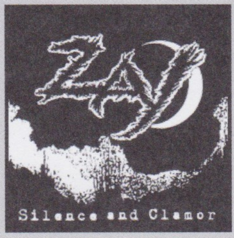
②チャッカーズ/日本解放最前線
(FADE-IN)CD/LP



③RAKTA/回顧と展望-DISCOGRAPHY
(MOUSE)CD



④BELGRADO/OBRAZ
(LA VIDA ES UN MUS)LP



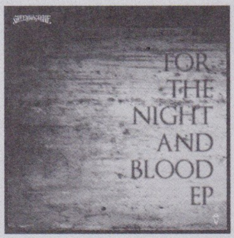
⑤ZAY/SILENCE AND CLAMOR
(SELF)CD-R

今年は外国バンドのリリースや来日にインパクトを受けた一年だったように思います。特にPOST PUNK 2バンド(RAKTA、BELGRADO)のクオリティは素晴らしく、もっとオーヴァーグラウンドで評価されないのか不思議に思ったりします。広島招聘したかったす(泣)。新しいジャンルではないというのが少し残念ですが、数万年という音楽の進化の中で考えるとリヴァイヴァルなんて数千回以上あったでしょうから、それも含めてプログレ(進化)ですね。とにもかくにもええバンドです。「こいつら何?!」ていう、かつてハードコアから感じてたその感覚がレスザン系あたりのオルタナ～ジャンク・ハードコア勢にあったりしますが、やはりハードコアな音が一番好きです。その中でも、BUTCHERは現時点で世界のハードコア現役の中でトップのクオリティだと思います!!十年前のTRAGEDYかそれ以上だと思います!!目新しいことを一つもやってないのにものすごく格好いいのが凄いす!!アメリカのハードコアの進化の一つに日本をブレンドさせ、最強の環境で、最高のクオリティでレコーディングされマスタリングされた今世紀最凶の音源!!ハードコアという言葉に触れたものであるならば誰しも琴線に触れる音です。暴虐の普遍性とでも言うのでしょうか?サウンド・クオリティが高いと書くと「あぁ、聴きやすいのね」と思われがちですが、ハードコアの暴虐性を余すことなく表現したらこうなったと言わんばかりのド迫力サウンドには、ただただ敬服です!RAWだとかプリミティヴと言われる現行バンドの音源の半分はボロいだけすからね(笑)。ジャパコア命の心も揺さぶられること間違いなしです!国内でいえばZAYのデモすね。重厚なメタル・クラストといったらステレオタイプみたいですが、ハードコアの持つ重みと暗さを十二分に表現した強烈サウンドはやはり格好いいです。ジャパコアの良さとメタルの良さ、そしてクラストの良さをちゃんとわかってる奴らが作る音は説得力ありますね。サウンド、アートワークとも、ど真ん中の好みです!!!ZAYやBUTCHERとは真逆に、全然ハードコア度のないチャッカーズのセンスと自由奔放さに憧れてたりします(笑)。ハードコアが保守になったらしまいです。だからこそ、80年代リヴァイヴァルがカルチャー的に蔓延する昨今。閉塞感のあった当時のシーンにいきなり登場したハードコア・パンクのような純粋なインパクトが来年あたり生まれそうな予感がする今を楽しんでいるのです。 (DISK SHOP MISERY/骸 aka 大小田伸二)

TIMEBOMB RECORDS



①柳家 睦とラットボーンズ/夜は男の万華鏡
(BIG RUMBLE PRODUCTIONS)CD



②GREENMACHiNE/FOR THE NIGHT AND BLOOD EP
(DIWPHALANX)CD



③HARLEY FLANAGAN/CRO-MAGS
(MVD AUDIO)LP/CD



④CUT BACK/GREEN ROOM
(RADICAL EAST)CD



⑤SPECTRE/THE LAST SHALL BE FIRST
(WORDSOUND)LP/CD

2016年のオススメ音源と11月に言われましたので、現時点でリリースされている音源(順位不同)でよく聴いたものを無理矢理チョイスしました。
5枚は相当難しかった…(ここまで何年か前のチャートと同じ)で、手前味噌で大変申し訳ございませんが、SECOND TO NONEのアルバムと、SABBATとのスプリット7"もオススメっちゃーオススメなんですが(汗)、ソレを抜いて良く聴いたとなると上記5枚となりました…。
前回のチャートから3年経過しましたが大幅な変化はナク、盛り上がってるのか下火なのかイマイチわからないアナログ・ブームや、リヴァイヴァル・ブーム、名盤再発諸々、身近なところダケでもイイ音源がゴロゴロところがっております。真面目に(?)音源を買って、聴いている方には非常にイイ時代なのかも??
これも前回にも書きましたが、聴き方にコダワリが無い方々にはネットでディグって何でも聴けるコノ状況、何を聴いていいのかわからないっていう贅沢な悩み(ネット試聴無限地獄状態?)もあるのかも?なにわともあれ混迷を極めて来ているこの状況、一筋の道しるべにでもなれれば良いとかではナク(笑)、僕を含めスタッフが良いと思った音源を新譜/中古共にセレクトしていきますので皆様今後とも宜しくお願い致します。 (TIMEBOMB RECORDS/小路)

PUNK AND DESTROY



①SIEVEHEAD/BURIED BENEATH
(STATIC SHOCK RECORDS)7"



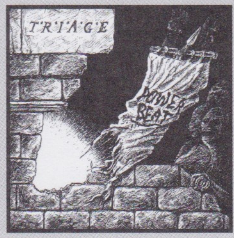
②SHOCKING桃色/桃色ダイナマイト!!
(OK!!! LET'S GO RECORDS)CD



③RAKTA/III
(NADA NADA DISCOS etc)12"



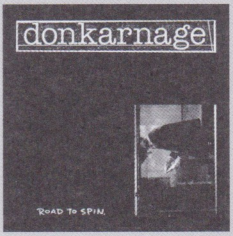
④DIÄT/POSITIVE ENERGY
(MOUSE)12"



⑤TRIAGE/POWER BEAT
(LARRY TONY PRODUZIONI)7"

①UKシェフィールドからの3人組。2017年初頭に新しいアルバムが出る予定なので、それ聴いてかっこよかったらコチラ含む過去作も買いましょう。大英帝国の力強いパンクと冷ややかなポストパンクのロマン。
②沖縄の女性3人組。リリースは2016年じゃないけど本格的に流通したのが今年とのことなので。等身大よりも背伸びして、何かを始めた時の気持ちと多分同じまんまでやっていけてると、勝手に想像させてくれるバンド・ミュージック。
③たとえばBELGRADOの3rd LPが、様々な音楽を丁寧に吸収して創り上げられたとするならば、このLPは山や川や雨や風や太陽や人々や建造物など、旅の中での出会いを吸収して創り上げられたような気がします。RAKTAというブラジルからの心地よい集合体は、ここ日本でも華開きました。
④こういう音源ピックアップのコーナーで、自分がリリースした作品を紹介する度量をこれからは身に付けていこうと思います。でもめっちゃかっこいいですよ。
⑤トロントの未来は明るい。
◆2013年にも推薦盤紹介コーナーに参加させてもらって、それから3年。ワクワクとエキサイティングなリリースが続く限り、取り巻く状況は変われど、個人的にはただ希望しかありません。
(PUNK AND DESTROY/SAZANAMI KAZUHIKO)

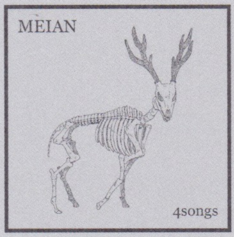
disk union



①DON KARNAGE/ROAD TO SPIN
(自主)CD



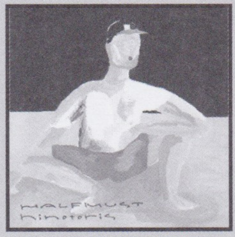
②LAST YOUTH CASUALLY/HANG OUT E.P
(自主)CD



③MEIAN/4SONGS
(自主)CD



④BACK TO THE FUTURES/NEGATIVE DANCE FLOOR GO TO HELL(自主)CD-R



⑤HALFMUST & HINOTORIS/SPLIT
(自主)CD

昨年末まで都内某ハコにてブッカーとして勤めてまして、今年初めから心機一転ユニオン営業部に入社、という事で今年は自分にとって人生のちょっとした転機となった大事な年となりました。裏方の立場ではありますが、レコード屋さんで働くというのは自分の小さな夢でもあったので凄くやり甲斐を感じてるのと同時に、時には「こんなにも大変だったとは！」といった思いでヒーコラ言いつつ働いております(笑)。自分は主に国内バンドの商品を担当してますので国内の自主制作リリースモノを５枚挙げさせて頂きました。こういった機会を与えてくれた山路さんに本当に感謝です。①札幌の新世代変態CHAOTIC HCバンドの2nd EP。BORN AGAINST、ASSFACTOR 4好きなら堪らないはず。入荷後物凄いペースで売れて既にユニオン在庫無くなってしまいました。②姫路の90's MELODIC PUNK直系４ピース・バンドの初正式音源。一発で馴染んでくるキャッチーさに思わずガッツポーズ！③盛岡産激情HCバンドの1st DEMO。dip legやyaphet kottoを思わせる空気感にヤラれました。ライヴ見たいっす。④東京下町ROCKIN' THRASH！まずバンド名からして最高ですが音もフロア揉みくちゃ必至のダンサブルHC。⑤横浜～東京で活動する日本語オルタナ・インディー・ロック・バンド同士の好split。清涼感もありつつ、そこはかとなく感じ取れるパンク・スピリッツに心をグッと掴まれます。

(disk union営業部PUNK部門/青砥)

RECORD SHOP DIGDIG



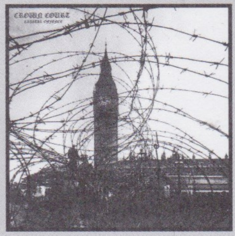
①SECOND TO NONE/BAB-ILU
(RADICAL EAST)CD



②V.A/TRASH FROM CHAOS #2
(男道)CD



③ARMS RACE/NEW WAVE OF BRITISH HARDCORE
(LA VIDA ES UN MUS)LP



④CROWN COURT/CAPITAL OFFENCE
(REBELLION)LP



⑤HARM DONE/ABUSE/ABUSED
(STRAIGHT & ALERT)LP/CD

2016年も素晴らしい作品が数多くリリースされました。探せば探しただけ出てくる良質な作品、バンド、レーベル、新作は勿論、それに加え再発モノと、もう完全に追い付けてない感じがありますが…。

今年、2016年はやはり大阪のSECOND TO NONEの1stフル・アルバムのリリース、RADICAL EASTからの久々のリリースというのも含めて本当に最高/最強の一枚。岡山の弱小店のウチでさえ過去最高となる異様な売上枚数でした。そして今年も注目だったNew Wave Of British HardCore。ARMS RACEとCROWN COURTがそれぞれ素晴らしいアルバムをリリース、来年もNWOBHC周辺の凄まじい勢いは続きそうです。

近年盛り上がりを見せるPOWER VIOLENCEでは、フランスのHARM DONEの1stアルバムがPOWER VIOLENCE好きのみならず、NYHC/BEATDOWN/NEW SCHOOL/METALCORE好きな方まで巻き込み大好評でした。そして高知の最高級レーベル"男道レコード"からリリースされた岡山からTILL EWING、MOLD、FCFS!の3バンドが参加したComp CDも外せません！

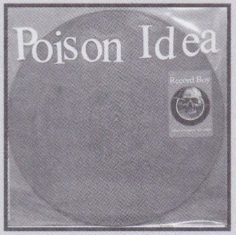
札幌のCUT BACKの1st CD、大阪のFIVE NO RISKのDemo、京都のBURNING SIGNのDemoも完全に振り切れた最高の内容でした。

来年も素晴らしい作品が数多くリリースされると思います。岡山からもアツいリリースがあると思いますので岡山も是非チェックしておいてください。

不安なことも多々ありますが、楽しくいきたいですね。

(RECORD SHOP DIGDIG/オノ)

RECORD BOY



①POISON IDEA/SAME EP
(AMERICAN LEATHER)12"



②HARLEY FLANAGAN/CRO-MAGS
(MVD AUDIO)LP/CD



③WARZONE/DON'T FORGET THE STRUGGLE,
DON'T FORGET THE STREETS(REVELATION)LP/CD



④AGGRESSION(CANADA)/THE FULL TREATMENT
(XTREEM MUSIC)CD



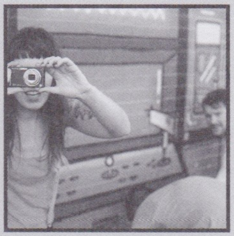
⑤PYOVELI/NOT A GOD, JUST AN EXECUTIONER
(BESTIAL BURST)LP

今年はあらゆる意味で自分が「終わってる」ことを実感した1年でした。「終わってる」っていう例えは、世の中では悲観的に受け取られるわけですが、本人からしてみれば、若かった頃よりも現状を満喫する術をようやくこの歳になって身につけたような感覚もあるわけで、上位のパンク3タイトルに関しては自分の今のその感覚とピッタリ合致する新作&再発でした。POISON　IDEAとHARLEYのソロは、彼らの全盛期を体験してきたキッズの期待を全く裏切らない素晴らしい内容の現行ハードコア・パンク・サウンドに、ただただ感激するばかりでした。WARZONEは20代ではさほど熱狂して聴いていたわけでなく、40代に突入してからいろいろ昔のレコードをほじくり返してる中で再燃してきてたところ、最高のタイミングで再発されました。カナダのAGGRESSIONは80年代のハードコア・スラッシュ・メタル・バンドで、正規再発が望まれてたカルト・クラシックです。スラッシュなハードコアとメタルへの探求はまだまだ尽きませんので、ベルボトムやニューウェイブなどは自分にとってはいつまでも大人への背伸びアイテムとして永遠に無縁な気がしますが、アンダーグラウンド・エクストリーム・ミュージックのイデオロギーをも崩壊させかねないスタンスのフィンランド最弱スラッシュ・メタルPYOVELIをオチのような形でランクインさせたのは、こんなバンドが若者の共感を集めたらいよいよ終わりだと思いつつも、なぜか妙に可能性みたいなものも感じさせるからです。(RECORD BOY/大倉了)

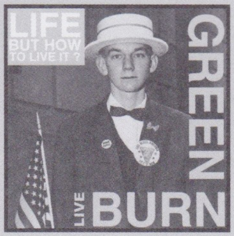
WATERSLIDE RECORDS



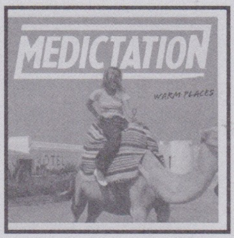
①BEACH SLANG/A LOUD BASH OF TEENAGE
FEELINGS(POLYVINYL)LP/CD/CT



②EARTH GIRLS/WANDERLUST
(GRAVE MISTAKE)LP



③LIFE…BUT HOW TO LIVE IT?/BURN
GREEN LIVE(BOSS TUNEAGE)2LP+CD



④MEDICTATION/WARM PLACES
(LITTLE ROCKET)LP



⑤UNFUN/WATERBOARDING
(DEBT OFFENSIVE)LP

ここ最近Late 80's〜Early 90'sに回帰しているサウンドを鳴らすバンドが増えてきていて、一つのサイクルの時期なのかなぁなんて思っています。同時に、リイシューもB級ものまでもリリースされていて、実は今って音楽どんどん掘り下げる絶好の機会なんじゃない?①WESTONのメンバーによる90年代回帰バースト・メロディック・ギター・バンド。2ndアルバム。REPLACEMENTS、HUSKER　DU影響下のサウンド。これは、大陸で生活していないと出せないダイナミックさ。②LIBYANS、DAYLIGHT　ROBBERY、BOILERMANのメンバーによるガール・ヴォーカル・パンク・バンドEARTH GIRLSの1stアルバム。このバンドも一体何年のバンドなの?って感じですよ。あの時代のアノラック彷彿させてくれます。③BOSS TUNEAGEのリイシュー・シリーズで当初から計画があったものの、恐らくリリースまでに15年くらいかかってると思います。メロディック、アナーコ・パンク両方の層の方から人気のノルウェー産のリイシューが三部作でリリースされた。ex-BARN AV REGNBUENのRogerの弾きまくるギターとKatjaのヴォーカルがとことん印象的です。完全無欠の悲哀のヨーロピアン・メロディック!④惜しくも亡くなってしまったHDQ〜LEATHERFACEのギタリストDickie　Hammond最後のバンドの録音作品。聴けば一発で分るDickieのギター・サウンドがここに。こんなにやれてたのにさ。お酒やめて欲しかったな。⑤バンクーバーのラフ・メロディック・パンク・バンド。CANCERSというインディー・バンドでも活動しているレニーのバンド。とにかくザラザラとした音作りで攻撃的なサウンド。シューゲイズ・ハードコア?ダークな中にも希望を感じさせるメロディーが最高。　(WATERSLIDE RECORDS/オニギリギリオ)

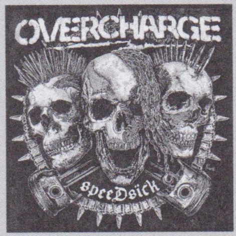
record KNOX



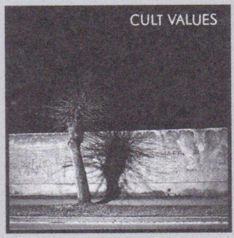
①SILENT ERA/ST
(DOOMTOWN RECORDS/SABOTAGE)7"



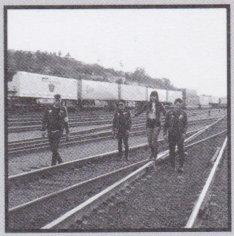
②G.L.O.S.S./TRANS DAY OF REVENGE
(SABOTAGE)7"



③OVERCHARGE/SPEEDSICK(INSANE SOCIETY/ANGRY VOICE/METAL AGE PRODUCTIONS)LP



④CULT VALUES/ST
(SABOTAGE/STATIC AGE)LP



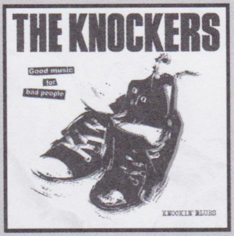
⑤GENERACION SUICIDA/SOMBRAS
(GOING UNDERGROUND)LP

お世話になります！！中途半端な田舎で弱小レコード・ショップをやってます、橋本と申します。
完全に個人的な話なのですが、なんと今年の6月で店が10周年を迎えまして。それもコレもみな、ごく少数のイカれたパンク/ハードコア好きの皆様のおかげです。ほんと、感謝しております。意地で続けた10年ですが、いまだに母親からは「早く辞めてちゃんと働きなさい」って言われます。もう手遅れですって、ね(笑)。
今回、ウチで「書籍売り上げNo1」のEL ZINE山路さんよりお話をいただきまして、折角ですので2016年の素敵なレコードを5点挙げさせていただきます。
5点を挙げるにあたって、とりあえず今年リリースされたであろうと記憶している物をあれこれピックアップしてみたのですが、これが見事に2016年作「じゃない」物ばかりでして。つまり極最近リリースされた物だと思っていた物が軽く2、3年経っていたりするのですね…。それを確認する度、時の流れの早さ(速さ)にイチイチおののいていたりしてたら、原稿に手をつけるのが結構ギリギリになりました(すみません)。
とはいえ、やはり今年もパンク/ハードコアのリリースは豊作でしたよね。貧乏レコード屋生活に突入してから欲しいモノをみすみす買い逃さなければならないストレスと戦いつつも、レコード欲は衰えを知らず、人目を盗んで(自分の)店の棚からも結構ガッツリ抜き取っております。現物支給ってことで。
というわけで店の棚から抜き取った(万引きした)今年の名盤をピックアップしてみましたので、気になるモノがあったら是非チェックしてみてください。
そして「モノ」として手元に置いてみてはいかがでしょうか？ (record KNOX/橋本)

Record Shop BASE



①チフス/チフス
(SUPER FUJI DISC)CD



②THE KNOCKERS/KNOCKIN' BLUES
(STRAIGHT UP)CD



③RAKTA/回顧と展望-DISCOGRAPHY
(MOUSE)CD



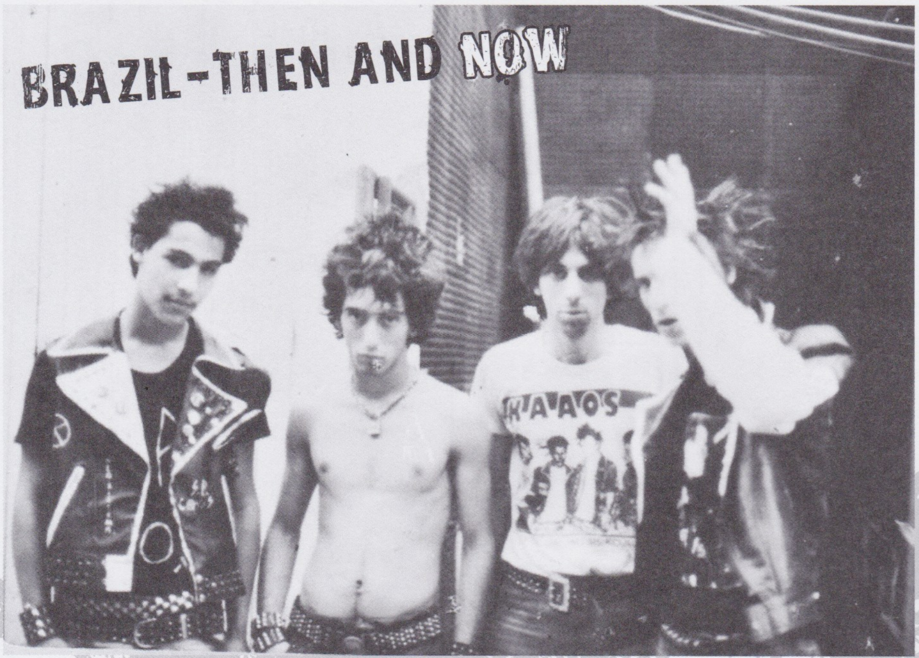
④SUBURBAN HOMES/ARE BORED
(TOTAL PUNK)LP



⑤BLAZING EYE/LONELY CORPSE
(LA VIDA ES UN MUS)7"

今年も現行注目バンドのリリースや新バンドの登場、再発音源等も色々とありました!!過去音源では日本のPUNK/HARDCORE史の重要作と言えるチフスの音源が遂に正式CDリリースされました!!
ここ数年のポスト・パンクの流れも定着しつつ、その中でも独自の路線で深化するブラジルのRAKTAの来日、スペインのBELGRADOも待望の来日を果たしました!!
KAPPUNK等のハードコア・パンクのイヴェントも精力的で、今年も海外からほぼ毎月のように多数来日!!手前味噌にはなりますが今年初めにBABY SHAKES 2度目の来日もサポートさせていただきました。
個人的には何故かZEXの来日を2回も見に行ってしまったり(笑)、心待ちにしていたバンドのリリースがあったり。発売までのワクワク感はいつになっても良いものですよね!!レコード屋でも初心忘れるべからずです。
そして何といっても今年のハイライトは、12月18日新宿アンチノックにて行われる『消毒GIG』VOL.163、VOL.164、GAUZEとLOS CRUDOSの2バンドによる昼・夜1日2公演のライヴでしょう!!この号が発売になる頃には終わっている事と思いますが、歴史的ライヴになることは間違いないでしょう!!
レコード屋なのにライヴの話ばかりになってしまいましたが、良いリリースは沢山あるので、ライヴ見て、EL ZINE読んで、良い音源に出会えてくれたらよいな〜と思います。 (Record Shop BASE/南)

BRAZIL-THEN AND NOW



S.P. CAOS

伝説的なバンド、SP CAOSのシンガーであるAnselmoはサンパウロ・ハードコアの先駆者の一人さ。彼は初期の最重要バンド、FOGO CRUZADOのベーシストでもあり、VIUVA VELVETでもプレイしていた。1995年からは、INOCENTESのベーシストとして活動中なんだ。

INTERVIEWED:Rafael Yaekashi

■僕の素晴らしき友人であるAnselmo、まずは、このインタヴューに応じてくれたことに感謝を述べさせてくれよ!そして、いつ、どのようにしてSP CAOSが始まったのかを教えてもらいたい。

「SP CAOSが登場したのは、83～84年のことだね。サンパウロ市に位置するサンタナで俺はメンバーと出会ったんだけど、当時、バンド・メンバーは既に揃っていた。まず、ゲームセンターが好きだったベースのPJと俺が知り合って、最高の友だちになったんだ。それで俺はSP CAOSのラインナップを知った。Vaniusがヴォーカリスト、Kinhoがドラム、Bobがギターだったな。だけどしばらくしてVaniusが事故で溺死してしまった。すごく悲しかったよ。メンバーとは友情を保ったままだったんだけど、あるとき彼らは俺にバンドのヴォーカルをやらないかと誘ってきたんだ。俺は過去にNEOSISTEMAというバンドをやっていたから、歌詞はあった。それで俺はこのグループに加わり、SP CAOSに名を連ねることになったのさ。そう、こうしてバンドはサンパウロ市サンタナのシーンに現れたんだ!」

■当時のブラジルの政治的状況はどんなものだったの?SP CAOSとして取り上げていたトピックスはあった?

「ブラジルの政策は常に、俺にとってはろくでもないものだったし、それは今でも続いている。独裁政治から移行していき、軍国主義から民主主義へと変化していく過程を俺たちは体験した。あの頃は、明らかな検閲がまだあったんだよ。制限されていたのさ、歌詞であろうと何であれ好きに表現することはできなかったんだ。ほとんどの歌詞、10曲中、9曲は俺が書いていたしアレンジしたのも俺さ。基本的に俺たちは社会階級や社会格差、治安といった問題について向かい合っていたことが分かるだろう。そして、そうした問題は今も尚、存在しているんだ。俺には戦争についての歌詞もある。シリアで何が起こっているか君も知っているだろう。世界は不運と悲しみで満ちているんだ。SP CAOSの歌詞のテーマは常に俺たちが直面していたこと、俺たちの現実、ブラジルだけじゃなく、世界中で起こっていることさ」

■現在でもアンダーグラウンドなバンドをやるのはとても大変なことだけど、君がやっていた当時はどうだったのか知りたいんだ!ブラジルのサンパウロで、1983年にバンドをやるっていうのは、どういうことだったのかな?他にはどんなバンドが活動していたの?

「ブラジルでバンドをやるということは犠牲的行為だな。すごく大変だし当時は文化的にもサポートがなかった。MTVは大きな力を持っていたけど、俺たちが出る機会は一度もなかったし、俺たちの音楽をかけてくれるラジオもなければ演奏する場所もなかった。システムの死を叫ぶSP CAOSみたいなバンドを、パーティに呼んで演奏してもらおうと思う奴なんてどこにもいないだろ?だから俺たちのショーは通常、リハーサル時だったんだよ。最高にイカしていたな。俺たちがリハーサルをしていると、何人か友だちがやって来て、それがショーになるんだよ。本当に楽しかった、あの頃が懐かしいな。当時、ハードコアがここのパンク・ロック・シーンに現れ始め、知られるようになっていった。バンドは少しずつファストな演奏をするようになっていったんだよ。そして、今でも活動し、リスペクトされているCÓLERAやRATOS DE PORÃO、OLHO SECO、INOCENTESといったバンドは既に活動していたな。それに俺は長いこと、INOCENTESでベーシストを務めているんだ。あと、すごくカルトだったバンド、FOGO CRUZADOでも俺は



Anselmoとドラマーだった Kinho　2016 年

未だにベーシストをしている。俺はこのバンドが大好きでね。当時はハードコア・シーンが形成され始めたところで、規模も大きく、KAOS 64といったバンドも登場してきたね。それからドンドン数多くのバンドが出てきたのさ。けど、そこには常に困難がつきまとっていた。今でも明らかな困難があるよね。演奏する場所は限られているし、特にここブラジルでは、バンドをやることに価値なんてないんだ。メディアもサポートしてくれないし、演奏できる場所も少しだけ、だから今ではDIYが機能しているんだよ。CDをレコーディングして販売するのも自分のショーでだったりね。ただ、少なくともここブラジルでは、そんな行動が評価されることはない。だからこそ、SP CAOSのこの音源には素晴らしい歴史的価値があるんじゃないかな!あの頃はろくな機材を持っていなかったからこそ、類い稀なクオリティのサウンドになったってのもある。ブラジルでバンドをやるのは、今も、そしてこれからも大変だろうね」



■1984年のデモが最近になって7インチのレコードで発売された。でも、どうやって32年も前にこの作品はレコーディングされたのかな?当時、いくつかのフォーマットでリリースされていたの?

「SP CAOSがCÓLERAのメンバーだったRedsonの自宅へ行って、一度のリハーサルで録音したものが、このデモなんだ。覚えているのは、当時はレコードを作るのが簡単なことではなかった。だからレコードを作るのは俺たちの夢だったんだよ。32年経って、友人でありNada Nada DiscosのオーナーであるMateus Mondiniからレコードにしてリリースしないかという提案があったんだ。最高だったね。レコードを作るなんて当時の俺たちには不可能だった夢が、実現したんだからさ」

■バンドが解散した理由は何だったのかな?SP CAOSのメンバーとはまだ連絡を取っている?あなた以外の人たちは音楽活動を続けていたのかな?

「バンドは短命に終わったけど、活動は激しかったし、色んなことをやった。そして84年に終わりを迎えたのさ。最近、SP CAOSのドラマーだったKinhoと連絡を取ってね、自宅に招いたんだ。一緒に写真を撮ったりしたよ。彼とはすごく仲が良かったからね。だから今でも彼とは友人さ。彼も喜んでくれた。他のメンバー、PJとBobとはおよそこの20年間、一度も会っていないんだ。ドラマーだったKinhoは営業の仕事に就いたから、解散後に音楽はやらなかったみたいだね。PJとBobも現在に至るまでシーンで見かけたことがないけど、彼らと話したわけじゃないから、音楽を続けていたかどうかはハッキリとは分からないな。俺はこの国で音楽キャリアを重ねてきたし、生活するために色んなこともしてきたよ。このインタヴューの最初の方で語ったように、ここではミュージシャンが評価されることはない。だから、もし俺が音楽だけで生活できるなんて言っても、それは空々しいだけさ。俺は音楽以外にも色んなことをしてきたが、幸運にも、その全ては俺がやりたいことだった。またやりたいと思うようなね。今回の7インチができたこともすごく幸せさ。32年前の夢が叶ったんだ!」

■当時から色んなことが変わりましたね!現在、あなたはどんなバンドを僕たちにオススメしてくれますか?

「今のバンドの名前は挙げられないな。俺の趣味は未だに古いバンドだし、彼らに飽きることなんて決してないからさ。UK SUBS、SHAM 69、DEAD BOYS、GBH、EXPLOITEDが好きだな。それにSLAUGHTER & THE DOGS、THE DRONES、日本で何回もプレイしたことのあるTOY DOLLSなんかも好きだね。昔はFOGO CRUZADOの大ファンでもあったんだ。だから今、そのメンバーとなって演奏できて光栄だね。音源のレコーディングも考えているから楽しみにしてくれよな。だけど、本当に今のバンドについては話せないんだ。クールなバンドもいるんだろうけどね。どうしても注目してしまうのはUK SUBSにDEAD BOYS、そうだ、あとはCOCKNEY REJECTSもね。77パンクはいいよね、本当に好きなんだ!」

■人生にパンク/ハードコアがなかったら、君はどうなっていたと思う?

「俺の教養や人格というのは、俺の両親によるところが大きくてね、絆の強い家族だったんだ。両親はいつも俺を支えてくれたし、家族のおかげでちゃんとした教育を受けられたのもありがたかったよ。プロ意識みたいな面では音楽やパンク・ロック、そしてバンドのINOCENTESによるところが大きいね。今ではINOCENTESのベーシストとして名前も知られるようになったし、多くの人たちが見に来てくれるようになった。Clemente、Nono、Ronaldoと共にINOCENTESのメンバーになれて光栄だし、MunizとAri、そして新しいヴォーカリストのDementeと一緒にFOGO CRUZADOをできていることも俺の誇りさ。音楽なしでは俺は生きていけなかった。他のことをやるヴィジョンなんて俺にはなかったしね」

■日本のハードコア・パンクを聴いて楽しんだりはしている?

「まず日本のシーンについて言いたいのは、俺は日本の人たちに感心しているってことだ。俺が動画で見る限り、彼らはとても熱狂的だし、とても誠実で礼儀正しいように思える。そして、最高にクールな音楽文化があるようだね。正直に言って、俺は日本のハードコアについて多くを知らない。だけど、誠実でイカしたバンドをやっているのだろうと想像している。俺はソニーで働いていたから、日本人と一緒に働いたことがあるんだ。多くの点で称賛に値する嘘偽りのない人たちだった。だから、日本のパンクスもそうだと思うんだよな」

■日本のEL ZINEの読者やSP CAOSのファンにメッセージはある?

「まずは、この32年前の物語を、手短にだけど話す機会を与えてくれたことに感謝したい。EL ZINEのスタッフとSP CAOSのファンにも感謝しているよ。嘘偽りない、そのラヴとリスペクトに対してね。Rafaelに対してもありがたいと思っているぜ。そして、SP CAOSの『Demo 1984』7"を手に入れてもらいたいな。みんなに楽しんでもらいたいんだ。この音源をレコーディングしてくれたRedsonにも感謝しているよ。君がいなければ、できなかっただろうからね。そしてリリースしてくれたNada Nada Discosと、読んでくれた君にも感謝しているよ!」

BRAZIL-THEN AND NOW



ブラジルはパラナ州の都市、マリンガ。Walter Rustukは、そのマリンガ出身の怒り狂ったクラスト・パンク・バンド、DISTANÁSIAのギタリストだ。メンバー編成や約10年に及ぶ活動、ブラジルのシーン、将来の計画について、彼がインタヴューに応じてくれた。
DISTANÁSIAとは、"長期に及ぶ苦痛、または、明らかな固有の苦しみによる身体的ないしは精神的な死"を意味している。

INTERVIEWED:Rafael Yaekashi

■バンドの歴史やディスコグラフィー、初めてのショーについて聞かせてよ。それとバンド名の意味についてもね。

「DISTANÁSIAの始まりは、確か2005年頃だったね。俺(Walter Rustuk)といとこのDenis Makaでリハーサルをするようになったんだ。80年代のバンドに似た、ピュアでシンプルなハードコアをやろうというアイデアの元にね。当時、俺たちの都市に殺到していたメロディック・ハードコア・バンドに対抗するためでもあったよ。当初は、俺たちのやりたがっていたサウンドに興味を持ってくれる人たちを見つけるのは、すごく困難なことだったな。だけど2006年の終わりに、初のデモを録って初めてのショーもやったんだ。メンバーはFernando CBがヴォーカル、Walter Rustukがギター、Ricardo Caverinhaがベース、Denis Makaがドラム。既にDISTANÁSIAという名前は決まっていたよ。"痛みに満ちた死、長期に渡る苦痛"という意味で、現代生活のアナロジーさ。2012年にREIKETSUとのスプリットをリリースするまでは、メンバー編成に関して若干の困難と変更があったね。2014年にはEP『Entre a Balança e a Espada/Between the Scales and the Sword』をリリースして、それが目下のところの最新作だね。今のラインナップはVictorがヴォーカル、Walter RustukとBrunoがギター、Juniorがベース、Denis Makaがドラムさ」

■メンバー全員、仕事はしている?それとも音楽で生活しているのかな?ブラジルでバンドをする上で一番大変なことは?

「みんな並行して仕事をしているよ。ブラジルのパンク/メタル・シーンでは自然なことだと思う。音楽だけで生活するのは大変だからね。特にエクストリーム・ミュージックだと、知っている人は限られるし、マス・メディアに登場することもほとんどないからさ。多分、バンド活動にすごく自由をもたらしてはくれるだろうけど、音楽で生活することを目標にはしていないよ。大変なことは、音源制作全般にかかる自己負担がデカいね。あとはバンドをみんなに知ってもらうことも。ツアーをしたり音源を流通させるのも難しい。特に主要な中心部から離れている、小さな町に住んでいる人にまで音源を届けることはね。ブラジルは大陸みたいに広いし、交通のインフラ整備も貧弱なんだ。おまけにお金もかなりかかる。だから、ブラジルのバンドは国内ツアーをするよりもヨーロッパ・ツアーをするのが普通なんだよ」

■歌詞のテーマは?どういう過程を経て書いているの?

「DISTANÁSIAの歌詞は、社会や日常の無関心、俺たちの惨めな人生における葛藤についてだね。普段は俺が作詞していて、練習を重ねながら楽曲やアイデアと合わせていく感じかな」

■DISTANÁSIAの最新作は7"EP『Entre a Balança e a Espada』?制作はどんな感じだった?仕上がりには満足している?

「デモをリリースしてからは、新しい音源のリリースで慌ただしくなってね。なるべくヴィニールで出そうと思ったよ。俺たちの一番好きなフォーマットだし、ファンのみんなもそうだろうしさ。まだ完成していない作品もいくつかあるんだ。2012年にはREIKETSUとのスプリットをリリースした。一緒にリリースするというアイデアは大いに受け入れられたね。曲を作る過程で、もう一人ギターが必要だなって感じて、それから俺たちは5人になったんだ!地元のスタジオでレコーディングして、ミキシングはKiko(REIKETSU、ESTÚDIO IMPR

OVISO)がやってくれて、マスターはDan Randall(Mammoth Sound)がやってくれた。ジャケットはHugo Silva(abacrombie.ink)が描いてくれたよ。たくさんのレーベルが共同で出してくれてね、嬉しかったな」

■強い影響を受けたバンドは?

「前述したけど、DISTANÁSIAはシンプルでダイレクトなハードコアをやるべく始まったんだ。最初のデモに、俺たちが今やっているノイズが集約されているから、あれを聴けばどんなバンドからの影響があったか気づくだろうね。過去の音源における最も潜在的な影響を挙げると、それは90年代のスウェディッシュ・クラスト・シーンになるよ。WOLFPACK、DRILLER KILLER、WARCOLLAPSEといったね。あとはアメリカのCONSUMEやSTATE OF FEARかな。だけど、俺たちの音楽的な嗜好はとても似ていてね、パンク・ロックやハードコアからメタルといった具合に多岐に渡るんだ。先入観を持つこともないし、スタイルに対するこだわりもないよ。ブラジルのラップもよく聴くくらいだからね。ありとあらゆる音楽から影響されているんだ」

■クラスト・パンク/ハードコアは君たちの人生にとって、どんな意味を持っているのかな?DISTANÁSIAはクラスト・パンク/ハードコア・バンドとして、そのアティテュードと共鳴している?活動の動機は何なんだい?

「パンク/ハードコアはその始まりからして、異議を唱える者としての性質を有していると、俺は思っている。ルールを受け入れることなく、一番大切なことは自問すること。パンクによってもたらされたシンプルなアイデア"Do It Yourself"なんて、排他的で弾圧的な社会の枠組みに対処する術を持たない人たちとって、すごくポジティヴな影響をその人生にもたらしてくれる。DISTANÁSIAは本質的にもパンク/ハードコア・バンドさ。音楽的な影響の如何に関わらずね。バンドをプレイする動機というのは、それが俺たち自身を最大限に表現できるから。歌詞やサウンドを通じてだったり、他のバンドと共演したり、リハーサル後にビールを飲んでちょっと話したり、そんなことがとても大切なのさ」

■今のハードコアと、君たちがバンドを始めたばかりの頃のハードコアとでは違いはある?

「俺たちはそんなに年寄りじゃないよ(笑)、だけどシーンの変化は何度か体験している。今ではバンドがレコーディングするのも、サウンドを広めるのも、インターネットを通じて異なるタイプのアーティスティックな表現をするのも簡単になったね。おかげでバンドの多様化とスタイルのミックスが促されている。例えば、アティテュードと見た目がパンクでも、サウンドがブラック・メタル寄りというバンドもいるし、メタル・シーンにいるバンドでも、パンク/ハードコアの自由意志論や抵抗の姿勢を尊重しているバンドが最近はよくいるよね」

■パラナ州やブラジル全土のパンク/ハードコア・シーンについて意見はある?良い面と悪い面は?サポートは受けられる?

「正確に言えば、パンク/ハードコア・シーンはパラナ州には存在しない。いくつかの街でショーが開催されることはあるけど、活動的なバンドはそんなにはいないんだ。だから俺たちは、パンク・バンドに関連した様々なイヴェントを開催している。メタル・コアやグラインド、スラッシュ、デス・メタルといったね。これはオーディエンスを多様化させようという試みでもあるし、ショーをもっと頻繁に継続してやっていけるようにするためでもあるんだ。ブラジルに強固なシーンがあるかは分からない。素晴らしいバンドに、興味深い人々やレーベルは国中にあるけれどさ。みんなよく連絡は取り合っているんだけど、移動にお金がかかりすぎるんだ。サポートもないけど、シーンは自分たちで事足りている。誰かがバンドを始めたら、ショーに足を運んで、レーベルはリリースの手助けをしたり、イヴェントの宣伝をする。音楽を聴くだけではなく、シーンに積極的に関わっているのは少数の人たちだけど、そういう人たちは行動を起こしているよ!」



■DISTANÁSIAの今後や新譜の予定は?外国やブラジルをツアーしたりしないのかな?

「最近は何本かショーの予定が入っているし、いつも演奏できる場所を探し回っているよ。今年の終わりまでにはサンパウロのクラスト・バンド、DISTORTIONとのスプリットをリリースする。もっと外国のバンドともスプリットを出したいんだけど、今のところパートナーがいないんだよね。誰か興味があったら連絡してくれよ。外国、アメリカ大陸でもヨーロッパでもプレイしたいけど、今のところ予定がないんだ。繰り返しになるけど、誰か誘ってくれないかな」

■読者のみんなにメッセージはある?

「まずは、載せてくれてありがとう!読者のみんな、地元のバンドを支持しようぜ。好きなバンドから音源を購入したり、コンタクトをとったり、広めたり、ドンドン関わっていこう!みんながいなけりゃシーンは成り立たないんだからさ!」

コンタクト
facebook.com/distanasia
distanasia.bandcamp.com

パンク/ハードコアは その始まりからして、異議を唱える者としての性質を有している



©eric.coutinho



"FRANCE BOMBS AGAIN!" from POLAND　The Third Volume

PSYCHO SQUATT

前号・前々号と掲載してまいりましたフレンチ女性ヴォーカル・ハードコア・パンク・バンド:PSYCHO SQUATTのインタヴューby Grzester、遂に最後となる第3回目でございます。…長かった(涙)。しかし本稿では、イスラムとの関係や移民問題、当地の右派政党:国民戦線、果てはEU等々、かなりディープに突っ込んだ政治的な話題も多くて、大変に興味深い内容となっています。

ただ、もちろん固い話しばかりではなく、ワインだとか観光情報についても語ってくれていますので、PSYCHO SQUATT/ギタリスト:Rudyの言葉の一つ一つを楽しんで頂ければ幸甚に存じます。　INTERVIEWED:Grzester　[grzester12@poczta.onet.pl]

■アナーキストの考え方は、今のフランスのパンクに浸透している?シーンは社会的な活動をしているのかな?ベジタリアニズムとアニマル・ライツはパンクスの多くが実践している?それとも隅に追いやられている?

「そうだな、90年代初頭にフランスでオルタナティヴ・ムーヴメントが終焉した後でも、残っていたパンクスは本当に政治的な活動に積極的だった。バンド、ディストロ、アンチ・ファシズム・グループ、アナーキスト・コレクティヴ、スクワット間での本物の繋がりが確立していたんだ。あの頃のパンクスのほとんどがベジタリアンでもあったね。しかしこの数年で全てが変わってしまった。ベジタリアニズムもアニマル・ライツも、優先すべき事柄ではなくなってしまったようだ。そう、今や隅に追いやられたと言えるだろうね」

■ディジョンのスクワットの歴史については聞いたことがあるんだけど、ディジョンに限らずフランス全土でスクワットは合法なの?それとも違法?君は今でもスクワットで生活しているのかな?

「この15〜20年の間に、ディジョンにはたくさんのスクワットが生まれたんだ。フランスでは違法だけど、所有者は立ち退きを警察に頼まないといけない。だから、所有者が遠くに住んでいたりすれば気にしないってわけさ。市が所有している場合だと交渉することも可能だね、俺たちがスクワットしていた工場みたいにさ(18年にも渡る闘争があったわけだけど)。だけど、ほとんどのスクワットは数ヶ月も保たないし、スクワットしていた人たちの多くが起訴されているんだ」

■ポーランドは単一民族で、パンク・シーンも同様だけど、フランスだとシーンに色んな国の人たち、人種が関わっているのかな?それとも"白人パンクス"だけ?

「フランスは多民族だと思うよ。だけどパンクにおいて、それは注目すべきところではないね。ヨーロッパの他の国や、南米、アメリカからやって来た人たちがバンドをやる例なんていくらでもあるし。ただ、その多くは白人だね」

■イスラムとの関係については?僕たちにとって、かなり危険な脅威だと考える?

「その質問に対して俺は、個人的な意見しか言えないよ(PSYCHO SQUATTの他のメンバーも似たような意見だとは思うけどね)。経済的な危機が起こると、いつだってアイデンティティの危機も起こると俺は考えている。人々は仕事や家を失うことを恐れ、そして自分たちを一番助けてくれるであろう、自身のコミュニティに閉じこもるのさ。俺はありとあらゆる宗教に反対だ。カトリックだろうが、プロテスタントだろうが、ムスリムも仏教もね…。それに人間を分類するあらゆるものにも反対だね。資本主義、人種差別、性差別、同性愛差別、宗教といったものさ…。最近、俺たちの暮らすこの国では国民戦線(※フランスの右派政党)みたいな奴らが勢力を伸ばしている。人々は、数年前までは恥ずかしく思っていたことですら、今では遠慮せずに言うようになった。現在、イスラムに注目が集まっていることは事実だね。みんなテロリズムを恐れているんだ。アラブの人々は自らのアイデンティティをその出自に求めている。問題なのは、彼らが宗教を再びアイデンティティとしてしまっていることなんだ。人間は宗教だけじゃないってのにさ!人間が他者との差異を探している限りは憎しみと戦争はなくならない。でも、イスラムよりも人類を脅かす危険があるのは確かだね。最たる脅威なのは日々の人類の活動だよ。この惑星と人々を破壊しようとするね」

■SCALP(※パンクスによる反ファシズム運動)のデモでは鳥の羽をまき散らしていたって聞いたことがあるんだけど、まるでインディアンの羽飾りのようにね。何か興味深い、珍しいシチュエーションってあったのかな?

「もちろん全てのデモを把握しているわけじゃないけど、君が言っているようなのは聞いたことがないな。友達にも聞いてみたけど、みんな知らないって言っていたし。SCALPが起こした最も暴力的なアクションは1989年のトゥールーズの町で、国民戦線のミーティングに爆弾を仕掛けようとしたことだな。俺たちの地元でもイカれたシチュエーションはあったね。今でも覚えているのは、国民戦線のミーティングを阻止するために、スタッフが200人いるところに30人で向かって行ったことさ。俺の人生で唯一、警察に守られていると感じたときだったな」

■ジャン=マリー・ル・ペン(※国民戦線の創始者)は昔、支持を得ていたけど、今では更に勢力を伸ばしているよね。国民戦線については前にも話しが出たけど、大まかに説明してもらえるかな?

「ジャン=マリー・ル・ペンは強力だったけど、当時の人々の多くは彼のことを危険だとみな

していた。彼が本物のファシストで、人種差別や反ユダヤ、反同性愛主義を主張しているのをみんな知っていたからね。それに1960年代のフランスとアルジェリアの戦争では、彼がアラブ人を拷問していたことも知られていた。当時、彼を支持していた人たちはすごく危険だったけど、多くはなかったんだ。彼に投票したことを周りに知られることすら恐れていたからね。だけど今では、全く異なっている。ヨーロッパのファシスト政党の多くは、自分たちが伝統的な政党であるように見せかけている。彼らは自分たちが人種差別主義ではないと主張し、暴力的なメンバーを党から追い出している。これがマリーヌ・ル・ペン(※ジャン＝マリー・ル・ペンの娘で、現在の国民戦線の党首)が父親を党から追い出した理由さ。そうして国民戦線が変わったことを人々に示し、今では国民戦線に投票したことを公言する人も多い。当然、俺たちはあの党に人種差別思想が残っていることを分かっているけどさ。党ナンバー2のフロリアン・フィリッポが、自身が同性愛者であることを発表したことも、新しい人たちを党に惹きつけているね。みんな国民戦線がファシスト政党だとは今や思っていないんだ。それが、何よりも危険なのさ」

■ヨーロッパは移民の流入の増加に直面しているけど、全ての国々が移民を歓迎しているわけではないよね。移民の制限が行われると思う?

「もちろんだとも!政府はもうこれ以上、フランスに難民が来てほしくないと考えているよ。フランス政府はイタリア政府と揉めているんだ。イタリアは自国だけではこの問題に対処できないと言っているけど(当然のことだよね)、フランスは、難民がいるのはイタリア領土だから、それは私たちではなく君たちの問題だ、と言っている。実際、フランス国内には右翼思想が増長してきていて、もし政府がより多くの難民の受け入れを了承したら、多くの国民が怒り出して、政府に嫌気を差すであろうことも、政府は分かっているんだ。そして移民への暴力行為や、国民戦線へ票が流れることを恐れているんだよ」

■ギリシャの経済危機について、君はこれをEU崩壊の始まりと見ている?個人的な見解はあるかな?EUが崩壊したら君は喜ぶ？

「驚くかもしれないが、資本主義がまだ存在している限りは、俺はEUには賛成だ。EUがなければ、ヨーロッパでの大規模な開発計画は実現できないだろう。例えば、トラックで運ぶのではなく、船舶によるコンテナ輸送の量を増やすために、フランス北部とベルギーの間に巨大な運河を掘る計画がある。…EU加入前では、アイルランドやポルトガル、ギリシャ、そして東ヨーロッパの多くの国々は現代的な先進国になることはできなかった。問題は、常にそうだけど、全ては銀行の繁栄とトレーディングのために巻き起こされていて、貧乏人は以前よりも更に貧乏になってしまうってことさ。君の質問に答えるならば、人々が自らの手で自分たちの生活をコントロールできるようになって、全ての国家が崩壊する日が訪れたのなら、俺は喜ぶだろうな」

■フランスと言えばワインだけど、どんなワインが美味しいのかな?パンクスにとってワインってどうなの?フランスのパンクスはよく酒を飲むのかな?アルコール絡みの問題が起こったりする?



「パンクスと酒!切っても切り離せない話だね。ここのパンクスはワインが好きであっても大抵はビールを飲んでいるね。俺が暮らしている地方はブルゴーニュ・ワインでとても有名だよ。ただ、かなり高騰してしまっていて、良い品質のブルゴーニュ・ワインは10ユーロくらいするんだ。だからワインを飲むのは家族と会うときくらいかな。ここのパンクスはかなり飲むけど、2、3年前からドラッグと売人が大きな問題になっているんだ。もちろん誰だって自分の人生を選択することができる。だけどアルコールとドラッグで頭のネジが緩んでしまえば、政治家を喜ばすことになってしまうからね!」

■パンク・ロックにはずっとのめり込んだまま?他のことを楽しむ時間はあるのかな?映画を見に行ったり読書をしたりとかさ。

「パンク・ロックだけってことはないな。俺たちは全員働いてて、子供もいるし、時には息抜きも必要だしね。PSYCHO SQUATTのメンバーのうち3人(David、Celine、そして俺)はもっとできる限り活動したいんだけどね。でも家族との生活や休息のための時間も残しつつ、バンド活動もするという、その両者の適切なバランスを取ろうとはしているよ。俺に関して言えば、読書が大好きだし、娘2人と一緒に博物館に行ったり、あとはたまにだけど、Malokaの友だち何人かと田舎道を何時間も散歩したりね！」

■僕は旅行するのが好きなんだけど、フランスでオススメの地域はあるかな?もちろんパリ以外でね。

「俺も旅行は好きだけど、行きたいところへ行く時間とお金がないんだよな。フランスでオススメの地域だって?そいつは君が何が好きかによるよね(海辺とか山とか)。俺が好きなのはブルターニュとバスクだね、海が好きなんだよ。コルシカ島(※地中海に浮かぶフランス領の島)は美しいけど、外国人をいつでも歓迎しているってわけじゃないな。フランスの最北部はそれほど綺麗ってわけじゃないけど、人間性がすごくいいんだ!ボルドー、トゥールーズ、リヨンといった都市も面白いけど、ナチがたくさんいるから気をつけてほしい」

■最後に、長年パンク・シーンにいて、最も素晴らしかった出来事は?個人的なことでも些細なことでもね。

「ワーオ、そいつは難しいな。数え切れないほどの素晴らしい瞬間があった、時には幻滅させられることもね。俺にとってパンクで最もナイスだったこと、それは20年も前にクソみたいなパンク・バンドで下手なベースを弾いていたCelineが、未だにそのバンドを夢中でやってて、愛らしい2人の娘がいるってことかな。本当に個人的なことだけどさ」



LASHING SPEED DEMONS VOL.24

MERCYFUL FATE

EL ZINE、今回はデンマーク特集ということで、このページも乗っかることにしました。…で、当然ながら(?)MERCYFUL FATEとその周辺です。近年はそれほど活発とは言えないキング・ダイアモンド様だけど、80年代は一点突破な勢いがあったし、音楽的にも人脈的にも非常に幅広くユニーク。今回もどうかよろしくお付き合いください。

TEXT:大越よしはる

MERCYFUL FATEは1982年にデビューしているが、その人脈の起点は77年にコペンハーゲンで結成されたパンク・バンド、BRATSに遡る。結成時のメンバーは"フランツ・デ・ザスター"ことマイケル・ゴルム(ヴォーカル)、"ハンク・デ・ヴァンク"ことレネ・クロルマーク(ギター)、"ミッキー・ラット"ことマイケル・ヒロップ(ベース)、"エディ・ヘアカット"ことミラン・バルスガード(ドラム)の4人。

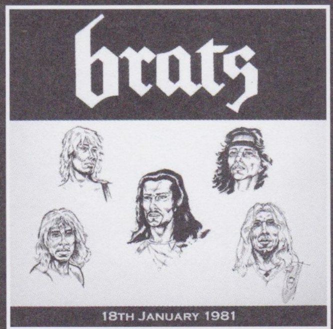
初期のBRATSは、まっとうな(?)パンク・ロックをプレイしていたらしい。しかし79年には解散状態となり、ハンクを残してメンバーは一新されることになる。この時期のBRATSはハンクを中心に、"イェンス・レオンハート"ことイェンス・ハーンステッド(ベース、ヴォーカル)、ラーズ"モンロー"ニボ(ドラム)のトリオ編成だった。

この当時のBRATSの音源は、2008年に『THE LOST TAPES:COPENHAGEN 1979』としてリリースされている(今では入手困難だが、とりあえずネットでは簡単に聴ける)。この時点でもかなり直線的なパンク・ロックで、後にMERCYFUL FATEでメタリックな速弾きを聴かせるハンク・シャーマン(ハンク・デ・ヴァンク)のギターもかなりシンプル。



その後マイケル・デナー(ギター)を迎えてギター2本の4人編成となったBRATSはデンマークCBSとの契約を得て、1980年にアルバム『1980』(そのまんま)をリリースする。この時点で、バンドの音楽性はパンク色を残しながらもハード・ロック/ヘヴィ・メタル方面に舵を切っていた。79年に英国で勃発したNew Wave Of British Heavy Metal(本誌VOL.16参照)の影響があったことは間違いないだろう。結果的に、当時のBRATSはメタルパンクの始祖のひとつとも言えるような音楽性にシフトしていた。このアルバムは90年代以降何度か再発されているが、『THE LOST TAPES:COPENHAGEN 1979』同様、現在は入手困難。ただし、これまたネットでは全曲を聴くことが出来る。





『1980』では、のっけからイェンス・レオンハートのシャウトが炸裂。ハンク・デ・ヴァンクのギターもメタリックな速弾きを聴かせるようになっていて、英国のANGEL WITCHや初期IRON MAIDENあたりを更にパンク寄りにしたような感もアリ。ヴォーカルの下手さ加減や演奏の整合感のなさは、一部本誌読者様にはかなりアピールするのでは(?…既に持ってる人も多いと思うが)。フライングVが束になってるジャケットもかなりキている。

『1980』のリリース後、マイケル・デナーが脱退(その後DANGER ZONEを結成)。カーステン・ヴァン・ダー・フォルシング(ギター)、そして専任ヴォーカリストとして"キング・ダイアモンド"ことキム・ベンディクス・ペーターゼンが加入する。

キング・ダイアモンドも、70年代からのキャリアがあるシンガーだった。BRAINSTORMというハード・ロック・バンドでシーンに登場したのはBRATSより早く、パンク・ムーヴメント以前の1974年(なのでここを今回の話の起点とするというのもアリなんだけど、連続性で考えるとMERCYFUL FATEへの流れはやはりBRATSから語るべきだろう)。

その後キングは79年にBLACK ROSEを結成する。BLACK ROSEはキーボードをフィーチュアした5人編成で、結成当時はDEEP PURPLEのカヴァーをレパートリーとしていたという。活動当時には音源リリースのなかったBLACK ROSEだったが、80年9月のリハーサル音源が2001年に『A NIGHT OF REHEARSAL』(そのまんま)としてCD化され、聴くことが出来る(コレは現在でも入手可能)。



当時の写真を見ると、キングは既に不気味なメイクをしていて、手に髑髏を持っていたりと、後のMERCYFUL FATEと同じようなシアトリカルなスタイルだったことがわかる。ただしMERCYFUL FATEの特徴となるあの超絶裏声唱法は、BLACK ROSEではほとんど聴かれない。リード楽器がギター1本とキーボードということもあって、音楽性自体もツイン・ギターのMERCYFUL FATEとはかなり違う(『A NIGHT OF REHEARSAL』では、オランダのヴェテラン・GOLDEN EARRINGの代表曲「Rader Love」をカヴァーしている)。

BRATS加入後、当然ながら(?)キング・ダイアモンドはバンドがそれまでに演奏していたパンキッシュな楽曲を歌うのを嫌がった。バンドは自然と、よりメタリックな方向に向かうことになる。この頃のデモは、2010年にLP『18th JANUARY 1981』としてリリースされている(コレはこの原稿を書いている時点でまだ入手可能。興味のある人はRECORD SHOP BASEにメールしよう!)。

この時点で、BRATSの音楽性はほとんど純然たるヘヴィ・メタルに転換している。『18th JANUARY 1981』に収録されている「Love Criminals」や「Combat Zone」といった楽曲は、80年代後半には"MERCYFUL FATEの未発表曲"としてブート化されていたモノだった。それだ

けでなく、後のMERCYFUL FATEのレパートリーと歌詞だけ違うという曲も多い(しかも82年のデビュー・ミニ・アルバム『MERCYFUL FATE』ではなく、それ以降のアルバムに収録される曲)。このデモが録音された81年1月の時点で、バンドの実態は既にMERCYFUL FATEだったと言っても過言ではないだろう。

『18th JANUARY 1981』では、後のMERCYFUL FATEの特徴となるキングのイカレたファルセットもかなり前面に出ている(まだ82年以降ほどではないが)。ともあれBRATSにキングが加入した時点で、何かのケミストリーとかマジックとかが働いたように思う。元々ハード・ロックを演奏していたBLACK ROSEの音楽性がMERCYFUL FATEにほとんど反映されていない(強いて挙げればオカルティックな歌詞)のに対して、元来パンク・バンドだったBRATSの楽曲がその後MERCYFUL FATEで転用されているのも、実に印象的だ。

かくてハンク・デ・ヴァンクは"ハンク・シャーマン"と改名し、BRATSは完全にヘヴィ・メタル・バンドとなっていた。しかしデンマークCBSはバンドの新しい方向性を嫌った(パンクだメタルだ云々のレベルではなく、もっとポップでコマーシャルな音楽性を望んだらしい。NWOBHMの時代に、その判断は完全に誤っていたとしか思えない)。CBSの拒絶を受けて、イェンス・レオンハートとラーズ・モンローとカーステン・ヴァン・ダー・フォルシングはバンドの将来性を疑ったようで、BRATSを脱退する。そこでマイケル・デナーが復帰。更にDANGER ZONEでマイケルと活動していた"ティミ・グラバー"ことティミ・G・ハンセン(ベース)、そしてヤン・ムーセン(ドラム)が加入、バンドはMERCYFUL FATEとして生まれ変わった。

MERCYFUL FATEに移行してからは、単にパンクの影響から脱するだけでなく、歌詞の内容もまた様変わりして行った。簡単に言えばサタニック/オカルティックということだ。BRATS時代の楽曲が新たな歌詞と共に新たな曲名を得て行ったのを見れば、それは明白だった。「Love Criminals」→「Into The Coven」、「Night Riders」→「Curse Of The Pharaohs」、「Powers Of Darkness」→「Return Of The Vampire」といった具合。

その後ドラマーがキム・ラッツに交代したMERCYFUL FATEは、デンマーク内外で注目を集めることになる。オランダのインディー・レーベル、レイヴ・オン・レコーズとの契約を得た時点では、既にイギリスにファンクラブがあるほどの人気だった。

そしてバンドは1982年9月にオランダでレコーディングを行ない、直後にデビュー・ミニ・アルバム『MERCYFUL FATE』をリリースする。バンドのサウンドはこの時点で既に沸点に達していた。A面1曲目「A Corpus Without Soul」からいきなり炸裂する、ハンク・シャーマンによる整合感のないキレまくりの速弾きと、キング・ダイアモンドの常軌を逸したファルセット・ヴォーカル。メロディアスでハーモニーを重視したマイケル・デナーのギターも、ハンクのプレイと好対照を成していた。



キングのヴォーカルは、本当に常軌を逸したモノだった(しかも白黒メイクのあのルックス。『MERCYFUL FATE』裏ジャケではほとんどパンダ…)。中〜低音域を中心とした地声では、自分が望むようなハイトーンが出せない…というのがあったのだとは思う。多分ロブ・ハルフォード(JUDAS PRIEST)のように歌いたかったであろうことは、後にトリビュート・アルバムで披露したJUDAS PRIEST「The Ripper」のカヴァーを聴けば容易に理解出来るが、「それなら裏声で歌っちまえ」というのは、発想があまりに斜め上というか。キングは初期URIAH HEEPのヴォーカリストだったデイヴィッド・バイロンも好きだったということで、URIAH HEEPが前面にフィーチュアしていたファルセットのコーラスもヒントになったのかも知れない。

ともあれ『MERCYFUL FATE』は、あくまでアンダーグラウンドとはいえ人気を博し(当時MERCYFUL FATEに夢中になった若いファンの中にMETALLICAのラーズ・ウルリッヒがいたというのは有名な話)、バンドは新たにオランダのメタル系インディー・レーベルの大手であるロードランナー・レコーズとの契約を得て、フル・アルバムの制作に乗り出す。アルバムのレコーディングは1983年7月に行なわれ、83年10月にMERCYFUL FATEの1stアルバム『MELISSA』がリリースされた。

個人的には、初めて聴いたMERCYFUL FATEのアルバムがコレだった。いわゆる"ジャケ買い"だったが、中身を聴いてぶっ飛んだ。『MERCYFUL FATE』に較べるとプロダクションも向上してややメロディアスになっているとはいえ、それでもヒステリックなギターと超ヒステリックな裏声ヴォーカルが疾風怒涛の勢い+唐突な展開で飛び出してくる。「Evil」「Curse Of The Pharaohs」「Into The Coven」「At The Sound Of The Demon Bell」「Black Funeral」「Satan's Fall」と、曲名の禍々しさもとんでもない。



1984年3月に予定されていた全英ツアーは諸事情でキャンセルになったものの、バンドは84年5月に再びレコーディングを行い、前作から1年も経たない84年9月には2ndアルバム『DON'T BREAK THE OATH』をリリースする。音楽的には更にメロディアスでプログレッシヴになっていたが、この時点でもBRATS時代のレパートリーが転用され





ていたのだから驚きだ。ジャケットとタイトルはある意味サタニズム丸出しながら、曲名や歌詞は『MELISSA』に較べると少々オブラートにくるんだような感もある。

人気があったとはいえあくまでもマニアックなメタルのサークル内での話だったMERCYFUL FATEだが、『DON'T BREAK THE OATH』はスウェーデンのチャートで33位のヒットを記録する。このアルバムまで（つまり最初の解散前、オリジナル・メンバーの時代）が、MERCYFUL FATEの黄金時代だったと思って間違いないだろう。

しかし、オリジナル編成でのMERCYFUL　FATEの活動は長続きしなかった。『DON'T BREAK THE OATH』のリリースを受けて、いよいよ本格的なアメリカ進出を目論んだバンドだったが、1984年11月にMOTÖRHEADの前座として乗り出したアメリカ・ツアーは、プロモーターの不手際により不入りと公演キャンセルを繰り返すことになる。

更に、バンド内でも音楽的方向性を巡る対立が深まって行く。ブチ切れたリフとソロで作曲・演奏面を牽引していたハンク・シャーマンが、あろうことかコマーシャルな音楽性を志向し始めたのだった（『MERCYFUL FATE』裏ジャケットではレザーで身を固めていたハンクが『MELISSA』では何故かアロハシャツだったあたりに、その萌芽はあったのかも知れない）。当然キング・ダイアモンドがポップ化に同意するはずもなく。結局ハンクはバンドを脱退し、それが引き金となってMERCYFUL FATEは85年4月に解散する。『MELISSA』の日本国内盤がリリースされたのは85年の春だったが、その頃にはもうバンドがなかったというワケだ。

MERCYFUL　FATEを飛び出したハンク・シャーマンは実際にコマーシャルなサウンドを追求し、新バンド・FATEを結成する。キーボードをフィーチュアしたハード・ポップで完成度は高かったが、本誌的にはほとんどかすりもしない音とも言える。

一方キング・ダイアモンドは、マイケル・デナーとティミ・G・ハンセンを引き連れて新バンド・KING　DIAMONDを結成する。ハンクに代わって才人アンディ・ラ＝ロック（ギター：元E.F.BAND）をフィーチュアし、ドラマーには元GEISHAのミッキー・ディーを迎えた（キム・ラッツはミュージシャンを廃業して郵便局員になったという）。

1985年7月にレコーディングされ、クリスマス・シーズンに合わせた企画モノっぽいシングル「No Presents For Christmas」リリースを経て86年2月に登場したKING DIAMONDの1stアルバム『FATAL PORTRAIT』はMERCYFUL　FATE時代とあまり変わりない音楽性だったが、サタニック色をやや後退させた（KING　DIAMOND結成の頃まで悪魔崇拝を公言していたキングだったが、当然リスクは大きかったと思われる）一方で、ハンクとはまた違ったアンディのリード・ギターとミッキーのパワフルなドラムは異彩を放っていた。『FATAL　PORTRAIT』はスウェーデンのチャートで33位のヒットとなり、KING　DIAMONDは順調なスタートを切る（以後、スウェーデンやフィンランドではトップ40の常連となる）。





そして1987年10月の2ndアルバム『ABIGAIL』以降、KING　DIAMONDはキング・ダイアモンドの発案によるホラー・ストーリーをアルバム1枚ごとにフィーチュアして行くという…コンセプト・アルバムばかりを発表する特異なメタル・バンドとして独自な地位を築く。『ABIGAIL』は全米チャートの123位と、その音楽性からすれば意外とも言えるヒットとなった。

しかし『ABIGAIL』を最後にマイケル・デナーとティミ・G・ハンセンが脱退。以後のKING DIAMONDはキングとアンディ・ラ＝ロックの双頭バンドとして活動しつつ、メンバー交代を繰り返すことになる。



1988年9月、KING DIAMONDは『THEM』をリリースし、全米チャートの89位にランクイン。ミッキー・ディーは脱退したが（その後DON DOKKENを経てMOTÖRHEADに参加）、バンドは89年8月に『CONSPIRACY』（全米111位）、90年10月に『THE EYE』（全米179位）、12月に『IN　CONCERT 1987：ABIGAIL』（ライヴ盤）と、リリースを続けていく。

KING　DIAMONDは野心的なコンセプトを持った素晴らしいバンドだったが、ハンク・シャーマンとマイケル・デナーのツイン・リードをフィーチュアしたMERCYFUL　FATEとはまったく別のバンドでもあった。一方でFATEを脱退したハンクとKING　DIAMONDをクビになったマイケルはZOSER MEZ他のバンド/プロジェクトで度々活動を共にするようになる。その音楽性は“キングさえ加わればMERCYFUL FATE”というモノだった。

結局1992年にMERCYFUL FATE再結成が発表され、キング・ダイアモンド、ハンク・シャーマン、マイケル・デナー、ティミ・G・ハンセンというオリジナル・メンバーにKING　DIAMONDのスノーウィー・ショウ（ドラム）というメンバーで、93年6月にアルバム『IN THE SHADOWS』がリリースされる（ラーズ・ウルリッヒもゲスト参加）。ハンクのギターがリードする、往年を思わせる音楽性に、オールド・ファンは万歳三唱となった。



以後キングの活動は、キングとアンディ・ラ＝ロックを中心にコンセプト・アルバムをリリースし続けるKING DIAMONDと、キングとハンクを中心に楽曲単位で勝負する再編MERCYFUL　FATE…



という2本立てとなる。それも長くは続かなかったのだが。

『IN THE SHADOWS』リリース後にはティミ・G・ハンセンがMERCYFUL FATEを脱退するが、バンドは1994年10月にアルバム『TIME』をリリースする。一方95年6月にはKING DIAMONDが久々にコンセプト・アルバムではない作品『THE SPIDER'S LULLABYE』をリリース。

そして96年には8月にMERCYFUL FATEが『INTO THE UNKNOWN』をリリース。更に9月にはKING DIAMONDが再びコンセプト・アルバム『THE GRAVEYARD』を…と、両バンドのリリースが相次ぐことに。

更に1998年には2月にKING DIAMONDが『VOODOO』を、6月にMERCYFUL FATEが『DEAD AGAIN』をリリース…と、両バンドの活発な動きは続いた。しかしMERCYFUL FATEからは『INTO THE UNKNOWN』リリース後にマイケル・デナーが脱退していた。キング・ダイアモンドのヴォーカルとハンク・シャーマン+マイケルのツイン・リードこそがMERCYFUL FATEだったのだとすれば、マイケル脱退の時点でMERCYFUL FATEは(再び)終わっていたのだ。結局MERCYFUL FATEは、次作『9』(99年7月)を最後に再び解散となる。その後のMERCYFUL FATEは折にふれて再結成ライヴを行なっているが、パーマネントな活動はしていない。

MERCYFUL FATEの再度の解散を受けて、キングは改めてKING DIAMONDの活動に専念する。2000年6月には『HOUSE OF GOD』を、02年1月には『ABIGAIL II:THE REVENGE』、03年10月には『THE PUPPET MASTER』、04年9月には『DEADLY LULLABYES』(ライヴ盤)、07年6月には『GIVE ME YOUR SOUL…PLEASE』とアルバムをリリース。『GIVE ME YOUR SOUL…PLEASE』は全米174位と、久々に全米トップ200に入るヒットとなった。

しかし、それも続きはしなかった。2010年にキング・ダイアモンドが心臓を患ったことで、KING DIAMONDの活動は停滞する。以後の活動は散発的なものとなり、『GIVE ME YOUR SOUL…PLEASE』以来、KING DIAMONDのアルバムは10年近くリリースされていない。

幸い、キングの体調は無事に回復しているようで、17年にはKING DIAMONDとして10年ぶりとなるアルバムのリリースがアナウンスされている。今年還暦を迎えたキング、今後も無理なく活動を続けて欲しいモノだが。

ともあれ、MERCYFUL FATE/キング・ダイアモンドがその後のシーンに与えた影響は大きい(BRATSも今となってはメタルパンクの名バンドと言えるが、同時代的には相当マイナーな存在だったので、後のメタルパンク勢に直接影響した部分は多分大きくなかったと思う)。何より大きいのは、ブラック・メタルへの影響だろう。

90年代以降のブラック・メタル勢は、音楽的にはVENOMやBATHORY、それにHELLHAMMER〜CELTIC FROSTといった連中の影響が大きく、ダークではありつつメロディアスで美麗でさえあったMERCYFUL FATEの音楽性はそれほど大きく影響しなかったと思うが、キリスト教的な価値観にノーを突きつけて悪魔を賛美するような歌詞、そして何よりもキングの異様なメイクが後のブラック・メタルに与えた影響は(HELLHAMMER〜CELTIC FROSTのトム・G・ウォリアーと並んで)絶大だったはずだ。『MELISSA』の裏ジャケットで見られるキングの姿は、まさにブラック・メタラーそのものに見える。

また、リフ押しの楽曲を猛スピードで複雑かつ唐突に展開させる…というのは初期のMETALLICAが得意としていたが、コレについてもNWOBHMのDIAMOND HEADあたりと共にMERCYFUL FATEの影響は大きかっただろう。METALLICAは後にMERCYFUL FATEのカヴァーをメドレーで録音しているし、ラーズ・ウルリッヒが『IN THE SHADOWS』にゲスト参加していたのは先に書いたとおりだ。

ついでに言えば、初期KING DIAMONDのドラマーだったミッキー・ディーはその後MOTÖRHEADで剛腕を振るうことになる。そしてアンディ・ラ=ロックがデス・メタルの元祖DEATHのアルバム『INDIVIDUAL THOUGHT PATTERN』(1993年)に参加し、その出来栄えに大きく寄与したのも知られているところだろう。

KING DIAMONDと再編MERCYFUL FATEはともかくとして、BRATS〜初期MERCYFUL FATEの流れはEL ZINE的にもけっこうアリだと思う。個人的に最高だと思う超名曲「A Corpse Without Soul」は編集盤で聴けるので、興味を持った読者様は是非トライしてみてください。それではよいお年を!



Live Conic Split 7"EP

Karasu Killer RecordsのRafaelが俺に、この2バンドによるスプリットのレヴューを書いてくれと頼んできたんだ。でも俺は、型にはまってて中身が空っぽだったり、千回も読んだことのあるような馬鹿げたテキストを繰り返したくはないからね。まぁ、そのうち分かるさ。ブラジルの首都ブラジリアでライヴ録音され、そして2016年にリリースされた、このハードコア・パンクの音源について語っていこうじゃないか。

TEXT：Pedro Poney(VIOLATOR)

ヴァーチャルこそが、この時代の象徴だ。このレヴューの誘い自体が、そんなヴァーチャルと現実との距離を縮めるべく依頼されたものだからさ。だけど、ヴァーチャルの中にも現実がある。では、ヴァーチャルの反対とは何か?それは実存だ。

ロックはヴァーチャルとは正反対のもの。ロックにとっては実存が全て。なぜなら、ロックはサウンドの波を実存する肉体に浴びて、衝撃を受けることに意味があるからだ。

肉体と実存が多くを要望するように、ロックもまた、スペースというやつを要求している。俺たちが語る神話においても、俺たちはそういった会場を礼拝しているだろ?そう、CBGBやMax's Kansas City、Hammersmith Odeon、Fillmore…都市は独自のスペースを育んでいく。そしてブラジリアでは、その場所がConicにあたるんだ。

そこは、ギャラリーやオフィスの建ち並ぶダウンタウン・エリアの中心部。ブラジリアの極端な区画化の結果、現代的ユートピアの狂った合理主義、その偽りのモデルによってConicはもともと、Sector South Amusementと呼ばれていた(意図的ではないが実に皮肉なことだね)。

そして"DIY理論"に基づいたパンク・ロックの究極の目的が、自律的に活動を企画して自分たちで楽しむ、ということならば、まさにConicはそのためのスペースだ。

俺たちがアンダーグラウンド・シーンと初めて出会ったのもConicだった。このスペースにはいつも、アンダーグラウンド世界のものが並んでいた。ヘヴィ・メタルのレコード・ショップにスケート・ショップ、ヒップホップもコミックも、そこにはあったんだ。

しかし、Conicは単なるアンダーグラウンドなグッズを売買するスペースではない。そこでは、俺たちがショーやイヴェントを企画したり、社会的運動のミーティングや、色んな政治的活動をする場所でもあるのさ。



その一方で、粗暴なショーに汚くて混雑したバー、売春宿、ポルノ劇場といった、街に存在できない、イカレた側面も有しているのがConicなんだ。

そんな場所でGALINHA PRETAとTERROR REVOLUCIONÁRIOは2015年10月にショーを行い、それをレコードにした。どちらのサイドも5分足らず、しかし完璧なプロダクション・クオリティだ。

もしロックが血肉を必要とするならば、ハードコア・パンクは血肉に激しく訴えかける、最も過激なヴァージョンの音楽と言えるだろう。DISCHARGEのBonesのギター・サウンドはまるで腹にチェインソーを突っ込まれたような感覚があるだろ。そしてどういうわけか、この2バンドはDISCHARGEの落とし子でもあるのさ。

GALINHA PRETAは、ブラジリアン・パンクの第一世代のバンドを、21世紀にアップデートさせたようなサウンドだ。CROSSFIREやPSYKÓZEといったバンドの魅力的なシンプルさを、みんな知っているだろう?俺たちが生きる世界についてのシンプルな歌詞は、退屈な毎日に対抗する生々しいアプローチとなり得るんだ。サウンド・マスターにしてメンバーのFrangoは、良いジョークは強力な武器であるということも理解しているからな。

TERROR REVOLUCIONÁRIOのサウンドはもっと暴力的。DOOMやEXTREME NOISE TERRORみたいなクラスト・コア・バンドが主だった影響源。しかしアンダーグラウンドにおいて、過酷な17年にも及ぶ歴史を有している彼らは、ブラジリアン80'sパンクやドロドロのグラインド・コア、そしてクロスオーヴァー/スラッシュからの影響も蓄積させてきた。"Dying/From"(なんて曲名だ!)では、ギターを暴力装置にしてしまう才能を、ギタリストのCaptain Barbosaが見せつけてくれている。

ここブラジルでよく耳にする、典型的でありがちな、"Hardcore Chaos"だの"Free Hardcore"といったものを超越し練習を重ねた先にある楽曲が収録されているからこそ、こいつは特別なレコードと言える。言葉で定義するのが難しい何か、恐らくそれのベストな表現は"何かを賭した"になるのだろうけど、そいつが詰まっているんだ。

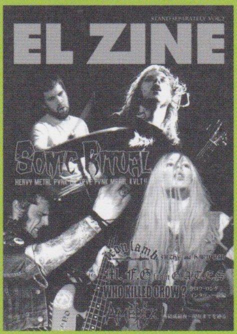
都市は生きている。俺たちも生きている。アンダーグラウンド・シーンではこの2つ、都市と俺たちが交差しているのさ。GALINHA PRETAとTERROR REVOLUCIONÁRIO、そしてConicがずっと続くのを願っている。アンダーグラウンド・シーンもね。

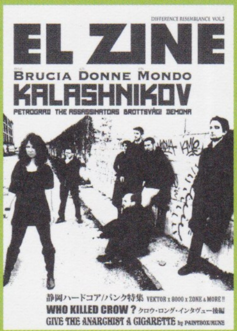
初めてロックを好きになったときから、俺はConicと共にある。俺が初めてロックTシャツを買った場所でもあるんだ。そのTシャツには、Kill 'Em Allと描かれていたのさ。

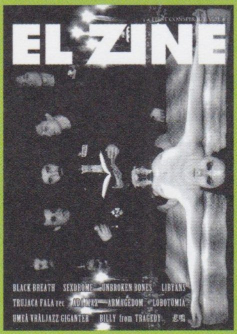




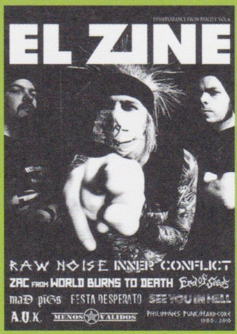


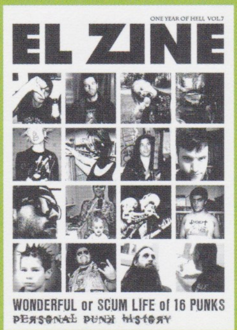


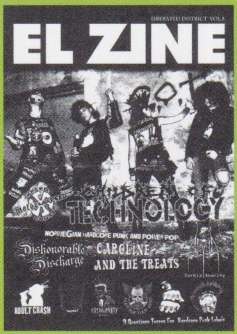


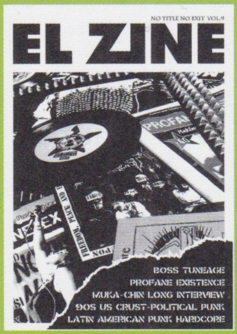




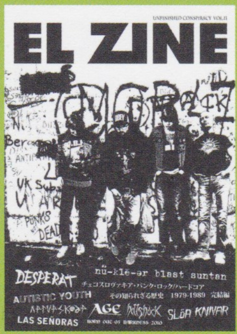


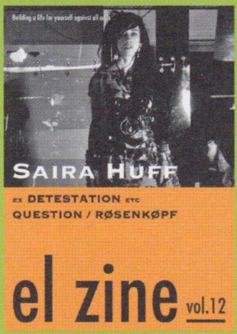


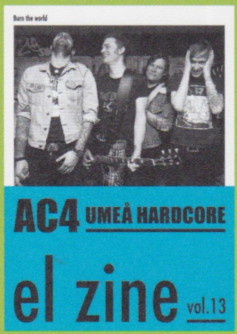








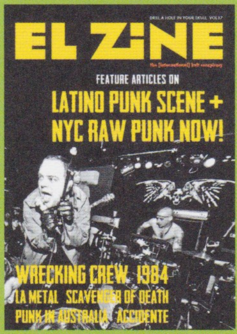






















SOLD OUT : VOL.0, VOL.1, VOL.2, VOL.3, VOL.13

SMALL STOCK : VOL.4, VOL.7, VOL.19, VOL.20

THANKS FOR READING! FOR PUNKS! BY PUNKS!

editor's notes

今号は期せずして再結成バンド特集っぽくなりましたが、表紙をどうするか?GAかDS-13かkriegshögか、もう悩みに悩みまして(おまけに3バンドとも「俺らが表紙だよね?」と聞いてくるという…笑)、結局表紙がGA、裏表紙がDS-13 & kriegshögになりました。どうしてGAにしたかと言うと、あのGAパッチを背負った後姿の写真を見た瞬間、「お、なんだかオシャレだな!」と思ったからです。…ハイ、それだけです(汗)。
そんなわけで、今年も大変お世話になりました!2017年もヨロシクね!Have A Nice Shogatsuuuu!!!!!!!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した
EL ZINE vol.23　2016年12月22日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com
※バック・ナンバーはパンク/ハードコア取扱店　又はhttp://www.juzasha.comにてお求めになれます

DS-13 Photo by Melina Hägglund



kriegshög Photo by Nakano Kenta



EL ZINE VOL.23 600 YEN





N

the [international] kvlt conspiracy EL ZINE REUNION AND FAREWELL VOL.23



EL Z

GORIL

D.S.-13 kriegs

Riot City Records
Simon Edwards interview

RECORDSHOPS RECOMMENDED RECORDS 2016 レコード屋さんのオススメ音盤